



詩誌 骨おりダンスっ Vol.09

巻頭骨

4 八潮 れん  
昇つていく旨味もしくはOS

寄稿

7 柏原寛  
ゆるしの

9 野村龍  
Tuesday, June 05, 2012 冠

10 海埜 今日子  
骨灰 こぼれかたを

12 小笠原 鳥類  
生物学の事典に、もし版面が多く登場しているのであれば……

連載

16 小田原 のどか  
むりえわ

17 河野 聡子  
突然最終回

18 T.I.P.I. — 山田亮太 カニエ・ナハ 橘上 —  
Re-18

迷考書簡

44 鈴木 一平 金子 鉄夫  
迷考書簡 vol.2

mistake?

50 ゲスト 依田 冬派  
mistake? vol.1

ダンサーズっ

57 兼柳 綾  
かぞえる

59 疋田 龍乃介  
バーストホーム

62 金山 大地  
(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

65 鈴木 一平  
抱擁の時間がひびいている

短歌

68 飯塚 距離  
結構胴

ホネカイブっ

71 甘楽 順治  
「福田和夫」

「ちちこわし」書評

74 暁方 ミセイ / 屑山 屑男  
鈴木 阿部 / 田中 宏輔

# 卷頭骨

か ん と う こ っ

## 昇っていく旨味もしくはOS

八潮れん

服を脱がせるのがすごくうまいの  
唇を褒められる

初めての味がするって

ぞくぞくしちゃう

タクシーの中でぼろきれについて話す

ベッド・シャンパーニュを後ろからひっかけられて

お祭り最中 目がくらみ

思いつめるなって思いつめるな

年中忙しいとほざいて

つくづく人のことはおじやまさま

あとさき考えず神経質な顔つきで

OSは踊らない

OSの折れないさま

ハードボイルドを作って

どうしても？を！に変える

無口な味やにおい

それらは否応なしに見られてしまうもの

ときには先生のいうことを

ききたくないけど

泣きながらきいてしまう

肉肉と騒ぐな

OSにひっかかり 略号に守られ

皮につつまれてあるわたしたち

不安と下腹部はいつしよに動いて

このごろは関節が痛いたい

次は何につけこまれるのか

サトられてはいけない

じゃあ何につけこもう

わたしはね スキを見つけるのが上手なの

人を食べるということ

股の間にぶらさがった

二〇一〇のファイルはすごかった

小間切れがなかよく寄り添う

この時点の骨組みでは

この時点大明神（！）

直感だよつの一振りです

覗き屋みたいに昇っていつちやう

血液検査の結果は来週の火曜日

なのだけれど

寄

カ

稿

コ

ウ

ゆるしの

柏原 寛

くたびれたちだまりのほとりで肉の信管を拾った  
事件前夜の露にうたれた野菊のふもとにおちていた  
帰りの電車には酔って、ガラス戸にうつる顔がつきつきといれかわる  
まちのきらきらは毒の発火するにおいで  
あいつらはしんだ  
ぼくは口笛を吹こうとし  
頬張る破片で血の味がした

午後の宅配便が来るまでのあいだ  
用心もしないで解体をころみていると  
血合いに畳んでしまわれた手紙をみつける  
いつか、終わっていたことにしか気がつくことのできないひとへと  
きみが遺した挨拶だったんだろう？

妄執、とその恋人を小包にして  
ぼつ……teriとした後遺症がいちどすぎたあと  
雨とあおい砂のうっ部屋の窓から  
透明な旅行へ

このよるの列車には  
誰も知らないふたりらが  
発車を知らせるベルが鳴ってからも駆け込んでくる  
冬の天蓋のようにとおく  
しんでなお、覆いかぶさるものたち

そして、遅れて鳴らされた汽笛——  
髄液にぬれた若い骨による流星が  
うまれるはずだった舟のうえをとびこえる  
団地の窪みのみずうみから、万の手がどつと生え  
息を瘦せらせはなしてくれたひとを  
書き留めておこうとペンをはしらせた  
その筆跡は、ついに羽ばたいたカモメを  
ほどかれた水草が突き刺したことを知り  
ぼろ、ぼろぼろ、ぼろ、ぼろぼろ  
ちいさな口でうたった

きみは、生まれたまちをでることにしてほんとうによかった

Tuesday, June 05, 2012  
冠

野村龍

瞳から溢れた眼差しは  
翼に注がれ 翅を洗う

仔羊の血は甘く  
魚の骨いちめんに飛び散る

羊皮紙に綴られたぬくもりをつぶやくとき  
なめらかな心臓がゆつくりと現れ

優しい耳から  
明るい夜が立ち昇る

《あなたの 濡れた忘れ物は 恋として記憶され  
蜜を湛えた壺のなかで たいせつに仕舞われます》

光は谷底で角笛の夢と巡り合い  
盃は樹液を浴びて眠りに落ちる

物陰の貯水槽で朽ちていく  
青い希望の言葉

その敏感な舌のどこかに  
かすかに残る訛りがある

だから安心してください  
きつと綺麗に咲きますよ

## 骨灰を

こぼちほち／いしか

海埜 今日子

ほねはい、そう、よんでみる。さらさらと、けいふんにくびをもたげ、わたしをうるおうきよりとなる、だろう、から。うんでゆく、いつてきのこさず、たどつてみたいと、こしをおとす。かみひとえをぬぐい、いくどめかの、きょうかいです。まぎつためぶきに、しゆくはいめいた、ちいさなふはいを、うかべている。きらきらと、どろ、せきこむほどに、ようぶん、そだて。

ほねのはい、くちずさんで。わるいばしょが、わたしたちのあいだで、ながらく、かげをおびたにじ、わたそうと、いえ、とちゆうできれて、ざんねんでした。むかしめいた、つちにあたつてこぼれるので、かんしやをささげ、ひとりぶんを、みおくつた。ちよくご、だからここに、むせぶのだ。つぶより、かるい、かぞえている。またいだのなら、あぎやか、ばんぎい。

こつかい、そこからさけびが、うもれるのだろうか。いつかみちで、きつとおだくをてんかいするかたどつたなら、やけばいい。たとえば、あめとうみ、のよう、はんでんし、べつのひふをおびてゆく、くぐもるきせつの、なまえにおいて。しめりけが、においをつめこみ、ひびいたはだだ。とつぜんならば、だれをもいわない。いわく、あたらしい、ようぶん、とどいて。

ほねにはいをささげましょう。さいしょから、のよう  
にまぶすのです。すけるほどに、あせぼんで、お  
りであるならしずめばよかった。まあいきつと、  
ただれます。はむように、くちをむすべば、もう、  
さしだせないから、きぼうです。ほぐし、ちりばめ、  
さかずき、いそげ。やわらかさなら、とらえるのです。  
けいふんとして、こくうをまたぎ、うんだことにま  
ぶしてやる。だれをたくしたにじですか。かいこう  
のようにほだせばいい。

ほねはい、そう、かえしてみる。しろしろと、はっ  
こうしたなら、せつしたのだと、そだつたようぶん  
を、ささげている。あれはだれの、まちがえだつた  
のかもしれない、かみひとえをひるがえし、のみほ  
すこういが、だまつておくれた。にじんだむこうを  
ひとりですから、つぶやきよりも、なおいといい。  
もやしている、こなをかきむしるであいとなる、だ  
ろうから、はんたいなら、ぬればいい。かんぱい  
するもの、このくびとまれ。

生物学の事典に、もし版画が多く登場しているのであれば……

小笠原鳥類

旺文社の、わりあい小さな『生物事典』。以前は四訂版(二〇〇三)を、読んでいたのだが、最近、五訂版(二〇一一)が刊行された。約五〇〇ページで七二〇〇項目である。カヴァーの写真に蝶が多いのではないかと思える。鳥も多い、とてもカラーだ、……この事典からいくつかの語を拾ってデタラメな、おおかたは版画に関わることを書いていきたい。この本からの引用はゴシック体にするだろう。オアシスを聞いているよ。聞いている歌詞が書いているものに混ざらないか心配して心配した時期があった。たぶん歌詞は混ざっていないだろう、私は英語が苦手なんだ。

丸い動物である「ウミリンゴ」は「古生代の地層中から発見される化石動物」で、人間が腕を使って筋肉と骨を使って描いたのであれば植物の絵も動物の絵になるだろうと歌った。りんごを切つて、切断して、色を塗って、版画にする。あるいはジャガイモ。

「ガザミ」は「食用ガニの一種」で、「夜行性。」で、夜の本を開くとカニがいる。カニの模様を十八世紀に刻んで、当時の博物学を伝えてくれるような本だ。表紙にはヒラヒラの溶けた虹のような模様が動物の革に、印刷されている。当時の印刷だなあ「ワタリガニともいわれ、カニ料理として最もふつ々に利用される。」私は本を食べてしまうよ、動物の革であったり木であったりするのだね。私は水中で動物の死体を食べるんだ。

「ガロアムシ」は昆虫だなあ、「フランス人ガロアの発見したもので、外形はコオロギに似て栗色」小さな虫を発見したことが大きな事件であるのである、なぜなら昆虫は版画で描かれるのだから。「原始的な昆虫で同類が化石として見つかっている。」版画は化石で、始祖鳥が化石で版画で、石を割ったらそこに平たい始祖鳥が踊りながら現れた。躍り上がったのである。昆虫だったのかもしれない。がろあむし「古生代から、地下にもぐって生き残ってきたものと考えられている。」版画を彫って室内で生き残ってきた。私は版画を集めた本を見ることを好み、版画のキュルキュル彫られた線を好む。虫は野菜を彫って進んでいくし、そこには人間の顔が現れる。壁に人間の顔が！彫刻なので恐ろしい現象ではない、生物学の事典に版画が多いと私は喜ぶ魚の骨格。

「キノボリウオ」は「キノボリウオ科」で、「しばらくの間は空気呼吸もできもののい、」版画はいつでも水中ではない場所に並べられてあつたし、少し暗い場所に並べられた版画の

群れを見ることがあるだろう、「草原をはいまわることもある。」ああ、とても広い草原でクジラのようなクラゲのような羊だよ。それがキノボリウオだったんだ、はいまわるものはいつでもホラーだな、「しかし、特に高い木に登る習性はない。」名前とは異なる裏腹であるんだな。魚の腹、キノボリウオから逃げるのであれば木の上。

「クラゲムシ」は「微小な動物」だ……私は恐竜について何も知らない。細かい作業細かい作業の積み重ねが幅広い版面を大きく描くだろう。明るい部分から暗い部分までの積み重ねであるだろう細かい線であり細かい点である。

「コンニャク」は「球茎からコンニャクをとるために栽培する多年草」で、パイナップルという語をここで思い出しました。私あまり果物食べないんですけども。コンニャクは甘ければ果物のように動くものだヒラヒラクネクネと。水中でタオルのようなものが泳いでいるよということをテレビで見たのだよ、あれはウミウシの巨大な一種だったのかもしれないね。

「シノグナータス」は今では「化石動物」で、化石は版面だなあ、銅で、木で、石で、アンモナイトの模様をいつまでもグルグルと中心に向かって削り続ける。するとライオンの絵も出てくるだろう、シノグナータスは「哺乳類型爬虫類の代表的なもの」で、昔の図鑑で恐竜図鑑のような本で暖かい色の風景で口を開いていた。図鑑の絵を版面で描いたんだ、土の上、大地の上で歩いている、ゆつくりと「オオカミ位の大きさで」、「攻撃的性格だったと想像される。」版面に大昔の怪物が描かれている！あまり攻撃される前に逃げた方がよいのだが、今では化石であり版面でありアンモナイトのようなものだ、冷たい石の版面ではないのだと思う。博物館の壁で見た暖かい版面だったと思う。哺乳類なのだし爬虫類なのだし「頭骨は爬虫類と哺乳類の両方の特徴をもっていて、後の哺乳類への進化につながる。」魚ではない。魚のように泳ぐウミウシだったとしても。魚を描く版面はあまり乾かない。

「ナキウサギ」は「ウサギに似た小動物」で、石の上で上に下に動いているものだろうと思う。うー、と上に上がって、下に下がっていて暗い影のようだった。「日本では北海道中部のみに産し、ブラキストン線を裏つける動物の一種。」あーブラキストン線という語については後でいろいろ書くことになるだろう。ナキウサギ「チリッチリツと鳴く。」宇宙の、他の星に、置かれた機械、の、よう、に。その下には車輪があるだろう金属の。

おお、「ブラキストン線」はイギリスの軍人で動物学者のブラキストンさんによる線で、カンヴァスに一瞬で描かれた線が人の顔のようにも見えている。「津軽海峡に設けられた動

物分布境界線」地図に、描いたのである、ペンで。昔の地図はザラザラで、版画で、暖かい色だった、暖かい地形の線だった、哺乳類の、イタチの。そして地図にいろいろな顔を描いていた。それは喜びの顔であつたかもしれない紫色の顔であつたかもしれない。「しかし現在の知見では、北海道にしか生息していないと思われていたクマゲラが秋田県にも生息しているなど、ブラキストン線はそれほど決定的ではない。」というわけで、まだ線が決まっていなから、いろいろな線をザラザラと画用紙に描いていると、顔の影のようなのがそこに現れてくる。なきうさぎの顔が現れて笑っている。地図が暖かいと壁が部屋が暖かくなるし、くだものなどの静物がテーブルに置かれてある。決定した線が描かれた地球は丸い版画の板になっている。版木……緑が多い星。

今回はここまで。

れ

ん

さ

い

# 連載



カーペンター先生の最後は突然最終回ではないと、少なくともそう信じられていたが、じつさいは突然風が吹くように、手を握ってささやき最終回となったのだった、大工よ屋根の梁を高くあげよ、眼の中におちて来ないように、まあいつたいたなんて大きいおめなんでしょうおばあさん。おまえのかわいい顔をよくみるためにこんなに大きくなつたんだよ。狼は森で寝ていました、エゾシカの匂いがするのに姿は見えず、ワニは生き延びるために動かなかつた、吹き抜けていく、5章7節と7章5節を取り違えて怒られた先生の中庭で、ごめんない、ぼくはマタイよりマルコの方が好きなんですと告白する夜明けの風、あの空のしたで突然最終回を迎えようとしていたマルコにポンチョを放つてあげたかつた、毎週日曜夜7時に幌馬車の旅をする、無人島で巨木の幹に小屋を作り、ミシシッピ川でおぼれ、いちご水とまちがえてぶどう酒をのんだ、親友だつた。親友の死、親友は肺病で真っ白になって死にました、突然最終回、窓の外で口笛が呼んでいる、いかだにつかまつて、荒くれ者のほら話をきく、りんごの真っ白な花が咲き乱れる並木道を抜けて、合間にはカルピスの作り方を教わりました。毎年夏になるとカルピスを贈る、日焼けした背の高いおじさんのカルピスを調合するのは子どもたちだけ、ぼくたちだけ、ぼくたちだけでやる！ 両親が馬車に乗つて博覧会へ行つた、何をしようか、何を？ アイスクリームをつくろうよ！ 妹が叫んで、入つた、大きなたらいと取っ手のついた樽、朝掬つたばかりのクリームとふんだんな砂糖、氷にふんだんにまぜた塩の白い、雪のような粒、妹にアイスクリームを投げつけて戦つた、クリーム色のアイスクリームに散つたバナラの黒い点は、太陽を横切り金星になりました、銀河ステーション、銀河ステーション。メガホンから響く声、おばさん大盛りお願い。大盛りありません。替え麺してください。トラック野郎たちがあつまるステーションで父とラーメンを食べました。100、200と星を数え、数えながら、見渡すかぎりの星の野原で迷子になつて、冷遇されていたキャプテンはさびしい食堂の入り口でまずい食事の券を買う、いつかわが青春の理想郷へ艦隊をつれていくためのそれが最初の一步だつたのだ、こんな話をし続けた、つる植物の温室が暗い星の原で揺れて、磨かれた鏡と帆、きれいになつた空気が通るダクトに隠れながら。遠くで響くのはガイド音声、いやあれは銃声ではないだろうか——ないだろうか？ 不法占拠の船内の暗いダクトは暗渠のようだ、水が滴り、かすかにみかんの香りがする、市場へ向かう最後の仔牛にならないように、戦うための服を探している。(続く)

(連作「マンダリン・コスモロジー」)

TiP! "Re-18"

---

---

---

---

# Rule of "Re-18"

---

## 00 最初のテキスト

TEAM T

TEAM Y

TEAM K

---

01 Kが00を書き換える  
02 Yが01を書き換える  
03 Tが02を書き換える  
04 Kが03を書き換える  
05 Yが04を書き換える  
06 Tが05を書き換える

07 Tが00を書き換える  
08 Kが07を書き換える  
09 Yが08を書き換える  
10 Tが09を書き換える  
11 Kが10を書き換える  
12 Yが11を書き換える

13 Yが00を書き換える  
14 Tが13を書き換える  
15 Kが14を書き換える  
16 Yが15を書き換える  
17 Tが16を書き換える  
18 Kが17を書き換える

# 00

---

第一条 この法律は、当分の間、所得税、法人税、相続税、贈与税、地価税、登録免許税、消費税、酒税、たばこ税、揮発油税、地方揮発油税、石油石炭税、航空機燃料税、自動車重量税、印紙税その他の内国税を軽減し、若しくは免除し、若しくは還付し、又はこれらの税に係る納税義務、課税標準若しくは税額の計算、申告書の提出期限若しくは徴収につき、所得税法（昭和四十年法律第三十三号）、法人税法（昭和四十年法律第三十四号）、相続税法（昭和二十五年法律第七十三号）、地価税法（平成三年法律第六十九号）、登録免許税法（昭和四十二年法律第三十五号）、消費税法（昭和六十三年法律第百八号）、酒税法（昭和二十八年法律第六号）、たばこ税法（昭和五十九年法律第七十二号）、揮発油税法（昭和三十二年法律第五十五号）、地方揮発油税法（昭和三十年法律第百四号）、石油石炭税法（昭和五十三年法律第二十五号）、航空機燃料税法（昭和四十七年法律第七号）、自動車重量税法（昭和四十六年法律第八十九号）、印紙税法（昭和四十二年法律第二十三号）、国税通則法（昭和三十七年法律第六十六号）及び国税徴収法（昭和三十四年法律第百四十七号）の特例を設けることについて規定するものとする。

（「租税特別措置法（昭和三十二年三月三十一日法律第二十六号）最終改正：平成二三年一二月二日法律第一一四号」より）

TEAM T

---

# 06



橋上

ログオンフリー名付けられ

名だたる名を呼ぶ

オノマトペ

後の祭りを再起する

備えましてのジャスティスは

ところがどっこい

ワシントン

A-side

からのからから

あたし、ジャパン

Imitation

No More

No

Are You

War

清国ニッポン

■■■■■■■■■■ やめんな ■■■■

■■■■■■■■■■ あかんの ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ ログアウト ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ ジャンク ■■■■

■■■■■■■■■■ の法則 ■■■■

■■■■■■■■■■ 童貞 ■■■■

■■■■■■■■■■ ノマエニミチハナイ！ ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ 法的 ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ アンタのその ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ ひとつ ■■■■

■■■■■■■■■■ いま手にあるものここに記す ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ ジャスティス ■■■■

■■■■■■■■■■ ロシア ■■■■■■■■■■ No Nukes ■■■■

# 01 (カニエ・ナハ)

価値、ログオンフリー許税、消費税、酒税 TA ば ko の税、発油税を再生すると、ローカルコマンド発油税、石炭の石油税、航空マシンへの所得税、法人税、相続税、贈与税、ポイント間の最初のコノ法律 WA、燃料税は、自動車両重量税、市都府鄭は、NI つ気を受け取った場合、市区府税の計算、税レポートの提案締め切り場合は、これより少ないし市都府免除市も市都府有料市、ワシントン州これ交通の税 NI 部 Ru の納税義務、もし課税基準を清国税庁 WO 内のその他の印刷用紙税法定の昭和四十年の法律や法人税法(第 34 号)、相続税法(法定 73 の昭和二十五年間)、価格税法(平成昭和四十年の所得税法(第 33 号)法 69 三年)、徐(昭和税法の法律第 35 号の 40 年)、消費税(昭和六〇から三年法律第百八十)、酒税法(昭和 28 年を避けるためにログイン法律第 6 号)、TA ば ko の税法(昭和 50 の法則 - 9 第七十二)プレーが発油税の法律(法律 55 号の昭和 30 年)、ローカルコマンド発油税法(法定の昭和三十年第四百)、石炭の石油税法(昭和法的 XXV 五十三年)、航空機燃料税法(昭和 47 年法律第 7 号)、自動車両重量税法(昭和 46 年法律第 80 第 9 号)、印刷用紙の税法(昭和法的 XXIII の四十から二年)、フランスの国税庁の一般原則(16 に関する法律昭和 31 年)とび国税土地収用法(第百法的一つの昭和 31 年 4 年 17 日)の特別な場合をセットけ RU こと NI ついて規定の su ru の MO の店頭とす RU。

( " 租税特別なプロセッサ方式(昭和 2003 年 3 月 31 日、3 法律 26)と最終的な補正:平成 2、2003 年 2 月 2 日法律ヨーヨー里の最初の 4 分の 1)

# 02 (山田亮太)

価値と税について

ログオンフリーの、許される、消費の、酒の、TA (ターミナルアダプタ、タンタル、タミル語)、ばかりといえ、KO (ノックアウト)、発油を再生するローカルコマンド、石炭、石油、航空マシンへの所得、相続、贈与、ポイント間の、最初の法律、WA (ワシントン州、ワロン語、double A side)、燃料は、自動/車/両/重量、市/都/府/鄭、NI (忍者……、ニッケル)、受け取った、市/区/府の計算、交通の、NI (忍者……、ニカラグア、北アイルランド、国民所得)、RU (ロシア、ルテニウム)、納税義務、もし課税基準を、清国、WO (を、ヲ)、その他の印刷用紙、法定の、昭和四十年の、昭和二十五年間、平成昭和四十年の、所得税法(第 33 号)法 69 三年、昭和六〇から三年、昭和 28 年を避けるために、ログイン、TA (テレビアニメ、Thank you)、ばかをいえ、KO (電鉄)、昭和 50 の法則 - 第七十二、法律 55 号の昭和 30 年、昭和三十年第四百、昭和法的 XXV 五十三年、昭和 47 年法律第 7 号、昭和 46 年法律第 80 第 9 号、昭和法的 XXIII の四十から二年、16 に関する法律昭和 31 年、第百法的一つの昭和 31 年 4 年 17 日、RU (ロシア、ライアソン大学)、NI (忍者……、ニーザーザクセン州)、規定の、SU (ソビエト、日曜日、情報セキュリティアドミニストレータ)、RU (ロシア、ロシア語)、の、MO (マカオ、モルドヴィア、ミズーリ、モデナ)、店頭とす、RU (ルテニウム、ロシア)

(プロセッサ:2003 年 3 月 31 日「法律 26」、最終的な補正:2003 年 2 月 2 日「法律ヨーヨー里」の最初の 4 分の 1)

## 03 (橋上)

---

011年5月4日、島平ひろみの日記から

踊れ！価値が、税が、ログオンフリーが花々の花粉のように許される、消費が、酒が、TAが、あのイタイケなターミナルアダプタと名付けられ、右往左往のタンタルの名を拒み、タミル語をはらみながらのオノマトペ、ばかりといえ、KOつまりノックアウト、後の祭りを再生するローカルコマンドは石炭くんの友人です。石油マシンへの所得、航空、相続、贈与に備えてのデリバリージャスティスは色とりどりに正しく犯す、ところがどっこい、あんまさん、あなたの美学をポイント間で、揉んでやろうかやめようか？ その一言でWA、俺はワシントンでワロン語、つじつま合わせのdouble A side、その燃料は、嬉し恥ずかし自動／車／両／重量、か／ら／の、市／都／府／鄭、ゆ／え／に／、NI、つ／ま／り／、No！Imitation 忍者、No！Imitation ニッケル、受け取った、市／区／府の計算、交通の、NI、い／わ／ば／、Never interesting 忍者、Never interesting ニカラグア、Never interesting 北アイルランド、Never interesting 国民所得、問いたです、RU (Are You)納税義務？ No, We are 課税基準。夕食ばんざい！清国ニッポン、WO (ワンダーオブジェクト、を、ヲ)、その他の印刷用紙、狂ってるわ、法定の、好きよ、昭和四十年の、やめて、昭和二十五年間、やめないで、平成昭和四十年の、あきまへんで、所得税法(第33号)法69三年、いうとるやんか、昭和六〇から三年最高や！昭和28年なんかいらなかったんや！を避けるために、ログイン、TA (トルネードオーディション、Thank you)、ばかをいえ、KO (電鉄)、か・ら・の、慶応(DT)、京王電鉄を、

昭和50の法則 - 第七十二、乗り継いで、法律55号の昭和30年、慶応大学に、昭和三十年第四百、通う童貞が、昭和法的XXV五十三年、いたもんです、昭和47年法律第7号、居た。揉んで、酢、昭和46年法律第80第9号、医者揉んでん、昭和法的XXIIIの四十から二年、毘沙門天、16に関する法律昭和31年、何言うてん、第百法的一つの昭和31年4月17日、今手のひらにあるものをここに記す

RU (ロシア)、NI (忍者)、S U (ソビエト)、RU (ロシア)、MO (マカオ)、RU (ルテニウム、)

RUNISURUMORU:ある湯にする、盛る

RUNISURUMORU :Are You ニス？ Are You モル？

RUNISURUMORU:流ニス流藻留

(エクササイズ法律26:「2003年3月31日」、最終的な補正:裏西暦2003年逆に2月2日ヨヨー里の最初の4分の1「法律」、special thanks 権力と平等)

## 04 (カニエ・ナハ)

---

AJ 革命

島平ひろみ

ログオンフリーが花々の花粉のように許されて、イタイケなT-アダプタと名付けられ、右往左往のタンタルたちの名だたる名、

タミル語をはらみながらのオノマトペ、  
KOつまりノックアウト、後の祭りを再起する  
石炭くんの友人は、石油マシンへの相続税、  
憎悪へと  
備えましてのジャスティスは、  
色とりどりに正しく犯す、  
ところがどっこい、  
あんまさん、あんたの美学をポイントで、  
「揉んでやろうかやめようか？」  
その一言で、俺、ワシントン過信人(かしんびと)。  
つじつま合わせの A-side、  
その燃料は B-side、  
嬉し恥ずかし自車両量(じしゃりょーりょー)、  
からのからから市都府鄭(しとふーちゃん)、  
ゆえに NI  
つまり No ! Imitation 忍者、ニッケル、西日暮里、  
受け取った ! 市区府(しくふ)の計算、  
いわば No More 忍者、ニカラグア、北アイル  
No More カゴシマ、  
No More シマネ、  
No More シマバラ  
(の乱)  
ノーラン(クリストファー・)  
No Nuclear !  
No Nukes !  
問いただす、

(Are You) No Nukes ? No they 義務?  
No 税基準 ! No 税万歳 ! 万歳三唱・山椒魚  
War !  
清国ニッポン、WO (ウォー・オブザーバー)  
その他の因子、狂ってる !  
法定の、好きよ好きよも昭和四年  
やめて昭和の二十五年、  
やめんな昭和四十年、  
あかんの所得第三号。  
いうとるやん、「昭和三年最高ね !」  
(昭和二年は、いらんくて、)  
ログイン・ログアウト・ありがとう。  
あるいは Thank you (サンキュー)ばかいえ KO  
からの慶応義塾電鉄、  
昭和五年の法則、乗り継ぎ、  
昭和三年、芸大に、  
賞味四年間、通う童貞、高村ナニガシ  
(ボクノマエニミチハナイ !)  
昭和法的五十三次、いうたもんです昭和の和、  
痛痛(いたいた)揉んで酢モンパルナス、  
医者揉んでんねん毘沙門天、  
昭和法的シジュウカラ、  
アンタのその肩四十肩、  
色に関する法律三年、  
何言うてんのん、  
第百法的ひとつの和、

三十年と四年で七日、  
六月某日 AJ (アジャ) 革命。  
いま手にあるものここに記す。  
RU (ロシア)、Cs (セシウム)、RU (ルテニウム)  
ある湯にする、盛る NY (ニューヨーク)  
入浴税なら No Nukes !

## 05 (山田亮太)

---

花々のログオンフリー名付けられ花粉のように許されていけ  
イタイケな T-アダプタは右往左往タンタルたちの名だたる名を呼ぶ  
タミル語をはらみながらのオノマトベ KO つまりノックアウトか  
友人は後の祭りを再起する石炭くんの相続税  
憎悪へと備えましてのジャスティスは色とりどりに正しく犯す  
石油マシンところがどっこいあんまさんあんたの美学を揉んでやろうか  
ポイントで「やめようか？」その一言で俺ワシントンきみ過信人(かしんびと)  
燃料はつじつま合わせの A-side 嬉し恥ずかしその B-side  
自転車両量(じしゃりょーりょー)からのからから市都府鄭(しとふーちよん)ゆえ  
に NI つまり No !

AJ 革命(あたし、ジャパン)

Imitation 忍者ニッケル西日暮里いわば No More 市区府(しくふ)の計算  
受け取った！忍者ニカラグア北アイル No More カゴシマ No More シマネ  
ノーラン(の乱) No More シマバラ(クリストファー) No Nuclear ! No  
Nukes !  
問いただし No 税基準！ (Are You) No Nukes ? No they 義務？  
War ! No 税万歳！山椒魚・万歳三唱 WO (ウォー・オブザーバー)  
法定のその他の因子狂ってる！清国ニッポン好きよ好きよも  
昭和四年やめて昭和の二十五年やめんな昭和四十年  
いうとるやんあかんの所得第三号「昭和三年最高ね！」  
ありがとう昭和二年はいらんくてログイン・ログアウトあるいは Thank you  
(サンキュー)

AJ 革命(あたし、ジャンク)

慶応義塾ばかいえ KO からの電鉄昭和五年の法則乗り継ぎ  
芸大に昭和三年賞味四年間通う童貞高村ナニガシ  
昭和の和(ボクノマエニミチハナイ!)昭和法的五十三次  
いうたもんです昭和法的シジュウカラ痛痛(いたいた)揉んで酔モンバルナス  
何言うてんのんアタのその肩四十肩医者揉んでんねん毘沙門天  
三十年と四年で七日ひとつの和第百法的法律三年  
色とりどりにいま手にあるものここに記す六月某日 AJ (アジャ) 革命

AJ 革命(あたし、ジャスティス)

NY (ニューヨーク) RU (ロシア) Cs (セシウム) RU (ルテニウム) 入浴税  
なら No Nukes !

TEAM Y

---

# 12

## Hyperfilm

山田亮太

ウシの皮に埋めた脚をもう一度動かして滅ぶサイの角のため  
黄色い土地に建つ糸と布でできた家そこから海が見える飛んでいく死なない

書きとめ欠き止める間に穴があいてあいている名前のないあの穴  
渦になって突き刺さる遊ぶなくなつた遊んだけんかした  
知らない子血も涙もない知らない子二才を二才だつた打つた打つと滅つた滅つていった

些細なことささつたのか登つて変化してのぼつた教えてやろうか今日はいつなのか  
進んでいる進んで降る古くて笑う草と九才の狂つた愛を愛していた  
隠れてやつてくる隠れてこの部屋にやつてくるこの部屋に

血へ土地へと復讐する逆に復讐する裁判だから裁判する  
つぎのつぎの赤い木星ああ少年Aあの木星は少年へ

火事を縫う火事を導く手はめずらしくあのめずらしい講堂を指す  
そのあとノボとノボがそのあとにマヌとマヌが  
わざと負けるわざと二回たくさん歩いたのに二回だけ

ペロー接続するべろー夜にせつぞくするよるに  
歩つ霜にほつしにもトルソ売るとるそうる

木星次の唾木星へともくせいつぎのあもくせいへと  
やめる根を拒絶するやめるねをぎよぜつする

あなたは死ぬこの愛のためあなたはしぬこのあいのため  
波のあとに残されたものをおそれると分かつてなみのあとにのこされたものをおそれるとわかつて  
それをたもつから虹は震えながら色をとりもどすにじはふるえながら  
この愚かな血と土地のためこのおろかなちとちのため

# 07

(橘上)

第一条 (一緒にいたい)

この法律は、恥も外聞も捨てて欲望に突っ走る内国税(所得税、法人税、相続税、贈与税、地価税、登録免許税、消費税、酒税、たばこ税、揮発油税、地方揮発油税、石油石炭税、航空機燃料税、自動車重量税、印紙税その他)をおいしそうに頬張ったかと思うと、これらの税に係る納税義務におクチを近付け、爆発寸前の内国税を軽減し、若しくは免除し、若しくは還付し、ペロツ、ペロツ。こりや、たまりませんって……。課税標準若しくは税額の計算、申告書の提出期限若しくは徴収につき冷たい氷の感触が伝わって、

「ヒーツ」

これって、所得税法(昭和四十年法律第三十三号)がムズムズして、とつてもGOOD! 火照った法人税法(昭和四十年法律第三十四号)が、相続税法(昭和二十五年法律第七十三号)をしっかりと直立させ、地価税法(平成三年法律第六十九号)を倒し、登録免許税法(昭和四十二年法律第三十五号)を動かすと、硬直した消費税法(昭和六十三年法律第六十八号)は、酒税法(昭和二十八年法律第六号)をこすり、スムーズにたばこ税法(昭和五十九年法律第七十二号)の中に入り込んだ。揮発油税法(昭和三十三年法律第五十五号)は口では「ダメ」といいながら、地方揮発油税法(昭和三十年法律第四号)を突き出し、石油石炭税法(昭和五十三年法律第二十五号)にヌメつとした触感が伝わり、航空機燃料税法(昭和四十七年法律第七号)は、アノ手コノ手のアイディア珍プレイで、自動車重量税法(昭和四十六年法律第八十九号)の印紙税法(昭和四十二年法律第二十三号)をグツシヨリ濡らして、いやゝやりがいあり。国税通則法(昭和三十七年法律第六十六号)及び国税徴収法(昭和三十四年法律第

百四十七号)の特例を設けることについて規定するかはあくまでもアナタ次第というわけざんす。

(参考及び参照:「租税特別措置法(昭和三十三年三月三十一日法律第二十六号)最終改正:平成二十三年一月二日法律第一一四号」、「週刊大衆」夏休み一挙大公開! ○東○西アツと驚く風俗○珍プレイ厳選BEST10」、「同時進行ポルノ! 援助交際的女そそる!(宇佐美優)」(平成9年8月11日号)より)

# 08

(カニエ・ナハ)

橘上(きつのうえ)曰(えつ)く

第一条(ていてんちよう)(一緒にひとつお)にいたしこの

法律(のりつ)は恥(ち)も外聞(ういもん)も捨(しや)て、

欲望(ほつしも)に突(と)つ走(そう)る内国(うちくに)税(さい)

(所得(ところえ)税(さい))

法人(ほつにん)税(さい)

相続(あいしよく)税(さい)

贈与(おくりよ)税(さい)

地価(じあた)い)税(さい)

干支(か)等(えとせとら)……を美味(いび)しさうに頬張(き)ようちよう(つたかと思)しふとこれらの税(さい)に係(かゝ)ずら(る)納税(だうさい)(義務(よ)しづとめ)におくちを

近付(きんぶ)ける爆発(はつ)寸前(きまえ)の内国(うちくに)税(さい)を軽減(から)へらし

若(じやく)しくは免除(まぬか)し若(じやく)しくは還付(かえず)しペロツ／＼こりやたまりませぬって……

# 09

(山田亮太)

課税(えさい)標準(しるしなぞらへ)若(じやく)しくは  
税額(さいぬか)の計算(はかりかけい)申告(もうしつぐ)  
書(しよ)の提出(ぎぐいで)期限(きかぎり)若(じやく)しくは  
徴収(しるましのぶ)につき冷(りよう)たし氷(ひよ)うの  
感觸(かまくぶれ)が伝(しるし)わつて  
「ひーつ」  
此(こ)れつて所得税法(ところえさいはつ)がむず／＼して  
火照(くわせう)つた法人税法(ほつにんさいはつ)が  
相続税法(あいしよくさいはつ)をしつかりと直立(じかだち)させ  
地価税法(じあたさいはつ)を倒(さかしま)し  
登録免許税法(のぼとりまぬがりのさいはつ)を動(いご)かすと  
硬直(かたじぎ)した消費税法(きえついえのさいはつ)は  
酒税法(くしさいはつ)をこすりすむうずにたばこ  
税法(さいはつ)の中(あたる)に入(じゆ)り込(こ)んだ  
揮発油税法(きあばくゆのさいはつ)は口(ぐち)では  
「駄目(だま)」といひながら  
地方(くにえ)揮発油税法(きあばくあぶらのさいはつ)を突(とつ)き出(いで)し石油石炭税法(あおゆあおずみのさいはつ)にぬんめりとした感觸(ぶれかまく)が伝(しるし)わり航空機燃料税法(こうむなしきのぜんれうのさいはつ)はあの手(しゆ)この手(しゆ)のあいであ珍(うず)ぶれいにて自動車重量税法(うぬいごきしやしげばかるのさいはつ)の印紙税法(しるしゝさいはつ)をぐつしより濡(そぼ)らしつつあなやりがいありにける国税通則法(くにのさいのそれすなわちはつ)及(きゆう)をびし国税徴収法(くにのさいのしるましますのはつ)の特例(こつためし)を設(せち)けることについて規定(みじよう)とするやいなやはあくまでもそち次第(よしてい)といふわけにて残滓(なごりおり)

吃の飢え餌つく

低天地洋(二つ尾に射たし)子の

ノリツは血もう慰問も視野て

歩つ霜にトツソ売る打ちく二歳

ところ栄歳

歩つ二歳

愛しよ九歳

送り四歳

次唾大歳

栄歳虎…を異美死さ雨に

黄洋地洋つ鷹と糸布とこれらの

さいに数らルダ優歳よし勤めに置く地を

キンプ蹴る八月前の

打ちく二歳を潤ら減らし

字や奇しく浜抜かじ指示や奇しくは

飼えずしペロつこり夜溜まり増せぬツテ……

栄歳記し謎らへ字や奇しくは

さいぬかの秤か啓蒙し継ぐ

視世の探いで帰化ギリジヤ奇しくは

知るましノブに尽きり溶たし火陽の

過膜ぶれ餓死流死わつて

「非何時」

来れつ手と凝ろえ彩はつがむ図示て

喰わせ討つ多歩つ二歳発芽

愛しよ九歳は子を失か裏と磁化断ちさせ

次唾大歳は子を裂かし益し

ノボとりマヌが理の再発を以後課すと

過多自棄した帰依終えの再発を

九四歳は子を越す離澄む渦煮た箱

彩は角当たる虹揺り混んだ

来暴く油の再発は愚血では

「墮魔」問い日ながら

苦に餌き暴く虻らの再発をと月いでし青湯青水の

再発に怒んめり都市たぶれ囃まく餓死流死割り郷  
無無し樹の全レウの再発はあの死ゆこの死ゆの愛  
で居合うずプレイニテ失ぬ以後帰しや繁ば刈るの  
再発の記し再発を愚都市より祖母らしつつあなや  
利害ありにける国の彩の逸れす名分ち八月ゆうを  
微死く二ノ歳の知る増しすの初鋸つ試しを背血蹴  
る糊塗に終て未自要するや否や把握までも措置よ  
指定と畏怖分けにて余波おり

# 10

(橋上)

私は、吃の飢餓餌を打ちました

低天地洋(そして、私は1つの尾の方へそれを撃ち  
ました)子供の

ノリツに、また、慰めはすでに視野で血です

歩つ霜にトツソを売るために2才の打ちく

ところ栄歳

2歩つン年

9才の愛しよ

4才を送り届けること

次の唾木屋

栄時代トラ……を異美死き雨のために

黄洋地洋つタカと糸布とこれらの

私が多くのさいにと他ルダA年に、そして、仕事の  
ために置かれるものにそれをやめたという根拠

それを拒絶する8月以前のキンプの

涸その他は、2才の打ちくを減らします

性格と珍しさを広げる浜抜かじ指導と珍しさしくは  
それを保つて、ペローつこり夜でそれを保存するこ  
とができることなく、私がそれにする接続(と上が  
ることができないために)……

栄年を下つてそれを書いてください…品格と珍し  
さは、神秘その他へのしくはです

それは、さいぬかのがそれに登るか、教化して、それ  
を受け継ぐということだす

見てください、そして、世界のスパイはやつて来ま  
す…帰化ギリジヤ珍しさしくは

尽に、私は、1溶が知っているより良いノブに火を  
助けることを確信しています

飢えスタイルの死わつてによる死をぼやけさせている

Hyperfilm

「Non-what 時間」

次のれつ手と凝ろえ彩はつがむ説明て

そして、敗北にとって、2つの多歩つンは、私がそれ  
に出す進化を古くします

9才の愛しよは、私が失または背中と磁化をやめ  
て、子供をまねることをします

私はあなたに子供を裂かせました、そして、次の唾  
木屋は増加します

ノボと再マヌがその後自然法則の再現を強要する  
とき、

多くの間違い…それ自体を捨てた帰依終えの再発

そこで94才が子供よりあつた独立した部屋が明白  
だつた渦を沸騰させた箱

角がそうであつた虹は震えました、そして、彩は込  
んでいました

見つける次の油の再現は、愚かなこと血です

「墮魔」質問日であることにもかかわらず

郷 nothingless な木の割合で飢えスタイルの死に

よる死のすべてのレウの再現に關してのその死ゆ  
この死ゆの愛のための2ゆうをわずかな死くノ年

には、月がやつて来るということを知っているため  
に増しすの初鋸つ裁判によつて血を逆襲して、ウシ

アブその他の再発をするために間に合わせのため  
に、餌は来ます、そして、痛みで、そして、逸れす名

差の剣渦プレイニテ失ぬ以後帰しや繁ばの青いお  
湯青い水早撃ちの再現のための怒りんめり都市た

ぶれ囃の上の風に国の彩の8月を見つけるために、  
それを書きとめる間、穴と関心があります、そして、

愚かなこと都市から、そして、終て non- をそれに  
切ることの再現のキツクに、祖母と他は再発をしま

す…自身の…それを必要とするとすぐに、指定と畏

怖が測る分裂はしつかりつかんで、それに似ていま  
す。そして、余波おり

# 11

(カニエ・ナハ)

## Hypertim

抜かじの指導珍しく  
然法則の再現を強要  
ノボとマヌがその後

ぬかじのしどうめずらしく  
ねんほうそくのさいげんをきょうよう  
のほとまぬがそののち

敗北をとる二つ多歩  
品格珍しき神秘へと  
沸騰させた明白の箱  
ペロー接続する夜に  
歩つ霜にトルソ売る

はいぼくをとるふたつたほ  
ひんかくめずらしきしんぴへと  
ふつとうさせたいはくのはこ  
ペローせつぞくするよるに  
ほつしもにとるそうる

唾木星増加している

あもくせいどうかしている

異美しさの雨のため

いみしさのあめのため

ウシ虻の再発のため

うしあぶのさいはつのため

栄時代虎たちの飢え

えいじだいとらたちのうえ

黄洋地洋タカと糸布

おうようちようたかとしふ

書きとめる間の穴の

かきとめるあいだのあなの

帰依の終えの再発の

きえのついえのさいはつの

来る月のわずかな死

くるつきのわずかなし

剣渦遊戯にて失いぬ

けんかゆうぎにてうしないぬ

涸他の二才を打減ず

こたのにさいをうちげんず

さいぬかを登し教化

さいぬかをのぼりしきようか

進化古くす九才の愛

しんかふるくすくさいのあい

スパイ到来せし世界

すぱいとうらいせしせかい

性珍しくて広げし浜

せいめずらくてひろげしはま

それは受継という事

それはうけつぐということ

墮魔問ふ質に拘らず

だまとふしつにかかわらず

血へと逆襲する裁判

ちへとぎゃくしゅうするさいばん

つぎの唾木星少年 A

つぎのあもくせいしょうねんえい

低天地洋そして私は

ていてんちようそしてわたしは

都市に被れて怒めり

としにかぶれていかりめり

慰めはすでに視野血

なぐさめはすでにしやけつ

二歩つんのめる栄歳

にほつんのめるさかえとし

TEAM K

---

# 18

## Velvet Ice Cream

カニエ・ナハ

---

私はSSU。

魚は笑みを浮かべて言い訳。

☆を和むこの物語の

占星をする必要があります

私は鋼を食べました。

私は笑いながら、猫を持って逃げました。

笑ったり笑顔を作ったりする人々の中を泳いで

私は

魚の集団に属性しました。

私はなにも行う必要がありませんでした。

ただ 離れて維持することでした。

あなたがたが認知症を発症することを期待して。

私はただひたすらに、

自☆の笑顔の練習(暴力の迷路(ダミー

を行いました、

私は笑い(これはいじめをされていない場合は、段階的な

有罪の笑顔が断罪(殺すためにいじめてください

自宅での問題(許して

あなたが呼ぶの？

(許して

最初の穴を満たす人々が☆体(傷害への障害(

(猫は疑わしい間違い。曲がった笑いである場合

リアの電荷を笑って☆んだ

(ごめんごめんなさいそれは自☆のジョークです(S S U

は笑いを得ることができる(デッドすなわち☆んだ☆んだ

しもべたちは、罰金(右派、笑顔(話をする必要は

ありません

あまたの人々(許しません

私はS S U(スーサイズ・ユー

すなわち自☆したあなたです

アイハハウリツ

とわたしは言いたい

真剣に

# 13 (山田亮太)

---

## 第一条

この法律は

当分の間

所得税 法人税 相続税 贈与税 地価税 登録免許税 消費税 酒税 たば

こ税 揮発油税 地方揮発油税 石油石炭税 航空機燃料税 自動車重量税

印紙税その他の内国税を

軽減し

若しくは免除し

若しくは還付し

又は

これらの税に係る納税義務

課税標準若しくは税額の計算

申告書の提出期限若しくは徴収につき

所得税法

(昭和四十年法律第三十三号)

法人税法

(昭和四十年法律第三十四号)

相続税法

(昭和二十五年法律第七十三号)

地価税法

(平成三年法律第六十九号)

登録免許税法

(昭和四十二年法律第三十五号)

消費税法

(昭和六十三年法律第八号)

酒税法

(昭和二十八年法律第六号)

たばこ税法

(昭和五十九年法律第七十二号)

揮発油税法

(昭和三十二年法律第五十五号)

地方揮発油税法

(昭和三十年法律第四百号)

石油石炭税法

(昭和五十三年法律第二十五号)

航空機燃料税法

(昭和四十七年法律第七号)

自動車重量税法

(昭和四十六年法律第八十九号)

印紙税法

(昭和四十二年法律第二十三号)

国税通則法

(昭和三十七年法律第六十六号)

及び

国税徴収法

(昭和三十四年法律第百四十七号)

の特例を設けることについて

規定するものとする

# 14 (橋上)

---

第一条

この法律は

当分の間

所得税(笑) 法人税(笑) 相続税(笑) 贈与税(笑) 地価税(笑) 登録免許税(笑)

消費税(笑) 酒税(笑) たばこ税(笑) 揮発油税(笑) 地方揮発油税(笑) 石油石炭

税(笑) 航空機燃料税(笑) 自動車重量税(笑) 印紙税(笑) その他の内国税(笑)

を

K ☆ E ☆ I ☆ G ☆ E ☆ N し

若しくは M ☆ E ☆ N ☆ J ☆ O し

若しくは K ☆ A ☆ N ☆ P ☆ U し

又は

これらの税に係る納税義務 > 課税標準若しくは税額の計算 > 申告書の提出期限

若しくは徴収

につき

所得税法!

(昭和四十年法律第三十三号)

法人税法…

(昭和四十年法律第三十四号)

相続税法○

(昭和二十五年法律第七十三号)

地価税法◎

(平成三年法律第六十九号)

登録免許税法 ×

(昭和四十二年法律第三十五号)

消費税法 II

(昭和六十三年法律第百八号)

酒税法 ⅓

(昭和二十八年法律第六号)

たばこ税法(↑)

(昭和五十九年法律第七十二号)

揮発油税法(※)

(昭和三十二年法律第五十五号)

地方揮発油税法(爆)

(昭和三十年法律第百四号)

石油石炭税法(撃)

(昭和五十三年法律第二十五号)

航空機燃料税法(♫)

(昭和四十七年法律第七号)

自動車重量税法(ㄥ)

(昭和四十六年法律第八十九号)

印紙税法(ㄥ)

(昭和四十二年法律第二十三号)

国税通則法(㉔)

(昭和三十七年法律第六十六号)

及び

国税徴収法(プライスレス)

(昭和三十四年法律第百四十七号)

の特例を設けることについて

規定するものとする♡

# 15 (カニエ・ナハ)

第一猫

「この呆率は、糖分の愛だ」

聖徳税(笑) 方陣税(笑笑) 僧俗税(笑笑和) 憎悪税(笑笑和民) 地下税(笑笑和民座) 盗賊免許税(笑笑和民座和) 笑止税(笑笑和民座和民) 手税(笑笑和民座和民魚) 煙税(笑笑和民座和民魚民) 奇抜喩税(笑笑和民座和民魚民男) 痴呆奇抜喩税(笑笑和民座和民魚民乙女) 寂夕寂嘆税(笑笑和民座和民魚民乙武) 口腔記念寮税(笑笑和民座和民魚民馬民) 児童車住寮税(笑笑和民座和民魚民馬民) 因子税(笑笑和民座和民魚民馬民民蟬) その楽しいな異国税(笑笑和民座和民魚民馬民民打破)を

☆☆☆☆☆もしくは☆☆☆☆

もしくは☆☆☆☆☆もしくは

これらの☆に☆る☆☆もしくは

☆☆☆☆☆もしくはの☆☆☆☆☆

もしくは☆☆もしくは、☆☆

につきつき、もしくは、もしも

聖徳税呆！(この記号は猫のしっぽです！びっくりしておったった猫のしっぽです！下の「・」はしりのあな！

(笑話 44 寝猫・呆率第 33 パーセント)

方陣税呆…

(笑話 40 寝猫・呆率第 34 パーセンマギゲージ)

僧俗税呆○

(笑話 25 寝猫・呆率第 73 パーセンテンプルプール)

憎悪税呆…◎

(塀棲 3 寝猫・呆率第 69 パーマネントゲージ)

地下税呆×

(笑話 42 寝猫・呆率第 39 パーセンチュールベット)

笑止税呆II

(笑話 63 寝猫・呆率第 108 パーセンボンボノボー)

手税呆 1/8

(笑話 28 寝猫・呆率第 6 パーセンシャトーマルトー)

煙税呆(↑)

(笑話 59 寝猫・呆率第 72 パーセンチメンタルホー)

奇抜喩税税呆(※)

(笑話 32 寝猫・呆率第 55 パーセンタメタフル)

痴呆奇抜諭税呆(爆)

(笑話 30 寝猫・呆率第 104 パーセンタメタフルウィックル)

寂夕寂嘆税呆(撃)

(笑話 53 寝猫・呆率第 25 パーセンタメントワイライムーンシャトー)

口腔記念寮税呆(♂)

(笑話 47 寝猫・呆率第 7 パーセンダックタクン)

児童車住寮税呆(㊦)

(笑話 46 寝猫・呆率第 89 パーセール)

因子税呆(㊦)

(笑話 42 寝猫・呆率第 23 パーミール)

酷脆痛足呆(㊦)

(笑話 37 寝猫・呆率第 66 パーパー)

お呼び？(この記号は猫のしっぽです？疑問でまがった猫のしっぽです？「・」)

はしりのあな？

酷脆聴衆呆(プライスレスポールマッカートニーレオナルドドッド)

(笑話 34 寝猫・呆率第 147 パー)

の徳霊を儲けることについて

「KITTY<sup>こねこ</sup>するものとする！」

# 16 (山田亮太)

第一話 30 寝猫・愛 104 パーセンタメタフルウィックル)

寂夕民よ座れ和もしくの☆☆☆☆

しもしくは☆☆しめ民と魚と民の馬を民よ) 児童車住寮税(笑え笑え和め民よ座れ和め民と税呆！(この記号は和め民と魚と民の乙よ女よ) 寂夕寂嘆税(笑え笑え和め民よ猫・愛 34 パーセンマギゲージ)

僧俗税呆○

(笑話 28 寝猫・愛 6 座れ和め民と魚と民の乙たけし)口腔記念寮税(笑え笑え和め猫のしっぽです！びっくりしておったった猫のしっぽです！下の「・」はしレスポールマッカートニーレオナルドドッド)

(笑話 34 寝猫・愛 147 パー)

の徳霊を儲けることについて

「KITTY(こねこ)くは

これらの☆に和め民よ座れ和め民と魚と) 煙税(笑え笑

(笑話 25 寝猫・愛 73 パーセンテンブルプール)

憎悪税呆…◎

(塀棲(へいせい)3 寝猫・愛 69 メタフル)

痴呆☆る☆☆しもしく

☆☆パーマネントゲージ)

地下税呆×

(笑話☆☆しもしろく、☆☆  
につぎつき、しもしろく、もしも

聖徳奇抜諭税呆(爆)

(笑座れ 42 寝猫・愛 39 パーセンチュールベット)

笑止税呆II

(笑話 63 寝猫・愛 108 パーセンボンボノボー)

手税呆 1/8 え和め魚と民の馬を民よ民よ蟬で) その楽しいな

☆☆☆諭税税呆(※)

(笑話和め民よ) 地下税(笑え笑え和め民よ座れ) 盗賊免許税(笑え笑え和め民  
よ座れ和め)笑止税(笑え笑え和め民よ座れ和め民と) 手税(笑え笑え☆☆し  
もしろくは☆☆☆☆

しもしろ税呆(㊄)

(笑話 42 寝猫・呆率第 23 パーミール)

酷脆くは☆☆☆☆しもしろ民よ座れ和め民と魚と民の) 奇抜諭税(笑え笑え和め  
民よ(この記号はな!

(笑話(しょうわ)44寝猫(ねんねこ)・愛 33 パーセント)

方陣税呆…

(笑話 40 寝魚と民のするものとする!)座れ和め民と魚と民の男よ) 痴呆奇抜  
諭税(笑え笑え和め民よパーセンシャトーマルトー)

煙税呆(↑)

(笑話 59 寝猫・愛 72 パーセンチメンタル猫のしっぽです?疑問でまがった猫  
のしっぽです?「・」はしり 32 寝猫・愛 55 パーセンチ異国税(笑え寂嘆税呆(撃)

(笑話 53 寝猫・愛 25 パーセンチメントワイライムーンシャトー)

口腔記念寮税呆(♂)

(笑話 47 寝猫・りのあホー)

奇抜笑え和め民よ馬を民よ民よ) 因子税(笑え笑え和め痛足呆(㊄)

(笑話 37 寝猫・愛 66 パーパー)

お呼び?民よ座れ和め民とのあな?

酷脆聴衆呆(プライス愛7パーセンダクタクン)

児童車住寮税呆(㊄)

(笑話 46 寝猫・愛 89 パーセール)

因子猫(びょう)

「呆率(ほうりつ)=愛」

聖徳税(笑え) 方陣税(笑え笑え) 僧俗税(笑え笑え和め) 憎悪税(笑え笑え

## 17 (橋上)

---

第一話(最終話) 民笑うッス

コンバンワ! 俺ッス。民ッス。マジで猫ッス。マジヤバイッス。和むッス。やー  
マジホント、笑っちゃいます。なごむんデス。あ、これ第一話デス。☆☆しめてほ  
しいところです。なんつーか、まあ、笑っちゃいますよね、つーか笑え笑え和め  
民よ猫・愛 34 パーセンマギゲージってことなんですけど。あ、この記号は和め民と

魚と民の乙よ女よってこと、頭に入れておいてくださいね。いや、べつに入れなくてもいいんですけど。で何の話かっつーと児童車住寮税、痴呆☆る☆☆しもしくは、「君が我慢したら丸く収まるから(愛69メタフル)」「そんなんどうでもい(呆率第23パーミール)」☆☆しもしくは、☆☆につきつき、しもしくはいぢめる？

例えそれがいぢめでも笑ってやってくださいよー(愛39パーセンチュベツト)。ゲロゲロ。そんなあなたに以下のことを強制します。(愛73パーセンテンプルプール)

聖徳税(笑え) 方陣税(笑え笑え) 僧俗税(笑え笑え和め) 憎悪税(笑え笑え

自殺の練習(笑え 葬式ごっこ(笑え笑え シェフの気まぐれ暴力(笑え笑え和め  
これは冗談ですけど、本気でやってもらいマス(笑え)。

ほんとにやらせましたけど、いじめじゃないんで冗談デス(笑え笑え

いじめかっこ悪い Ver.2.0 (笑え殺す犯す

家庭内に問題が？(許す

お呼び？民よ君よ和め君と民とのあな？に(犯す 犯す 犯す

疑問でまがった猫のしっぽを(犯す 笑う 犯す

りのあホー(犯す 笑う 犯す 死んだ

自殺の練習冗談デス(許す 許す 死んだ 許す

笑えないほどウケるッス。(死んだ 死んだ 死んだ

笑話☆☆しもしくは、☆☆につきつき、しもしくは、もしも㍻ならボンボノポー(民  
よ民よ民よ

その楽しいな

真相は藪の中(※)、とはいえこれだけはっきりしてマス

「・」はしり

まーなにが言いたいかっていうと、「呆率(ほうりつ)=愛」ってことッスよね。

マジで。

# "Re-18"

---

Recorded [Jan. 2012 - Jul. 2012]

TiP! (This is a Pen!)

are

Tachibana Joh

Yamada Ryouta

Kanie Naha

山之口 獺 鰯に鮪

鮪の刺身を食いたくなつたと  
 人間みたいなことを女房が言った  
 言われてみるとついぼくも人間めいて  
 鮪の刺身を夢みかけるのだが  
 死んでもよければ勝手に食えと  
 ぼくは腹立ちまぎれに言ったのだ  
 女房はぶいと横にむいてしまったのだが  
 亭主も女房も互に鮪なのであつて  
 地球の上はみんな鮪なのだ  
 鮪は原爆を憎み  
 水爆にはまた脅やかされて  
 腹立ちまぎれに現代を生きているのだ  
 ある日ぼくは食膳をのぞいて  
 ビキニの灰をかぶつていと言つた  
 女房は箸を逆さに持ちかえると  
 焦げた鰯のその頭をこづいて  
 火鉢の灰だつつぶやいたのだ

返事、ありがとう。僕は段ボールを受け取つては受け渡す毎日です。元気か？ 元気じゃないか？ そんなことをわざわざ鈴木くんに伝えても、だからどうしただけのことだから別にという話で：まあ鈴木くんが元気なら僕は元気じゃないし、僕が元気なら鈴木くんは元気じゃない。というか、そんなことはどうでもよくて、僕は少し段ボールの話をしたとおもいます。段ボール：つて知ってますか？ まあ端的にいつて茶色い箱なんです。大小様々なものがつて、中にいろいろなものを詰め込めます。まるでニンゲンみたいないろいろなものが詰め込めます。段ボールとニンゲンは考えてみればよくていますね。あつちからこつちへさまさまな場所へながされ最後は、然るべき場所で空のまま潰されます。僕はこの潰された段ボールたちの残骸を見ながら「儂い」なんておもったりもします。くだらないですね。でも、段ボールの茶色い肌を触りながら僕はどうしてもオルガニックな感じがしてなりません。ニンゲンのように中身は何が入っているかわからないところが特に。僕が手にしている段ボールには、もしかしたら国家を転覆させるような重要な何かが入っているかもしれない。まあそんなわけは決してないんですが、街を行きかうニンゲンが、みんなただのニンゲンであるように、多分、この段ボールの中には生活の断片が、まるでハラワタのように整合感をもつて入っているでしょう。つて、こんなことを書いてしまう今は午前二時四十九分、もうそろそろ精神が腐りはじめる時間：ああそう獺の詩の話でしたね。すっかりそんなことを忘れて、徒然なるままにこの手紙を書き始めてしまいました。というか、僕、その詩が今、手元がないし、全く内容も覚えてません。あしからずですが、鈴木くんの手紙に貧乏について書かれていましたね。貧乏やら生活やら聞いて吐

き気がしますね。あと、僕が個人的にもっと吐き気がするのは、生活上主義というか、生活していれば偉いみたいな考えのやつっていますね？本当にくだらないやつですね。たいした仕事もしてねえくせに仕事だ仕事だというやつ。

果たして、そんなにみんな仕事だといえる仕事があるんですが？労働だ、労働だといえばまだ納得できるんですが……まあいいけども反対に……ではないですが大きく包括して芸術至上主義もくだらないですが、もう昨今では皆がクリエイターで、皆がアーティストですよ。僕は芸術という言葉が大嫌いなんですが、まあいいや、この話はまたの機会に……といっても大した話じゃありませんが、さて件の獺の話ですが、ちよつと疲れたのでそんな話、知りませんが、まあ今、端的におもうのはあの当時だから、あれだけの貧窮が様になったんでしょうねえ。今、あれだけの貧乏なら様になるどころか蔑まれるだけで多分、相手にはされないでしょう。獺だつて歴史が、その突き抜けた「明るい貧乏」を伝えていますが、いざ当時の獺の内心は、冷や冷やで何をやるにしても「金がねえ」のボールが覆つて、血を吐くような（同じ貧乏極まった葛西善蔵の同名の小説がありますが）感慨であつたとおもいます。でも獺が今でも広く膾炙しているのは、やはり貧窮を宇宙的なレベルから俯瞰して書いたところでしょうか？詳しくは知りませんが、ただ地球なんて言葉が出てきたりする印象で言っています。まあ、個人の貧窮を宇宙的なレベルでみているとそりゃ貧窮しますよね……というかやはり今なんてそうですが「金がねえ」ということ悪いことなんですつて、よくわからないし、なんだか眠くなつてきた僕ですが、そうそう、チンコの話をしてましたね、前回の手紙で。鈴木くんという回転するやつ。あれ僕も以前、何かで見たことあるんですが、巷のあーていすとがつくり出すものより、よっぽど創造的ですな。

ああいうのをみると進化論的にニンゲンってまだまだ捨てたものではありませんね！  
というわけ、またっ！次の手紙までには、山之口獺を再読しておきます。

もう七月ですよ。七夕なんてものもありますよ。今年も、ヒコボシとオリヒメは鈴木くんの言っていたアクロバットのセックスで交わつてほしいものですね。

金子鉄夫

金子さま

先日、大学の授業中に教授から「鈴木くんはもしかして詩を書いていませんか？」みたいなことを言われ、金子さんならまだしもぼくみたいな駆け出しの詩をどこで見たのか、あるいは誰から聞いたのかはわかりませんが、見ている人がわりと近くにいたのだということに驚きました。そうそう、普段よく行く居酒屋の店員さんにも骨おりダンスっ見えますよ！みたいなことを言われ、というのでもその人が詩を書いている人だからなのですが、これも実話としてはあまりによく出来過ぎていて、小説にすればとたんにチープになつてしまうような出来事が現実ではたびたびあるのだと思いました。やはり詩を書くにあたりてはこんなふうを書いてきた詩が現実のなかにたしかにあるということ、それが喰い込んでいるのか始めからそうだったのかはわかりませんが、そんなことを強く実感しました。それはこの詩においても言えるのかもしれませんが。二人が囲う食卓、そのなかで交わされた会話はたしかに現実にあつたものかもしれない、妻がどことなくかわいらしいリアルを

感じるところも、たしかに生起した出来事がここにあらわれているからなのだと思います。

そして、そこから地球規模の跳躍が起こる時も、それが紙の上で行われた所作であることを一瞬忘れてしまうような自然な足取りを感じます。技術に還元すれば、それは行と行とのわたりの上手さであるだけなのかもしれません。けれど、もしかしたら本当に二人の食卓のなかに地球が入りこんでいる現実が本当にあつたのかもしれないし、そこにおいて「そんなことあるわけないじゃん」と思うことの方がよっぽどありえないことなのかもしれないと思います。鰯を通して地球が食卓の上たしかに置かれたのだと思いきるをえない現実の、あるいは詩の持つ力というのは恐ろしいですね。ぼくは詩を神聖化したくはないので、すべてを詩の成果であるとは考えたくはないのですが……

書かれてあることが現実にはなかったとどうして言えるんでしょうか。セックスの時にペニスを女性の膣に入れたまま、ペニスを軸にして回転する男優の話がありましたね。あれだつて言葉の上では「うそやん」つてなるようなことなのに、実際に動画としてあるという事は現実を起こったことなんですよ。あれを見ると、男優のサービス精神といひますか、飽くなき探求心といひますか、人間の可能性というものを強く感じさせられますね。金子さんが段ボールの中に見てしまったものは、きつと本当に国家を転覆させようよな何かがあつたんだと思ひます。それを個人の空想の問題で片づける人は、現実を無視している人だな、と思ひます。そう思ひつてしまつた時、そう思ひた力が産み出すものは全て現実なのではないかとさいきんは

なんとなく思ひます。なんか、宗教臭くてあれですね。でも、信じる力がなければ人は生きることができないよなあと思ひます。現実には詩が勝つということがあつたのかは分かりませんが、詩もまだまだ負けてはいられませんね。

山之口獏の詩集はぼくの家にあるので今度貸しますよ。片方がとりあげる詩を読まないまま手紙を書き、もう片方が当の詩を読み込んで必死に返答するというのはどこかで見た構図ですね。また暇があれば会いましょう。ぼくも今年で二十一になりました。まだまだ考えが甘いところもありますが、どうかして生きていきたいと思ひます。

鈴木一平

鈴木くんへ

返事ありがとう。その実話はあまりにチープでいただけませんが、あの山之口獏の作品を僕はまだ再読していませんから、あれなんです。僕は最近、前回の同様、段ボールの話をしたとおもつていますが、そればかりでは拉致があきませんねえ。拉致があきることなんてこの世にはありませんが：生きるつていうこと自体が拉致があきませんねえ：あのー、返事を書きだしてってなんなんですか、あまりにうんざりしすぎで気分もイライラしがちで会う人、会う人を眼球をエグり出してやりたい気分です。文章が書けません。

まあ、生まれてこの方、うまいこと文章を書いたことなんてありませんが：何かを読むということさえ、まますらない有様ですよ。

まあ、今までままになったことなんてありませんが。あの、思い出しました山之口獏には第一詩集を出したとき云々なんて感動的な逸話が確かありましたね？、鈴木くんも知っているとおもいますが、僕もついこの間、第一詩集を出したんですよ。反響が微々たるものですがありましたよ。みんな勝手なことを言ってるなって感じですよ？僕はもらった感想でうれしかったことなんてひとつもありませんよ。ふざけてますね。たいしてみんな読んでないんですよ。詩人ということに託けて送られていう図々しいやつもいましたよ。そいつから僕は何ももらってないのにさ。なんかエラそうにぶっこいているやつもいましたが、なにもうれしくありませんよ。きつとそんなやつらには表面だけしか伝わってないんだからよ。アナーキーやら、パンクやら、そんな表現が僕の詩集について書く文章に散見されましたが、なんだって感じですよ？ひとりづつならべて鼻っ柱を削いでやりたいですよ。本当にここに実名をならべてあげられない悪口を言ってるやつでもいいんですが。

笑い草ですよ。僕は一番、うれしかったのは何十冊もある詩集を見たウチの姪っ子が「同じ本ばっかいっぱい買ったらダメでしょうっ」っていう当たり前のことを言われたのがうれしかったな。なんだかさ「そりやそうだ」ってさ。まあ、グダ巻いてももしかやうがない。昔、辻征夫か誰かがマヤコフスキーとランボーを合わせた詩集を作るんだっていうのがありました、僕の詩集なんてうんことしようべん合わせたような詩集ですよ。うんこがマヤコフスキーでしょんべんがランボーですってこんなくだらなら手紙なら書かないほうがマシでしたね：はっは。

というか不真面目ばかりではイケないですね。この手紙の主題は男優のチンポのこと

じゃなくて山之口獏の作品についてでしたね？ま、次の返事を書くまでにはジュンク堂かなんかで立ち読みしときます。そもそも山之口獏の詩の話をはじめたのは僕なんですよね？失礼ですね。まあいいや。鈴木くんは二十一歳になったんですか？まだまだ当たり前で、毎日、毎日、へらへらしてましたね。まあ今だってへらへらしているのは変わりませんが：まあ生きてても死んでも同じだとおもいますから、適当にやってください。まあもう夏ですよ。街に出ればみなさん露で股間を抑えっぱなしですよ。なんつってさ。死ぬっ馬鹿。じゃあまた。

金子鉄夫拝

### 金子さま 3

さいきん本当に暑くなってきてヤバイ、と思います。ぼくは大学のレポートに追われていて、明日までに出さないといけない英語のレポートに手を出していないというのが最近の悩みです。この手紙を出した後に図書館へ行こうと考えています。

山之口獏の詩で第一詩集がどうこうというのはたしかにありましたね。「処女詩集」という題で、こんな感じの詩なんです。引用します。

「思弁の苑」というのが

ぼくのはじめての詩集なのだ

その「思弁の苑」を出したとき

女房の前もかまわずに

こえはりあげて

ぼくは泣いたのだ

あれからすでに十五、六年も経つたらうか

このごろになつてはまたそろそろ

詩集を出したくなつたと

女房に話しかけてみたところ

あのとぎのことをおぼえていやがつて

詩集を出したら

また泣きなど来たのだ

これはなんかいい詩ですね。そういえば、誰かの  
ある詩を取り上げてこれが本当の詩だ！ みたい  
なことを言う人がいて、本当の詩つてなんだろう、  
と思ひました。本当の詩は、詩の外側にあるよう  
な本当らしきにかかつているのなら、本当の詩な  
んで書かなくてもいいな、と思ひます。

「ちちこわし」についての話は色々聞いていま  
す。ぼくの周りでも読んでみて面白いと言う人  
がけっこういてよかつた、と言おうと思ひまし  
たが、やめます。以前、金子さんが「詩とはメッ  
セージだ」ということを話してくれた覚えがあ  
ります。メッセージは誰かに伝わることで意味  
を持つもので、反対に詩は伝達されることを目  
とする何かではないと誰かが言う時に、詩が何  
かしら書いた人の伝えたい意味に沿つて読まれ  
るような機会は思つた以上に少ない、もしかし  
たら一人もいないのかもしれないという不安は  
あります。もしかしたら自分の詩を真つ先に  
誤読していたのは自分なんじゃないか？ とい  
う不安もあるかもしれませんね。ぼくはなんと  
なくそんな思ひがあります。考へても仕方なの  
なことだ、とは思ひませんが、ぼくは詩を書い  
て誰かがその詩を誤読してくれることが楽し  
みだつたりもします。まあ、実際ぼくはまだ詩集  
を編んでいませんし、書き始めて五年くらいで  
しようか、本腰を入れて書き始めたのも去年か  
一昨年がせいぜいで、日が浅い。だから、金子  
さんの話を身体で理解できていないのかもしれ  
ませんが……

山之口獏は、というか、近代詩に括られる人た  
ちのなかで、今も詩を書いている人はどれだけ  
いるのでしょうか？ 百年ぐらい現役で書いてい  
る人は、よく調べてはいませんが、もうみんな  
死んでしまつていゝものだと思います。良い詩  
を書くことの条件の1つに「生きること」を挙  
げた詩人がいましたね。体験の話ではなく、そ  
れは現実に、生身の身体を持つて生きていゝと  
いうことです。だつて死んでしまつたら詩は書  
けないですからね。何を言おうというわけでも  
ないんですが、生きていゝということはそれだ  
け可能性があるという、これも当たり前の話で  
すね。それにかまけてないでしつかり生きてい  
ることに立ち返つて詩を書かなければいけない、  
いや、書くために生きてはいけないのだと言つ  
た詩人もいます（誰のことでしょうね）。たとえ  
ば書いている肉体のことについて書く詩人がい  
ます。けれど、その多くは抽象的な肉体になつ  
てしまつていゝます。ぼくもそのうちの一人であ  
るような気がします。生きていゝ肉体を忘れて  
いゝからなんだ、とその人は言つたかもしれま  
せん。要するに詩の内部で詩を書くだけに留ま  
つていゝという問題でしょうか。これは、耳の痛  
い話です。詩を離れてあるものに向けて、ぼく  
たちは詩を書かなければいけないのかもしれま  
せんね。いろいろな話があるかと思ひますが、  
詩のなかに詩ではないものを持ちこむことに  
よつて詩が詩を離れ、同時に詩となつていくと  
いう話。それも一言では語れない、さまざま  
視点から話さなければいけない話ではあります  
が、さいきんはそういうことを考へていゝます。  
とりあえず、ふいに「詩的」であることを忘れ  
て何かを書くということが、思ひもしなかつた  
ところに詩を表すのではないか？ 山之口獏の  
詩を読んでいて、そういうことを強く感じた、  
ということにしておきたいと思ひます。

金子さま

二通目です。あれから一ヶ月近く経ちましたが、お元気ですか？ 携帯電話は、まだ故障したままでしょうか。しばらく返答を待っていました。が、とりあえず今回はここまでということ、ぼくが原稿の体裁にまとめておきますね。次の詩も、後で改めて送ります。編集後記に関しては、以前送ってくれた原稿をそのまま編集後記に使います。ぼくは今、山形に軟禁されているので直接会いに行くことはできないのですが、しばらくしたらまた橘さん、吉田さんを交えて話しましょう。それでは。

鈴木一平

# mistake?

今回のゲスト  
**依田冬派**

『mistake?』は毎回ゲストに自身の詩作品の中から、ゲスト自身が考える発表作品（OKtake）と未発表作品（mistake?）を選んでもらい、なぜその作品が未発表（mistake?）だったのか、ゲストの方をお呼びして編集員が探っていく企画です。

次のページから

「OKtake」

「mistake?」

「動画」

の順でお送りします。

## オイタヒトハイル

依田冬派

ゆるやかなゆうぐれの坂道を  
ふたつに寸断して  
薄く汚れたねずみのいろを  
その身にまといながら  
むかし美少年だった老いたひとが  
骨をわたす  
わたしたちの膚に  
ちいさなわたしたちの家に入る  
二本足の馬のような  
テーブルのうえで  
ひをともしつづける蝋燭の  
下腹部を蹴りあげる  
老いたひとは声をあらげて  
ふりむくな、と天井を見あげていった  
壁のむこうのおんなも押しだまり  
セキセイインコが羽ばたつかせ  
あかく変色する姿をみている  
窓はまぶたをきつくとじて  
どこまでも黒い闇を呼び込み  
内側に濁ったあめを溜め込む  
たとえば  
町がふたたび溶けだしても驚かない  
もう誰も腕を残していない  
あの歌声さえ途絶えて  
ゆりかごのなかの林檎も  
牛のようにつめたい眼を虚空へと  
放りだしている

わたしたちに哀願され

OKtake

老いたひとは棲みついている

すきま風のなかのフルートに近づき

みみをそばだて

白い傷口から

森林の動脈をたどり

しかし、みどりのあかるさを嫌って

かがみこんだ体勢を保ちながら

漂流する湖のひとつを

カンバスのなかに引き込み

ふりむくな、ともういちどいつた

遍在する無数の眼が

喪われた音階を

ひろいあげようとしている

固められた大地の底から

まっすぐそらへとのびてゆく

ひこうき雲を

からだのなかで追いかける

まんねんがながれる

扉をひらくと老いたひとがいて

また別のとびらをひらくと

おいたひとはいる

OKtake

## 着水

依田冬派

少しずつ夜はけずられ  
なれた半身が月にはいつて、  
地上の踊りをみてる  
ねむらないこどもたちの  
にぎるくだものは  
カラフルというにおいをわすれ、  
黒い味をかむ

いま、街はプールのなかにある  
黄金いろのあまつぶが、  
似た空の表面をはじいても  
画家のひとふでにさえ追いつかず  
ときはただ逃げさる  
それでも熱狂はやまない  
しかし、円は突然にほどかれる  
感情は気泡となって  
たぎるものをすと失ってしまい、  
ながいふゆがまだ越せない

いっしんに視線を集める水中には  
どこにも隠れる裏側はない  
皿のように裸だ  
だから動物もヒトに仮装して踊る  
戻れというならば檻をよこせ、  
ニゲサルトキノハリ  
ニゲサルトキノハリヲオエヨ  
つないでいる手を放し、  
しずかな渦にひかれてゆくものが

mistake?

あとを絶たない

ひとり、ひと、またひとりと

沈黙の棲む、ランプのある家へ

下半身だけを歩かせ

その行列へとおいかぶさる

百メートルさきの遊園地がつめたい

そこでゆらめくおおきな影が

月までとどくほどの

音楽をとりかえし歓声があがる

そしてまたすぐに青ざめて、

あふれるのを待つしかないのさ

糸のように踊り、

乾いた花にもあこがれながら、

ふたたび黒い味をかむ

か、み、かみ、つづけるかむ、

懐かしい味だと泣くひとの姿もあるが

いまではそれも

この街のあかりとおもえて、

月のでっぱりから

きれいなフォームで飛びこむ

mistake?



# mistake?

クリックして、動画へジャンプする

撮影 佐藤健人

ダンサーズ

だ

ん

さ

ー

ず

っ

## かぞえる

兼樹 綾

あと数日で幾ら入るか  
考えるような時に

そつと仕草を 真似てみる  
薄い紙をちぎりとるような  
紙幣をはさみめくるような  
日めくりも給与袋もないが  
数える

動作で畏れをおもいだす

仕事ではステップを踏んで  
輪転を稼働させています  
効率のため出来るだけ

無駄な動きをせずにいる  
自分がひとつのマシンのような  
秩序のただなかにあつて  
数千数万の

紙幣が流通するのを  
夢想している静謐

無人のカンファレンス・ルームで

ところと

連動のしない身体を  
ほしがる時があつた誰を

通りすぎてもへいきでいたかつたのだ  
さざめきあう清潔な気持ち

軽口に見え隠れしても  
把握はできなかつた

掬う前に流れた

いまや

九マス分のステップによつて

世界は私のもの

数えられるものだけが

尊いのだ 仕草をつけて

夜が来る度

扉を閉じて

手帳に書き込む

姿勢を伸ばす

椅子に座って足を組み

考えるため顎はかたむく

すると些細な

動作を許されるために

生まれたような気がしてくる

## バーストホーム

疋田 龍乃介

滴るバーストの中でずっと埋もれてきました  
たとえばバーストという人が

浜松市に家を建てたとき

別のバーストさんを知っていたお向かいの絹代は

まず最初越してばかりのバースト氏へ

二人のバースト兄弟疑惑をかけましたが

すぐに和解してお互いにバーストしました

火滴連鎖秒挫の誤差による

3度のバースト現象

次から次へと窓ガラスを避けていくうわべごとのつらなりは爆笑しすぎてしまった備え付けの断面に斧から期日の未知を玄人の作法保ったまま吹き上がることを開始しては消え失せ再開してはなめらかに「さる」。よこへ、蟹の爪で、かき氷食べたくはない。さかさぶれ、これが本当に秒挫の仕業であろうとも、せめて電撃まででおさまりたい。すこぶれしびれながらコーヒー飲んで休みたい、バーストホームのあっけない煙突で、とある婆、死ぬ代が正味の話を唱えている

注、死ぬ代は高いところなどでは死なない女

「バーストというのは

若いからこそできることだ」など

言った先からがばばばすっん

死ぬ代の死が謹んで夢実され

迫り来る不死のバーストが小声となって

富士山を越えていく

皿を置くとき気をつけないと

密談も後にしたほうが良いらしく

バーストの淵に座りながら

私はひたすら鳴いておりました

世界の筆筒で一番可愛い

あなたのお家はどこですか

二階にはタンスにゴンが備えられ

あなたを筆筒で備え付けてしまうソナタは

9本の、夜。は、な、が、残る

ゴゴーン

怖気づいたあなたのお家へ帰ればいつも

タンスの外側から一本ずつ

夜を突き刺す愉悦に身をつつむそれは

それはもう誠に最悪にきつたないけれど

「そうやって傍にいただけで距離的に困らないような経過が出来るなら誰だってバーストを標的にしてしまいがちでしょうがそれはバーストの真意ではなくバーストはもつと窓でバーストして靴を履くときなどにもバーストで飛躍的にバーストに向けて素直でさえあれば良い」のかもしれないのかどうかしれないけれど、しかしあなたが怒鳴るのはいつもの後ではないですか、私は、そこなわしぶれ、と思いつつも、突き刺してバーストが喜ぶというなら

真似ようとしたバース氏が

イースト目指しトーストを焼き始め

あつけなくワーストを記録して

カーストに歯向かいながら

コーストを下げようとデーストする瞬間に

ノーストにあるケース都の真ん中で

マーストでなければならぬ上に小バースト

タースト一人前に少し及ばないゴーストが

飛び上がってローストビースト

モーストよ、モーストよ、モーストよ、

ラーストからジャーストの転がりながら

ガーストで遅めの昼飯なう

徐々にジョーストして

バースト始める断片の叫び声と共に

退屈な日が一日に至るまで少しずつ

上から下へ離れないできたのでした

富士山の頂上でまた富士山が昇華され

ご近所が一斉に鼠化で絵の具ぬりぬり

歯を磨いたらすぐバースト

絶対藻屑の沸点で

血を吸いすぎた蚊が燃える

絹代が死ぬ代を量産すると摩擦で広がり

ふやけて焦げた白装束に身を包み

さりげなく隣の家に忍び入るバーストが

消え上がりながら「送迎歓迎」の戒名が掲げられるまで先程ほどの間に燃えつくされたデジタル画面の上の蠟ななめ蠟を触り碎きながら顔面すぐさま、そこなわしづれ、風穴は時の肛門と類似していて一目ではまるでどちらがどちらに混入するのかされるのかまるで判断しづらいがすなわち蒙らばそれは焼き鳥つくねの旗頭にすら誠に渴望して消え登るよ、だから無いってとか言ってこられて旋回したい、ぎゃつぶん、死ぬ代と言えの、言え言え言え、

(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

金山 大地

2812 まるで納。

2813 最早P氏は京を棄てようよ。

2816 得意胸を以つて投擲しない。

2817 そう。

2819 細れ葉。

2820 細れ葉だ。

2822 自消によって産屋探査だ。

2826 ダンス・フロアーに反世界の聲々逸

2827 肌も膚も不都合だと語る。

2833 人間が赤いサンドバッグのように操縦している。

2836 そうか。

2840 そんな文学だった。

2844 だがP氏の感傷はどのように無数の組のようであるのか。

2845 特な不可抗力について論じることは可能か。

2853 消費者が犯罪者か。

2855 いずれにしても高尚なアウトサイダーを氣取った安福な売春女の安福な美には付き合えない。

2859 そんな暇はない。

2864 P氏は七百だ。

2866 地獄はスタイルだ。

2868 上等だ。

2871 君は処女とやつたことがあるか。

2872 P氏は処女とやつたことがない。

2873 素問らしい。

2878 真実が暴露らしい。

2879 まるで釘だけのパットのよう。

2883 ははっ。

2886 さあ飛べ。

2888 女。

2889 関係という関係は陰毛なのだ。

2892 陰毛は非道であるだろう。

2897 肅清すべき対象の形態は不意に超越的であるだろう。

2898 針が在る。

2901 凄いやつという水準。

2903 そこを駆け巡るアクション・ファンタジー巨魁れ自体さ。

2905 本当ですか。

2907 本当です。

2908 おう。

2910 全き正論。

2912 おう。

2916 P氏は妹を絶めに切りたい。

2918 P氏はドッグ・レース場建設に奔走した。

2922 P氏は上人差別の塵で埋葬された。

2924 愉し。

2925 本心に愉し。

2926 近頃は正義だ。

2929 あるいはまた無義の断崖だ。

2935 実とありとあらゆる局面において被塵であり実に移々しい。

2936 厭々しい。

2938 物々しい。

2940 はらはらする。

2941 いらいらする。

2922 ひかひかする。

2923 うう。

2926 精神的だ。

2927 精神的で眠らない。

2930 チューイン・ガムはミサイルの夢を見ている。

2935 誰かが君の夢人を抱えようとしている。

2937 幽霊は毛布みたいなものだという。

2938 その通りだと思っ。

2939 灯油の臭いがする。

2940 音もなく山は視る。

2947 P氏の背骨は火屋を志向して疾走するだろう。

2948 そして素っ頓狂な経済争を实践するだろう。

2950 見ろよ。

2953 巨大な門が迫ってくるぜ。

2954 迫ってくるぜ。

2955 既に顔を思案することは禁じられてしまった。

2959 反ります。

2960 控じります。

2969 フラッシュは自殺堂を数字を喰った。

2971 膨くた。

2974 散文を恨むな。

2975 ところが。

2321 馬鹿なこと引ってんじのねえと不細工な笑顔が上下左右した。

2322 盗撮映像ファイルが消滅した。

2323 消滅は発現の反対。

2324 残念だ。

2325 必要以上に残念だ。

2326 口惜しい。

2327 だが疑問の余地はない。

2328 これは一〇〇%の確信です。

2329 これが現象です。

2330 くるくる。

2331 手を洗え。

2332 手を洗おう。

2333 くるくる。

2334 気持ちがいい。

2335 吐き気がする。

2336 百いたるマンションの百いたる二室。

2337 ぐるぐる。

2338 P氏はセクシャルな闘争を鑑みたる。

2339 それから突鋭なパレエ。

2340 それから饒のように食事を拒ることあらゆる季節を憎むこと。

2341 いやはや操作的だ人生は。

2342 恥ずかしい論理に閉って飛蚊症が原因し虫線は尋るばかり。

2343 テレヴィジョンなどは彫削ていよいよ腹羅骨折だ。

2344 誰がなんと言おうともP氏は唯杯伝説が好きなのだ。

2345 大好きなのだ。

2346 ごめんなきい。

2347 非道い話だ。

2348 熱狂的なコーヒー・カップ。

2349 熱狂的なコーヒー・カップに呑み込まれるリース群よきようなら。

2350 それがポリテイクスというもの。

2351 それが美の標というもの。

2352 けれどもしかしそれは確かな歴史なのでしようかと気鋭の男が異議を唱えた。

2353 けれどもしかし気鋭の男の裏切りは折り込み済みなのだ。

2354 宇宙は荒蕪のようなものに編まれてしまえ。

2355 きつとロマン主義。

2356 きつとフック万歳。

2357 斬新な企画力を以って確しの汚染塵へと所立たいのは誰か。

2358 誰なのか。

2359 まあ誰であつても構いません。

2360 ははっ。

2361 今日も珍しい映画を観賞したしP氏は座敷犬のように自由だ。

2362 メモ帳の文字は開れ続けるがそれが歴史だ。

2363 ゲーマーですか。

2364 非ゲーマーですか。

2365 ゲーマーも。

2366 非ゲーマーも。

2367 殺す。

2368 あるいは殺さない。

2369 殺す。

2370 あるいは殺さない。

2371 殺す。

2372 あるいは殺さない。

2373 殺す。

2374 もしもし？

## 抱擁の時間がひびいている

鈴木一平

抱擁の音のしない方角に足をかたむけない  
風は吹かない

人の電柱に

暮らしの鱗をあしらい

の一部をうばわれたので

私の（子どもたちを）飲む

それはね、あなたに会って話をするために  
急に鳴りやんでみたような顔の

雨がふっていて

も、毛糸の、声が聞こえた気がした

毛糸、筆圧で膜を割るきみの

声を読みとれる日を願う

それから三枚の絵を同封します

あなたは読み終えてから目を向けると

それは、私は何をけがしてきたのか

あなたを分かりつつあるということ

夏は瞳に潜り込んで花火をしたこと

夏は川の皮いちまいでつながっていたこと

つながったまま歩いていくの？

毛糸をかたむけて橋のしない川

この手紙はペンで書かれていて

血の匂いが全くしない

ありふれたぼくはそれでも注射器を

病院前のビニール袋が臓器だった

私は急に現れる

やり過ごした後の晴れ間に

合うためのまなざしを裏で食べていた

そう、きつともうすぐ火薬の

臭いのする哺乳類をあきらめて

毛糸は誰に巻き疲れてねむっているだろう

毛に刺し貫かれた糸を動かしているだろう

この夜、町一つぶん羊水の

横殴りに降り頻る肌

浮かぶ、舐め取って抱きしめるこの日々

この時間がひびいていくように

短

歌

た

ん

か

## 結構胴

飯塚 距離

(こののかご) しせきがぐんとへるみちで あびている にくのころ

黄菜さわやせは図鑑に、寝る子は大使館に残ってる蛇口にはまってる

(こののかご) せき みず びてい こつ

千分の一秒の家、お弁当の踏み切り、字がわかるかびがいるわあ

メーチルマチポクモクモ 胸拭きは聞こえる居留守溺れがてらに鬼門ごくごく メーチルマチポクモクモ 胸糞に声の粉つき歯が青くなるうちわばてばて メーチル

図体のあまり物から作りだす写真の巢で知られる、馬鹿マールじゃん

(こののかご) みずみーつみず みずみーつみず

あかねさし辛い彦星(寄せ書きを愛す)、これまでの下水もげんき

(こののかご) きゅうこんからひこうき みずみーつみず

この旅は六キロ年下のお兄ちゃんを広告でまだ、ゆすっていられる

(こののかご) しせ んとひこうき みずあびて

心肺が呼ぶ晴れの日に立つ、じきに更地にされる身長身長の国

(こののかご) ひこ ぼしうつつてる

広場には声の萍、筋肉は粉、友好はいまも五子十童図

(ここのかこ) しせきがぐんとへるみちで あびている

すずなりの体に添い寝をするのではないまはない十に満たないひつぎ

骨カイブツ

ほ

ね

か

い

ぶ

つ

## 「福田和夫」

甘楽 順治

以前参加していた同人誌『酒乱』で、八〇年代詩についてのアンケートをしたことがある。その回答の中で、貞久秀紀さんから「私にとって欠かせない現代詩とはじめての出会い、福田和夫の『美しさとさみしさ』です。このようにすぐれた詩集がなぜ資料にないのでしょうか」という指摘を受けた。実は『酒乱』のこの特集では、八〇年代に刊行された主な詩集の年表を掲載したのだが、これはわたしが作成した。けれどもここには「福田和夫」の名は載っていない。別に何か意図があったわけではない。単に知らなかったのである。それであわてて「福田和夫」の詩集を探した。

福田和夫の第一詩集は、わずか三〇ページほどのもので一九七七年、深夜叢書社から刊行されていた。タイトルは『名前を呼ぶ』。七七、八年から八〇年代前半までは、自分が二十代だったこともあって、色々な詩集に感化された時期であった。もしその頃読んでいたら、どうなっただろう、とふと思う。貞久さんが一押しするのはよく分かる。今読んでも面白い。という言い方があるが、この場合は違う気がする。今のものより面白いのである（もちろん、自分にとっては、という意味だが）。

ウオウ

ということとは違っていた

名前を呼ぶ

とひとは

美しいのであった

ひとは

忘れていたように

名前を呼び交わした

おおらかは

そんなことであった

緑や若葉は

べっだん

美しいものでなかった

（「名前を呼ぶ」全行）

福田和夫という詩人は、しかし一体どういう人なのだろう。この後、『勇気のある鳥』（一九七九年・創樹社）、『美しさとさみしき』（一九八二年・思潮社）、『女神の発見』（一九八八年・思潮社）と三冊の詩集を出している。その後も出しているのかもしれないが、わたしには分からない。伝記的なこともよく分からない。でも、その方がこの詩人には似合う気がする。いずれの詩集も五〇ページ程度、多くて一〇〇ページと少なめで寡黙なのである。詩の担保に、自らの人格を饒舌に捧げる人もいるが、それはどの詩人にも適切である、というわけではない。

貞久さんが称賛していた詩集『美しさとさみしき』から、二編引用してみたい。ほんとうは全部引用したいところ。

まだ（発達的に）あたらしい家屋だったころ  
横になつて

考えている

ひとを

みることができた

眠っているのか

何ごとかを

考えているのかは

見慣れていることなので

すぐに判断がついた

ひとびとは

このひと

はいま何ごとかを

考えているのだな

とみなすことができた

と行き過ぎる

ところに

世界をあたえてみる

（「行き過ぎるところ」全行）

高層ビルが七つみえる

時間が経ちましたね

そうですね

と私が会話したわけではない

この世にはそうした会話をするひとが

いないとはいえない

たぶん

時間をたしかめるといふのは

そういうことか

対称の自由というもので

空間をみつめて

時間をたしかめなければならぬ

そういえば

ありすぎた

いえ

空間は量ではないから

ありすぎない

悲しいのは

ここのところらしい

（「悲しいのは」全行）



## 暁方ミセイ（詩人）

表出的な野蛮さと、内在的な繊細さという二重の構造を持つて、書かれているように感ぜられる『ちちこわし』。この背景でがんがん鳴り響いているものを、「金子鉄夫的エレジー」とでも言ってみよう。女々しい感傷に引き取られず、虚無感を刺胞動物のようにぐったり伸ばして刺す。「おれの皮のしたで／トロピカルな浜辺なんてことをおもう」（「吐きそうさ、ニシオギクボ」）「濁音にまみれた消去法を孕んで卒倒していく／ぼくのゆきずりちゃん」（「モンキーブック」）「死ねないねえクズ死ねないねえクズ」（「死にぞこないのクズ」）こんな風に苛立って、言葉に熱狂して踊り、次々に詩行は吐き出される。しかし真には、金子の詩は自己を他者のようにみつめ、書かれているように思われる。最後の数行がいつも一番好きだ。馬鹿げた感動も独りよがりな美しさも書き手たちが陥る全能感もない。ただ、手を切るように、「そうだろう、あたりまえだろうよ」（「アダルト通信」）

## 鈴木のア部（音楽家）

普段の生活の、ふとした瞬間に「うじゃねえのかよ」「うだろうよ」「うだなつ」とか言っていてしまっている自分に気付く。金子鉄夫氏の影響である。私はこれまでほとんど音楽を作ることしかやって来ず、学は無く、賢いことも含蓄のあることも言えないけれど、一人の読者として、日常の言葉遣いに影響を及ぼすような詩人に出会えた喜びを、ここに記したいと思う。

最初に金子氏の詩を読んだのは『現代詩手帖』の投稿欄であった。当時は「ひらがなが多いな」ぐらいにしか思わなかった覚えがあるけれど、その後始まった『骨おりダンス』の活動を追って行くうちに、どんどんその魅力にハマっていくことになった。独特の文体や、一見支離滅裂な言葉の連なり。そしてそれを

## 屑山屑男（FRASH・UPPI）

金子鉄夫の詩集『ちちこわし』を読んだ。本屋の詩集のコーナーよりもビデオレンタル屋のVシネマの棚に置かれたほうがしっくりくると思った。どちらかと言うとチェーン店とかよりも、最近見かけなくなった個人経営のお店の方が好ましいか。ために石橋保の『本気！』全30巻と哀川翔の『修羅のみち』全12巻の間に、この真つ赤な詩集を挟み込んでみる。まるでヤクザ映画の中でチンピラたちの流した血が、ベッタリと染み付いたように真つ赤な表紙が、柵から睨みを利かせてくる。暇つぶしに立ち寄った仕事帰りの肉体労働者にも容赦なく睨んでくるだろう。横に並ぶビデオのジャケットにうつる、いかつい顔の俳優たちにも負けないくらいに。

金子鉄夫の詩は、凄んでいるが同時に繊細だとも思う。そして、ヤンキーや肉体労働のおっさんにも伝わる繊細さがあるはずで、まさにこの詩集は彼らの繊細さに響くものだと思う。

嫌なものにさせない、迫力やメッセージ性溢れる一行一行は、同じ芸術家として（「何言つてんだ、ばかつ」とか言われるかな…羨ましい限りのパワーを備えていた。例えば「アダルト通信」の最終行「そうだろうよ、あたりまえだろうよ」のワンフレーズは（『ちちこわし』では1文字削られているが）、私のような一般人の日常生活に滑り込むように入ってきて、一日に一度は心の中で再生されるようになった。会ってみるとお人好しで優しい感じの金子氏からは想像もつかない、凄まじい影響力である。

『ちちこわし』はその一行一行のパワーが無限に引き出されるような形で編まれた詩集であると思う。開くと、眩しくてつい目を閉じてしまう。復習と論理に塗れた退屈な世の中を、明るく照らす一筋の光だ。もっと多くの一般人に、この光を浴びてほしいと切に思う。

そして、今後も仲良くしてもらいたいものである。最近「海に行こうぜつ」という案が出ている。

## 日本現代詩のマイルストーン、金子鉄夫の詩集「ちちこわし」について。

田中 宏輔（詩人）

**2012年05月28日（月）**

きょうは、金子鉄夫さんから、詩集「ちちこわし」を送っていただいて、ちらりと目を通したのだが、さっぱりよさがわからなかった。詩にもいろいろあってよいと思うのだけれど。帯文には笑った。野村喜和夫の大げさぶりと、小笠原鳥類の歯切れの悪さに。いったいいつ、この連中はいなくなるのだろう。ちなみに、その大げさな言葉と、歯切れの悪い言葉ってのはこれ、「金子鉄夫、この繊細きわまる悪童の登場に拍手を。」「金子鉄夫は静かに、残酷なものや戦う詩人であるのかもしれない。」なんやろうか、この大げささと、歯切れの悪さは、よくわからんけど、性格的なものかな。本文も引用しておこうかな。タイトル・ポエムの冒頭の5行、「うねうねでうねうね／踊れ、踊れ／ムカデのように逸る都市／の奇景を孕み／太いリズムの導火線」詩行の音のまたがり方が美的ではない。詩には意味などなくともよいが、音が詩なのである。「死にそこないのクズ」という作品の冒頭の8行、「クルクル脳裏／バウンドさせてキナ臭いドラマ／びりびりにびりびりに破いて新宿／また産まれてしまうだろうから／はなびら握りつぶして／騒がしいフトモモの咬合／（いじめてやるよ）／ヘドが出るね、

出るね」同音反復が煩わしい。ほくなら避ける語法である。しかし、才能とは、ひとが避けたところにも落ちているものだから、それを拾い上げて、自分の文体にしてしまうひともあるのかもしれない。いま批判的に詩行を取り上げていったけれど、ちょっとおもしろくなってきた。もしかしたら、毒？ お風呂場で読む。

さいきん、お風呂場では、カドフェル修道士ものを読むのだけれど、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」を持って入ることに、ちょっと、手からはなれなくなってきた。お風呂場で読んでみることにした。しばし中断。BGMは、ノーナ・リーブズの「SWEET REACTION」。全作を読み通してのおおまかな感想と、気に入ったフレーズを列挙していこう。まず、おおまかな印象だけれど、美しくない。美しくない詩もあっていいと思うほくである。なんらかの感覚の生起消滅のリズムがあれば詩だと思ふからである。そして、ここにも、感覚の生起消滅のリズムはあると思う。だから、この詩集に収められた作品も詩だと思ふ。全作を通して読むと、感覚の生成消滅のリズムがあることがはっきりとわかった。金子鉄夫さんは違うとおっしゃるかもしれないけど、むかしほくが書いた「熊のフリー・ハグ」を思い出してしまった。ほくの「熊のフリー・ハグ」は、感覚の生成消滅だけで書いていったものだった。ただし、同じ手法で、つぎの詩集も出されたら、ちょっと辟易としてしまうかもしれない。こういった感覚の生成消滅のリズムは、一回限りのものだと思うからである。何十年も同じような手法で詩集を出していく詩人がいて、またそれを評価する他の詩人たちもいるので、ほくは驚くのみだけれど。詩は知的で感覚的な言語パズルなのだから、いささかの知的怠惰もゆるされないと思う。ちょっと話がずれたかな。つぎに、この詩集で、ほくの目にとまったフレーズを拾い上げていこう。「ものがたりは亀のままのびてゆくらしい」 亀の好きなほくとしては、にやりとさせられた。「こうもんから煮えたテニスコートのおい」これは完全にバロウズだな。バロウズ読みとみた。「ぶらさがった網タイツのような今日」そんな日がたしかにあると思う。「この際だからおれたちは気持ちいい有刺鉄線になりましょう」、「蒸発するおれたちの公衆便所ごっこ」、「ミーのものがたりのクズ／（いろいろなかたちのうんこはいろいろにわめいて）」ほくも、うんこ好きだから、うんこという単語を読むとうれしくなってしまう。「インポだったりする都市」、「カラダだけが日々を消化して／僕自身は遅れてしまう」、「ほくのゆきずりちゃん」こんなところかな。詩篇の冒頭でふんばっている詩行がいくつかあったが、ほかの行とのバランスを崩していた。しかし、おそらく作者の金子鉄夫さんは、 balan

スなどは気にしていないと思う。そういった構造を持った作品なのだと思う。どこかなつかしいような気もした。ああ、アバンギャルドという言葉がよく使われた時代があった。その時代の雰囲気を出したのかもしれない。BGMはE W & Fの THAT'S THE WAY OF THE WORLD なるほど、THAT'S THE WAY OF THE WORDS ってことか。わかさなのだろうか。わかさに嫉妬したのかな。金子鉄夫さんの詩篇はグダグダだ。グダグダに崩れている。いまのぼくの詩篇は、整い過ぎの感じがする。崩せないのだ。ぼくも自分を壊さないと、干からびた犬のうんこになってしまう。ああ、こんなことを再認識させられてしまった。どうせ、うんこになるのなら、せめて、ひり出されたばかりの犬のうんこになりたい。いや、違う。せめて、ひり出されたばかりのホッカホカの犬のうんこのような詩が書きたい。読んだひとが、ひゃーって悲鳴を上げるような。干からびた犬のうんこなんて、なんの害もないものね、笑。詩は害である。ほんものの詩は、確実に害を及ぼすものである。詩人の人生をあやまらせてしまうのである。全国にどれだけの詩人がいるのかわからないけれど、詩で人生がめっちゃくちゃになった詩人がいっぱいいると思う。ぼくもその一人だ。金子鉄夫さんは、どうかな。訊いてみたい。

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」を読み返してみようと思い、寝つ転がって読み出したら、冒頭の「うみなんていくな」を繰り返し3回読んでいた。そうしてようやくわかった。この詩には、意味がないのだった。詩には意味などなくてもよいのだと、つねづね書いてきたぼくなのに、じっさいに意味がないものを目にして、直感的に察知して、嫉妬したのだと思う。意味がなくて、美しい詩にはたくさん出会ってきた。たとえば、ジェイムズ・メリルの「サンドーヴァー三部作」や、ピセンテ・ウイドブロの「赤道義」などである。意味がなくて、美しくもない詩には、なかなかお目にかかれないのである。ぼくは、意味のない、美しくもない「詩」と書いているのだ。ぼくの詩の定義の一つは、先に書いた。詩は、なんらかの感覚の生成消滅のリズムを持つものであると。音なのである。音楽なのである。ただし、その音は、聴覚だけに働きかける音ではない。その音楽は、心臓のリズムや、呼吸のリズムや、概念や想念の生成消滅のリズムである。美しくなくて、そのようなリズムを持った詩は、ぼくの知るところ、小峰慎也さんお一人が書かれるものと思っていたのであるが、金子鉄夫さんの詩も、どうやら、意味のない、美しくもない、ただ感覚の生成消滅のリズムを持った音楽の詩であるらしい。それは稀有なものなのである。初読の際に拒絶反応を起こしたのは、意味もなく、美しくもない、ただ感覚の生成消滅のリズムを持った音楽の詩という、稀有なも

のを、こうもやすやすと実現されてしまっているという悔しさがあったのだと思う。嫉妬心が作家にとってはエネルギーの一つにはなるが、それが膨れ上がって目をくもらせてしまうと、口でもないことになる。無知蒙昧の徒となる。全行を引用しないと、その意味がなく、美しくもない、ただ感覚の生成消滅のリズムを持つだけの音楽の詩というもののすばらしさをわかっていただけないと思うので、冒頭に置かれた詩「うみなんていくな」を全行引用してみる。

なぜひとはかなあしくなると

ほほの皮をめくってまで

うみへいくのさ

(へらへらわらってんじゃねえ)

あな

あなまちがうほどあいしたひとに

うらぎられたって

どんつきの沈んだ浜辺で

本日ので、あしを散らすのは惜しい

(昨晚の再放送のはなし)

プラスチックばかりに包囲するまちに

うみおちたおれたちだから

ねりつくちいさいひとよ

(へらへらわらってんじゃねえ)

しろい液にぬれ横腹にヘビがかすろうとも  
うみなんていくな  
サイケデリックな沿線にしばられ  
(いやにきわどいうんこをしているなあ)  
廃物だらけのあさをむかえて  
ものがたりは亀のままのびてゆくらしい  
消えて、消えてしまいたあいよお  
わかってるさ  
消えてしまいたいのならくるぶしから舐めあげて  
燃えあがってしまう棒をつつこんでやる  
ちいさいひとちいさいひと  
(へらへらわらってんじゃねえ)  
だからうみなんていくな  
くうき溜めこみあたまだけういてしまう  
トウキョウさ  
ねぶるかぜにさわぐいんもうを  
(いんもうは無頼のあかしだつて)  
むすび萌える萌えるデジタル塗れに  
血ィをまわせよ  
(ハローっハローっ)

血イをまわせよ  
ちいさいひと  
(へらへらわらってんじゃねえ)  
ちいさいおっぱいを隠してまで  
地平線に馳せるな  
散る散る  
本日ので、あしは  
このにぎやかな背景に散らせ  
ちいさいひとちいさいひと  
(へらへらわらってんじゃねえ)  
こうもんから煮えたテニスコートのにおい  
においがしようとも  
うみなんていくな

この意味のない、美しくもない、ただ感覚の生成消滅のリズムを持った音楽の詩のすばらしさ。このぐっちゃぐっちゃの感じ。このグツダグダの感じが、すばらしい。音楽だ。音楽そのものである。ツイッターにこの感想を書いているのだけれど、この詩を引用していて、改行を表わすスラッシュを「SURASSHU」と入れているときに、二度ほど、「SUBARASHII」と打ち込みかけた。ほくも、このようなグダグダの詩が書いてみたい。しかし、それは真似のできない才能であるのだろう。

2012年05月29日(火)

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」を授業の空き時間に机の上に出して拵けて読んでいた。行きの通勤電車のなかでは、眠気がほくに読書をさせなかったからである。自動販売機で買った「サブリ」とか書いてあった80円の冷たい飲み物をちびりちびりと飲みながら、詩集収録・第2作目の「「くそつたれ」知りませんか？」を読んだ。見事に意味がない。見事にくだらない。まるでキングオブコメディのコントをはじめて目にしたときのようだった。「もしや、わたしのおうむを見ませんでしたか？」という、フロベールの『純な心』（滝田文彦訳）の四にある言葉や、旧約聖書の雅歌三・三にある、「あなたがたは、／わが魂の愛する者を見ましたか」（共同訳）といった言葉を髣髴したのだが、これらの言葉を引用で使った記憶のあるほくには、その記憶と重ねて、「「くそつたれ」知りませんか？」を読まざるを得なかった。これは解釈側の問題ではあるが、解釈もまた作品の鑑賞に関わるものであって、ほく個人の記憶と、ほくが鑑賞する作品とは切り離せないものであって、偶然であって必然でもある。必然であって偶然でもある。それにしても、「「くそつたれ」知りませんか？」のくだらなさ、すばらしかった。意味もなく、美しくもなく、ただただ、くだらない詩の存在は、ほくに、詩の持つ機能の一方向のあるべき可能性を示唆してくれた。ほく自身がくだらない詩をずっと書いてきたという自負があるからかもしれないが、くだらなさというものが持つ破壊的な癒しの力について思いを馳せたのだった。ほくもまた、何年もまえから書いてきたけれども、詩には意味などなくてよいのだと思うし、詩には意味を持たせないようにして、詩を書いてきた。ほくの『The Wasteless Land.III』のように、ただ、だらだらと想念の生成消滅のリズムを持たせただけの意味のないたわごとを書きつづけていく文学行為も肯定されてよいのだと思って書いてきたのであった。ほくのものより見事にくだらない金子鉄夫さんの「「くそつたれ」知りませんか？」を読んで、そんなことを思ったのである。ほくも、ことし、くだらない詩集を出すのだけれど、くだらなさでは、金子鉄夫さんの「ちちこわし」に、完全に負けているなと思った。ほくの詩は整い過ぎていたのだ。しかも美しいのである。美しさなどは、とっくに放棄したはずのほくなのだけれど。むかし書いた引用詩を編集していて、そのことが気にはなっていたのだが、美しい詩篇を収録してしまったのだった。まあ、しかし、美しいものが、いかにみずほらしいものであるか

ということの証左にはなるであろう。金子鉄夫さんのものほどの意味のなさとかくだらなさに到達しているとは思えないのだけれど、来年、「みんな、きみのことが好きだった。」という、ぼくの既刊詩集の冒頭の10作品を収録させたものを、「The Wasteless Land.VIII」として書肆山田から出そうと思う。10年ほどまえに出したものだけれど、ほんとうに、意味のない、くだらない詩ばかりを選んで詩集にまとめるつもりである。それで、ぼくも、金子鉄夫さんに遅れないで、詩のあるべき一方向に進むことができるだろうか。ふと、ニーチェの次の言葉が思い出された。「私は偉大な任務と取り組むのに、遊戯（、）とは別の遣（や）り方を知らない。遊戯こそは偉大さを示すしるしであり、その本質的な前提の一つである」（『この人を見よ』なぜ私はかくも伶俐なのか・一〇、西尾幹二訳）。

## 2012年05月30日(水)

隔週で放送されている、サイゾーテレビの「ニコニコキングオブコメディ」を欠かさず見ているのだけれど、先週で第50回を迎えたらしい。ぼくは必ず放送日に見ている。すべての放送分がアーカイブに残っていて、それもとときどき見ている。世間一般ではブサイクと言われている今野浩喜さんと、ハンサムでもなくブサイクでもない高橋健一さんのお二人のコント・ユニットで、そのお二人が、ただただ一時間近く、部屋のなかで坐ったまま雑談しているというものなのだけれど、ぼくは、ほんとうに彼らのことが好きで、彼らのDVDもすべて、amazonで買って、そのすべてのDVDについて、カスタマーレビューも書いているほどである。ブサイクと言われている今野浩喜さんのお顔は、ぼくにはとてもかわいらしいお顔に見えるのだけれど、それは、彼の才能が、ぼくに彼のことをかわいらしく見させているのかもしれない。その二人の会話には、つくり込んだコントにはない味があって、見ているぼくの気分をすごくよくさせるものがある、もちろん

ん、彼らのコントの方にもすごく癒されているのだけれど、「ニコニコキングオブコメディ」における、ふだんとあまり変わらないであろう彼らの言葉のやりとりにもすごく癒されているのである。彼らのコントを初めて見たのはチューブでだった。衝撃的だった。あの「何々みたいなの！」という口調のものである。ほかに、唐突に、「電池！」と口にする、あぶない子どものネタと、動物園にきた、これまたチョーあぶない幼稚園児のネタもすごかった。ほくの詩集「The Wasteless Land.V」の「もうね、あなたね、現実の方が、あなたから逃げていくっていうのよ。」という長篇会話詩におけるほくの言葉遣いには、彼らの影響がモロ口に出ていて、いまでも、ときどき、彼らのようなしゃべり方をすることがある。もしも、彼らのコントを見ていなかったら、ほくの長篇会話詩「もうね、あなたね、現実の方が、あなたから逃げていくっていうのよ。」は書かれなかったかもしれない。というのも、「そだね。」とか「そだよ。」とか「そだ。」とかいった言葉がなければ、あの作品の語調はなかったであろうし、あの語調によって、湊圭史くんに向かって、ほくの口から、つぎからつぎに言葉が繰り出されていったのであろうし、あの言葉の応酬になったのであろうし、なによりも、作品自体が、あの語調によってつくられた文体だからである。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第2番目に収録されている「[くそつたれ] 知りませんか？」の大まかな感想を、きのう書いたが、きょうは、もう少し突っ込んで書いてみたい。くだらなさのすばらしさが、すばらしいくだらなさ、どの詩句から感じられたのか書いてみたいのだ。これもまた、冒頭の作品と同様に全文引用したいのだが、そんなことをしていったら、おそらく、ほくは、金子鉄夫さんのこの詩集「ちちこわし」を、丸々、一冊書き写してしまうことになるであろうから、やめておく。しかし、半分近くは、引用しておこうと思う。冒頭から半分くらいの、ちょうど真ん中あたりまで。

ほくの「くそつたれ」知りませんか？ 多分、ブツブツの膚を搔いて、舌テロリン笑って笑っていると思いますが、知りませんか？ 知りませんか？ キナくさい茎をたぐりよせ、恥骨からひるがえって、皮いちまいで立っている、注射器と九〇年代の古い週刊誌ばかり散らばっている海辺。べとべとする砂に埋もれているパイプ椅子には「くそつたれ」、坐っていたのだろうか？ 七、八八……九三二、四……でたために数字をならべて、波打ち際で尾鰭をバタつかせている鯊の真似をして呼んでみる。所持していないが所持しているふりをしてズレ

て喋ってみる。「おいしく食べていない」「ぼくはおいしく食べてなんかいない」あらゆる廃油に濁った浅瀬のほうではゴムのように、知っている、はず、だが他人の装いで絡み合っているおとことおんな。「なに?」「なに、なあに?」「なに言ってるの?」ビーン、ビーン、ビーンと、冷たい音が走って、地平線で目をつむってお経を唱えている歪んだ歪んだ顔したババァ。この何げない風景の裏側で「くそつたれ」が笑って笑って包丁を研いでいたりするのだろうか? (…)

7分目くらいまで書き写したかな。引用した部分では、終わりのほうで、既存の詩的レトリックが使われている。文学的なテクニクとしては古いという意味でのレトリックが混ざっているのである。この詩篇の後半には、そういうところがいくつもあって、それで前の方の引用に限ったのであるが、ということは、この作者である金子鉄夫さんが、まだ自分の文体を、少なくとも、この作品に限って言えば、完全にコントロールできていないところがあることがわかるのだが、引用した部分は、おおよそのところ、見事にくだらない。意味もなく、美しくもなく、ただただくだらない詩句である。このくだらなさを読み手のぼくは癒されるのである。キングオブコメディの、あの破壊的なくだらなさを髣髴するくだらなさである。すばらしいと、ぼくは思う。終わりの方の部分も、はじめの方のようにくだらなさが際立っていたなら、と思われた。しかし、この詩篇全体のくだらなさは、間違いなくほんもので、ほんとうにくだらない、すばらしい、破壊的な癒しをもたらせるくだらなさである。ここで、きのう、句読点について、月刊・文学極道に掲載される予定のぼくの論考「引用の詩学」の第2回目の原稿の下書きに書いたことを思い出した。完璧な文章にがまんでこないわたしたちは、句点によって穴をあけ、読点によって切りつけて、完璧な文章を不完全なものにすると。岡倉覚三の「茶の本」の第一章につきのような文章があった。「茶道の要義は「不完全なもの」を崇拜するにある。いわゆる人生というこの不可解なものうちに、何か可能なものを成就しようとするやさしい企てである」(村岡 博訳)。キングオブコメディのあのすばらしくもくだらない、あのくだらなさのすばらしさが思い起こされる言葉である。名匠は自分がすばらしい出来の作品が出来たと思うと、わざとそれに傷をつけるという話を何かで読んだことがある。吉岡 実が自分の作詩法として、出来上がった詩の最初と最後の2行ずつを取り除くといったことを書いていたような記憶がある。くだらなさ礼賛のぼくの言葉に通じるところがある

だろうか。そうそう、岡倉覚三の「茶の本」の第一章には、つぎのような言葉もあった。「この世のすべてのよい物と同じく、茶の普及もまた反対にあった。」(村岡 博訳)。ほくはいま、文学極道という詩のサイトに月に2篇の詩を投稿しているのだけれど、このあいだ、選者のお一人に、「あなたの作品は1篇としていいと思ったものがない。嫌悪感しか持っていない。」といったようなコメントをいただいたのだけれど、それでよいとほくは思っている。嫌悪感といった強い感情は、ときには愛よりも強く人と人を結びつけてしまうものだからである。無関心な人に対して、嫌悪感などという強い感情は持ち得ないのだ。金子鉄夫さんの詩もまた、すぐにはたくさんのひとに受け入れられないでほしいなと思う。ひどいやつだな、ほくは。

**2012年05月31日(木)**

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第3番目に収録されている「青空」を全行引用する。

イジのない疣

ひと舐め、ワラワラしちゃうんだらう

おまえたち

もう意味のない交信はやめようぜ

そのままの、そのままの姿勢で千葉知る青空  
の下  
退屈なワーク  
舌からよじれるひとびとの額に  
釘を突き刺す退屈な僕のワーク  
ここでは決して本名では語っていないけれど  
偽名を必要以上におそれるおまえたちとはちがって  
無数の鬼のくび  
(嫌じゃないし、嫌いじゃないし)  
塵芥ほおばってカワイイ微生物の話ばかりしよう  
(テレビにアルコール、ぶっかけてさ)  
百年もまえから変わらない  
この青空の下の叢で歯を研ぐひとでなしは  
おまえたちのようであり僕ではないし  
僕のようにありおまえたちではないし  
「うそっ、じええーんぶ、うそっ」  
みだれるシマシマな声は僕の尻尾に瑕をつけ  
青空をトブ、頭だけ大きなガキどもは  
鉛ばかりしゃぶってくずれてしまったパパを呼べっ  
(もっともっと大きくなってやぶれちまえよ)

ぶらさがった網タイツのような今日  
埋もれないでね、誰も埋もれないでね  
退屈なワーク  
僕のワーク  
舌からよじれるひとびとの背中  
が今日はやけに悲しくみえてしまうが  
そんなことはどうだって  
どうだっていい  
青空は血走っている

全行引用したのだけれど、まえの2作品ほどのくだらなさのおもしろさはない。しかし、十分にくだらなさの力は発揮されていて、随所でにやりとさせられる。まえの2作には余裕が感じられたのだけれど、この詩集収録・第3作目の「青空」には、余裕が感じられない。おそらく、言葉の選択のいくつかに、余裕を感じられなかったためだと思われる。とは言っても、この作品も、キングオブコメディのような破壊的なくだらなさを十分に持っていると思う。見事に意味のない、美しさのない詩篇である。この見事に意味のない、美しさもない、くだらない詩のすばらしさを、きのう、ほくは、キングオブコメディのコントのような「破壊的な癒し」と言ったのだが、きょう、自分のルーズリーフを読み直していて、ふと、リルケのつぎのような言葉もあてはまるのではないかと思われた。「世界はそのままきみのものではないのか。」(リルケ『マルテの手記』高安国世訳)、「きみはどんどん使い捨てて、いつも手をさし出しては新しい世界を求めた。」(リルケ『マルテの手記』高安国世訳)。おとついな。野村 龍さんが、ツイッターで、つぎのようなことを書かれた。「これは、黒スグリのタルトでしょうか? 「空腹は最高の調味料である」と、ブリア・サヴァランは言っていますね。食べたい・・・。「ちちこわし」、誤解が解けて何よりで

す。」この野村 龍さんのツイートに対するぼくの返事は、「誤解ではなく、嫉妬だったのですね。ぼくが詩人や詩に嫉妬することはこれまでにはほとんどありませんでした。これが二度目です。」一度目の嫉妬は、南原魚人さんの詩篇「日野正平」という作品に対するものだった。話がずれるので、南原魚人さんの詩についての話は、いまは書かない。で、ぼくの言葉にまた、野村 龍さんが、「「オセロ」のなかでイアーゴが「嫉妬は緑色の眼をした怪物でございます」と言っていますね。人への思いの底に嫉妬があるとき、ルサンチマンが産まれます。僕も淡泊な方なのか、嫉妬することはあまりありません。いずれにせよ、それを自覚出来るうちはまだ大丈夫です。」といったコメントを書かれたのだけれど、あっ、その「まだ大丈夫です。」という言葉に、ぼくは一瞬むっとしたのだけれど、そのときには、怒りの感情を抑えて、ぼくはつぎのようなことを書いた。「ごくたまに嫉妬します。しかし、そのことでルサンチマンは生じません。なぜなら、すぐに吸収同化することができるからです。」と。すると、野村 龍さんから、「嫉妬を吸収同化なさる、と言うことですか？ それは素晴らしいと思います。僕は「こころが弱い」ので、すぐルサンチマンの言いなりになってしまいます。しかも、「美しい」詩ばかり書いているのです。」というコメントがあって、まあ、このひとは、なんてトンチンカンなことを書いているのだろうかと思ったのだけれど、そのときには、ぼくは、そんなことは書かずに、つぎのような言葉を書いたのであった。「美しい詩は過去のものでしょうか。美しくない詩が未来のものなのだと思います。」と。すると、野村 龍さんから、「でも、悲しいかな、僕には『ちちこわし』のような詩は書けないのです……。先日、「牛が金玉を食いちぎる」ことについての詩を書いたのですが、それさえも美しくあったのです。」といった、さらにトンチンカンなコメントが返ってきて、ちょっと一、なんなの、あなた、ほんもののバカ？ といった感じだったのだけれど、ぼくは以前より大人な対応をして、つぎのように返事したのであった。「そうだ。書き忘れていたことがありました。野村 龍さんのお言葉で思い出しました。」と書いて、金子鉄夫さんの詩集の評に、つぎのような言葉を入れて、その日の詩集評を書き終えたのだった。「そうだ。書き忘れていたことがあった。金子鉄夫さんの「ちちこわし」の詩は、意味のない、美しくもない、くだらない詩だけれど、それらの詩が持つ、感覚の生成消滅のリズムが、多くの読み手に「すばらしい」と承認されたら、「美しい詩」として存在することになるのだと思う。美しい詩の定義の「再定義」、つまり、「意味の更新」である。そうか、そうして、美は変化することによって、不変なのだ。だから、過去は美しく、未来は美しくないのだった。こんな、わかりきったことを、どうして忘れていたのだろう。自分に目隠ししてばかり。年齢をとって、ますます混乱し、頭が悪くな

る一方のほくだけれど、そんなほくにでも、まだまだ知恵の手が差し伸べられているのだということを知ることができて、ほっとした。」と。ところで、これって、何日かまえに書いたことにつながると思うのだけれど、さきに引用したリルケの『マルテの手記』にあった言葉、「世界はそのままきみのものではないか。」「きみはどんどん使い捨てて、いつも手をさし出しては新しい世界を求めた。」といった言葉から思ったのは、詩人は、いつでも新しい目でものを見て、いつでも新しい手で世界に触れて、絶えず世界そのものを新しい目にするのではないか、絶えず世界そのものを新しい手にするのではないかと。そして、そのとき、美は必要ないのではないかとということである。いや、むしろ、美は邪魔なのだ。美は邪魔をするのだ。美は、世界をまるごと新しい目で見ること、世界をまるごと新しい手で触れること、世界がまるごと新しい目となること、世界がまるごと新しい手になること、そういったことの邪魔にしかならないように思う。世界をまるごと新しい目で眺める者は、意味のない、美しくもない、ただただくだらない、この世界を丸ごと新しい目で見て、新しい手で触れて、世界をまるごと新しい目にするのだと思う、世界をまるごと新しい手にするのだと思う。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の収録作品・第3作目の「青空」を読んで、きょうは、そんなことを思ったのであった。意味もなく、美しくもなく、くだらない詩を書こうとする詩人というのは、なんというバロックな存在なのだろう。ただただ世界をまるごと新しい目にするだけの、ただただ世界をまるごと新しい手にするだけのつまらない存在なのである。「なにゆえのあらたな試みか。」というリルケの『いつ、いつ、いつの日……』（高安国世訳）という詩のなかにある言葉が思い出された。キングオブコメディのコントにあるような破壊的な癒しの力を持った詩がどんどん出てきて、世界を丸ごと新しい目にしてくれること、世界を丸ごと新しい手にしてくれることを願うわ。そうだ、美がなぜ、世界が新しい目を持つことの邪魔をするのか、世界が新しい手を持つことの邪魔をするのか、ほくと野村 龍さんのコメントのやりとりなどから理解できていない人がいるかもしれない。美学なんてほくは知らないけど、疑問に持つ人がいたらコメントくださいね。ほくは、金子鉄夫さんの詩を3作品鑑賞して、そこで、金子鉄夫さんの詩には、キングオブコメディのコントのような破壊的な癒しの力があると書いたのだけれど、この「破壊的な」というのは、これまた、さきに書いた「美の定義の「再定義」、つまり、言葉の意味の「更新」のことと置いていただければよい。世界はそうしてつねに新しい目を持ち、新しい手を持つのだと思う。新しい目となり、新しい手となるのだと思う。つぎつぎと「再定義」され直して、「更新」しつづけていくのだと思う。そうやって世界は、おびただしい数の人間の肌を脱いで、つぎつぎと新しい人間の肌を露出させていくのだ

と思う。そう考えると、世界というものは、どこまで貪欲なのかと思う。いったいどれだけの数の人間の経験を脱ぎ棄てていくものなのだろうかと考えると、「世界」という言葉を「言葉」に置き換えてもよい。

**2012年06月01日(金)**

エマソンが『アメリカの学者』のなかに、こう書いている。「誰の言葉にいのちがみなぎり、誰の言葉がそうではないかが、わたしたちにはすぐに分かります。」(酒本雅之訳)と。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている、おされなタイトルの「蕩児マナー」を引用しよう。この作品は、詩集に収録されている一番目の「うみなんかいくな」と同様に、絶妙なバランスでもって構成されており、一語でも欠けるとたちまち魅力を減じてしまうので全行引用する。それは、言葉同士が緊密に結びついているからというふつうの意味からではない。言葉の結びつきのなさの絶妙なバランスを崩す恐れがあるからなのである。

ひと喰うゆうぐれ

肺から捲り捲られ

ゆであがった「倫」

ひきはがしておれ、プルプル

さぁブラザー刺激的な液  
ながされてしまうほどに掻き糞って  
爆ぜてもかまわない  
ぬかるんだチャップリンの河川に沿って  
もういちど首吊ってもいい  
脱がして脱がされての街道  
廃物のパレード  
爪しか浮かばない生業なんて語って  
七色の遺体  
もういちどだけ殺してやってもいい  
その伸縮自在のペロ  
なんのために泳いでんの  
残念だな、時代は白ブタ的  
うでふるな、泥縄まいてパンク  
こびりついただけのナマな筋肉の印象  
あらゆる孔をなぶって  
多様な球根をふくんで  
化けの皮を分でプリズム兇状  
どこまで転移する、ガジェットくん  
そして始まる擬態の解体

何も示さない標識は歯、歯を落として  
肉感な表紙に擦りつけ飽きてる  
おれ飽きてる  
ケモノの股下のカルチャー  
指でもみしだくくらいできえるゼピーポー  
わっ、わめくな  
真っ白すぎる包帯を燃やして  
にぎやかなスモークへ  
わっ、わっ、わめくな  
背骨のアスファルトでハイな腫瘍のダンス  
迸る血イは甘い  
甘いほうがわかりやすくていいだろう  
あたまからグズグズ寒天  
いまになって遁走が恥ずかしいわけもなく  
プルプルするのさブラザー  
プルプル、さあ、さあ、

このすばらしいくだらなさ、くだらなさのすばらしさに溜息が出るね。ほくだって、カラフルな寒天になって、きれいな寒天のとなりでプルプルしてみたい。プルプルしていたい。この作品の言葉の結びつきのなさがこちよ。この作品に使われているすべての言葉が、金子鉄夫さんの魂に流れ込んでいて、こういったフォルムに形成されたのだからうけれど、フォルムから言葉が踊り出てきそうな勢いがある。これは、独自の宇宙である。もちろん、人間ひとりひとりが独自の宇宙をもっているのだけれど、詩人の書く詩が独自のものになり得てい

る例はきわめて少ない。多くの詩宇宙が似通った類型的なものになっている。おそらく、詩人ひとりひとは、きわめて個性的な生を送っておられるであろうに、である。この詩篇に現われた言葉はどれも、この詩篇に使われるまえに持っていた意味とは違った意味を持つものとなっている。言葉を集め、その言葉に、束にした爆竹を仕掛けて、パーン！ って爆発させたみたいなのがする。そのはじけた言葉を空中に停止させ、それをフィルムに定着させたものを見せられているような気がする。

**2012年06月02日(土)**

ロジャー・セラズニイのSF作品に、『わが名はレジオン』というのがあって、ぼくの好きなSF小説の1冊なのだけれど、その第三部に、つぎのような言葉がある。「気に入りませんな、人間は実際造ることができないんです。すでにあるものを並べ替えるだけでしてね。神のみが創造できるんですよ」(中俣真知子訳)。現代科学においても、なされているのは、無からの創造ではなくて、組み合わせと並べ替えだけである。言葉と同じである。思考と同じである。新しい物質が日々おびただしく合成されているように、詩や小説や日記や報告文も日々おびただしくつくられている。どれに価値があって、どれに価値がないかは、受け取るほうの事情や状況による。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されていた、第4番目の作品、「蕩児マナー」を読んでいて、ロジャー・セラズニイのこの言葉と、ウィリアム・バロウズの「[ことば]を爆発させ」(『ソフトマシーン』山形浩生・柳下毅一郎訳)といった言葉が思い出されたのだ。きのう書いたように、金子鉄夫さんは、言葉を集め、その集めた言葉の下に大量の爆竹を仕掛けて火をつけたのである。その爆発で飛び散った言葉を、金子鉄夫さんは、空中で停止させ、その言葉がばらばらになって配置されている空間を作品として提出されているのだと思ったのである。しかし、

その爆発で飛び散った言葉をただ空中に停止させただけでは、作品にはならない。おそらく、大量の爆竹を仕掛けたときに呪文もかけていたのであろう。自我というロゴスを、すなわち、フォルム構成力を、詩篇の一語一語に吹き込んでおられたのであろう。ほくもまた、そういう方法で詩をつくっていた時期があったのだった。そういう方法で、世界に新しい目をもたらせ、世界に新しい手をもたらせていたことがあったのだった。仕掛けられた爆竹の量が、ほくの方がずっと少なかったという気がするのであるが。

詩人の河野聡子さんが、「詩客」というサイトの「私の好きな詩人」というコーナーの第31回目に、つぎのように書いてくださったことも思い出されたのであった。「私が「好きな詩人」は田中宏輔なんだけど、彼の手にかかると、いや彼の宇宙の中でといたいくらいだけど、この世のあらゆる出来事と、それにともなっている言葉がみんな一回ばらばらになって、美しく組み上げられる、そんなふうと思う、飲み屋の会話とか、学校の先生の話とか、元カレのこととか、過去にあった出来事、文学、辞書から無作為に拾ってきた言葉、なんでもところかまわず、節操ないくらいに見えるけど、でも本当はものすごい節制のもとにつくられている、だって宇宙って、そういうものでしょう。」([http://shiika.sakura.ne.jp/beloved\\_poet/2011-12-16-4542.html](http://shiika.sakura.ne.jp/beloved_poet/2011-12-16-4542.html))と書いてくださっていて、このお言葉が重ねて思い起こされて、集めた言葉を束にした爆竹で吹き飛ばして、空中に停止させたものを作品として、金子鉄夫さんが詩を書いてられるって、ほくは思ったのだと思う。「一切のものが息づき感謝している。」(リルケ『かつて人間がけさほど……』高安国世訳)、「すべての存在は正(ただ)しくその処(ところ)を得る。」(リルケ『おお、大地よ、めぐめ……』高安国世訳)。「人間の言葉を自由に／駆使した天才は幾たりも出たというのに、なにゆえのあらたな試みか」(リルケ『いつ、いつ、いつの日……』高安国世訳)。それは、ただただ、「「ことば」を爆発させ」(ウィリアム・バロウズ『ソフトマシーン』山形浩生・柳下毅一郎訳)世界に新しい目をもたらせるためなのである。世界に新しい手をもたらせるためなのである。「そう、それなのだ。試しつつける。何度も何度も、いくど自分に直面しようとも、またふたたび試されねばならない。」(ゲイリー・ライト『氷の鏡』安田均訳)。「新しい」というのは、「繰り返し壊し、繰り返し作り直す」という意味である。「再定義」と「更新」と言ってもよい。そして、それには、「準備がたいせつなのよ、みんな。なにごととも準備がたいせつ」(ジョン・ヴァーレイ『スチール・ビーチ』下・第三部・17、浅倉久志訳)。もちろん、さいしょに、「まず生きてみなくてはいけない。」(ホセ・ドノーソ『閉じられたドア』染田恵美子訳)。

そうだ。まず、生きなければならない。詩人の役目は、まず「生きること」なのだ。「すべてのものは、ただ一（、）度きりなのだ。一（、）度きり、そしてふたたびはない、そして私たちもまた一（、）度きり。ふたたびはない。」（リルケ『ドゥイノの悲歌』第九の悲歌、高安国世訳）ふたたびはけっしてないのだ。あらゆる体験と言葉を並べ替え、入れ替え、組み立て直してみる。縦横無尽に、自由に切り離し、結合させることによって、試すのだ。試すのだ。試すのだ。「眼よ、くまなく視線を走らせよ、そしてよく見るのだ。」（フエンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳）「他のみんなが、何をし、何をしないか、それをよく見るのだ」（ウィリアム・パロウズ『ノヴァ急報』緑の大地から、諏訪優訳）。「世界の秘密とは、ひととできごとを結ぶ絆（きずな）だ。ひとができごとを、できごとがひとを作る。」（エマソン『運命』酒本雅之訳）その絆をよく見るのだ。ひととひととのあいだの結びつき、ひとと出来事とのあいだの結びつき、出来事と出来事とのあいだの結びつきを、よく観察することからはじめるのだ。そして、そのうえで、その絆を切り離し、ひとからひとを切り離し、ひとから出来事を切り離し、出来事から出来事を切り離し、言葉から言葉を切り離し、意味から意味を切り離し、音声から音声を切り離し、違った絆をつくるのだ。違った結びつき方をさせるのだ。それが創作であり、芸術作品の創造である。観察の目を光らせていると、「あらゆるものがわれわれに向かって流れ込んでくるように見える」（ノヴァーリス『断章と研究 一七九八年』今泉文子訳）であろう。すると、「この世界が、実は自分自身なのだ」（ウィリアム・パロウズ『ノヴァ急報』緑の大地から、諏訪優訳）ということに気がつくだろう。自分自身に新たな目をもたらせること、自分自身に新たな手をもたらせること、それが世界に新しい目をもたらせることであって、世界に新たな手をもたらせることであり、唯一、ただ一つ、新しい詩をつくる方法なのである。言葉を集めて、弾き飛ばせ。爆進せよ。繰り返す宇宙を壊し、繰り返す宇宙をつくれ。金子鉄夫さんの「ちちこわし」に収録されている第4番目の作品、「蕩児マナー」を読んで、こんなことを思ったのである。「すべて詩のなかには本質的な矛盾が存在する。詩とは、砕かれてめらめらと炎をあげる多様性である。」（アントナン・アルトー『ヘリオガバルス』Ⅲ、多田智満子訳）、「自己矛盾におちいったとして、だからどうだというのだ。」（エマソン『自己信頼』酒本雅之訳）、「そこにおいては事物や様相が目覚め、蜂起し、しかる後、一応は崩壊しながら融合、統一を遂げる。」（アントナン・アルトー『ヘリオガバルス』Ⅲ、多田智満子訳）「それは矛盾しているためにかえって真実そのものに違いなかった。」（コルターサル『石蹴り遊び』向う側から・9、土岐恒二訳）矛盾することも、間違っていることも、詩のなかでは、真実であり、正しいことなのだ。詩人はなにごととも怖れることなく、言葉を集め、

それに大量の爆竹を仕掛け、思い思いの方向に弾き飛ばして、空中に停止させればよいのだ。いかに自由に弾き飛ばすか、いかにその瞬間をつかまえ空中に停止させるか、それが世界に新しい目をもたらせる、世界に新しい手をもたらせる方法なのである。詩人は、自分の作品によって、幸福にも不幸にもなる。最高の果報者であり、最低の蕩児である。ここで急に、ぼくの言葉は詠嘆調になるぞよ。おお、作品よ、この不幸なる幸福よ、この幸福なる不幸よ。死ね。そして甦るのだ。死んだ者だけが甦ることができるのだ。

**2012年06月03日(日)**

自分が関心のある人に対しては、ひとは話しかけたいと思うものであろうし、また話しかけられたいとも思うものであろう。それは、自分がそのひとのことを知りたいからであらうし、また自分のことをそのひとに知ってもらいたいからであらう。いずれにしても、言葉を交わしたいというのが人情だ。言葉が交わされる。言葉が交わされたい。そうだ。もしかしたら、言葉が人間を交わしているのかもしれない。言葉と言葉が、人間を介して、言葉同士、話を交わしているのだ。そうして、会話というものが、言葉を人間にしているのだろう。沈黙、休止、余白といったものもまた人間となる。でなければ、言葉が、沈黙が、休止が、余白が考えることなどできないであらう。ひとつの言葉が無数の意味をもつ理由は、その言葉が無数の人間になるからである。無数の人間の絆のなかに混じって、無数の文脈を構成するからである。沈黙、休止、余白も同様に、それぞれ違った意味をもっている。きのうのぼくの沈黙は、きょうのぼくの沈黙とは違うものだ。詩篇に書かれた言葉と同じように、詩篇にある余白も、置かれた場所ごとに違った意味を持っている。すべての余白が違った意味を持っている。真実

は、ひとりひとりに違った姿で現れる。だとしたら、詩人は自分に起こった真実を、どう詩に書きつけたらいいのだろう。どのようにして、他者の真実に触れる言葉にすることができるのだろう。物質も、虚無も、言葉も、人間になって考えるしかないだろう。人間が考えるために、あらゆるものが人間になるのだ。人間に考えさせるために、あらゆるものが人間となるのだ。われわれは、思考対象が存在するので、たとえそれが実体を伴わない実在しないものであっても、その概念があるために思考できるのである。もちろん、その対象とするものの意味概念が、われわれの思考に限界を設ける。しかし、われわれはその限界があるからこそ思考できるのである。詩人は言葉に語らせるほかに語るすべを持たない。金子鉄夫さんという詩人によって集められた言葉たちが、金子鉄夫さんというひとりの人間になって、言葉自体の真実を語っている。その言葉自身、自分にあるとは思わなかった意味を帯びて語っている。文体、リズム、休止、余白もまた、金子鉄夫さんというひとりの人間になって、それぞれの真実を語っている。金子鉄夫さんというひとりの人間の真実となろうとして、言葉が、余白が、沈黙が集まったのだろう。きのう、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている第5作目の「吐きそうさ、ニシオギクボ」を読んでいて、そんなことを考えたのであった。この詩篇の後半部分を引用しよう。前半部分とそう変わらない雰囲気を持っていて、そのところがまた、この詩篇の意味のなさのあらわれでもあると思うのだけれど、肉体的な感覚をともなった言葉が前半部分よりも肉迫していて、おもしろいと思ったからである。この詩もまた十分に意味がなく、美しくもなく、くだらない、とてもおもしろい詩篇である。

びよーん、びよーん笑って笑って

増殖する

(企み) をもったマリーたち

吐きそうさ、ニシオギクボ

足首から飲み込まれるスパイラル

誰かが誰かを殴る音がひびく

(たいしたことじゃないさ)  
誰かが誰かを呪う声がひびく  
(いつものことさ)  
酔いもさめて  
口腔にひろがる臭い哺乳類の後味  
びよーん、びよーん笑いながら  
金属バットを振り回して  
増殖している  
(企み) をもったマリーたち  
おれの皮のしたで  
トロピカルな浜辺なんてことをおもう  
このイキでいない暗夜のなかで  
いっぴきのモノノケが横切った  
ついていってしまおうか  
じゃあねとでも言おうか  
うるせえ、うるせえよ  
そのまま死んでしまえよ  
なにもかもなにもかも

おとついで、塾で、生徒のひとりがオーストラリアに行ったときのことを話してくれて、そのときの話が、けさ読んだ自分のルーズリーフの言葉に呼応しているなあと思ったのである。けさ、こんな言葉を読んでいたのであった。「ひので貝は美しくて、壊れやすく、はかない。しかし、だからこそ、それは幻影ではない。いつまでも在るものではないからといって、一足飛びに、それが幻影であるなどと思ってはならない。姿かたちが変わらないからといって、それが本物かどうかの証拠になるわけではないのだ。」(アン・モロウ・リンドバーグ『海からの贈りもの』ひので貝、落合恵子訳)、あ、これと違うところだった。引用し直す。生徒がオーストラリアでコアアラを抱いたことがあると言ったので、「かわいかった？」と訊くと、「いや、近くで見たら気持ち悪かった。それに臭くて、重かった。」「臭かった？」「野生の動物って感じの臭さがした。」と言っていたのだけれど、この言葉が印象的だった。「だんだんわたしは選ぶことを覚え、完全なものだけをそばに置いておくようになった。珍しい貝でなくてもいいのだが、形が完全に保存されているものを残し、それを海の島に似せて、少しずつ距離をとって丸く並べた。なぜなら、周りに空間があつてこそ、美しさは生きるのだから。出来事や対象物、人間もまた、少し距離をとってみてはじめて意味を持つものであり、美しくあるのだから。／一本の木は空を背景にして、はじめて意味を持つ。音楽も同じだ。ひとつの音は前後の静寂によって生かされる。」(アン・モロウ・リンドバーグ『海からの贈りもの』ほんの少しの貝、落合恵子訳)。金子鉄夫さんの詩の言葉が、ぼくにとって楽しいものであるのは、言葉たちがそれぞれ、十分な距離をもって置かれているからでもあると思う。詩句の反復としてだけでなく、言葉と言葉の結びつきについて言っているのだけれど。ちょっと、ぼくも混乱してきた。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」がおもしろくて、この詩集評を書いているのか、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の感想を書くのがおもしろくて、詩集評を書いているのか。「しかし、詩人というものは、みんなきちがいではないですか？」(ジャック・ヴァンス『愛の宮殿』8、浅倉久志訳)、「ある一つの音で——遠くの笑い声、小さな波紋、一陣の風で——彼は気分が悪くなり、失神します。なぜなら、時の果てまでかかっても、その音、その波紋、その風がふたたびくりかえされることがないからです。これこそだれもがたどらねばならん旅、耳をろうする悲劇なのです！しかし、きちがい詩人がそれを別なものにしたいと願うでしょうか？一度も歓喜のないものに？一度も落胆のないものに？一度もむきだしの神経で人生をつかみえないものに？」(ジャック・ヴァンス『愛の宮殿』8、浅倉久志訳)、「ねえ、きみ、きみは知らねばならないよ、その瞬間に発せられた言葉だけが、あらゆるもののうちでもっとも平凡なその瞬間を光で照らし、その瞬間を忘れがたいも

のしてくれるんだってことを。」(ミラン・クンテラ『ハヴェル先生の二十年後』12、沼野充義訳)。きのうは、よく観察することを強調していたのだが、観察しているだけでは、「生きている」ことにはならないと思う。自分も参加し、発言し、行動しなければ、生きていることにはならないと思う。ぼくは自分がとても臆病であることを自覚している。ぼくの人生は、もしも、もしもでいっぱい。百億の嘘と、千億のもしもから、ぼくの人生はできている。それでも言うのだ。「まず生きること」と。人間と物と出来事と交わって生きるのだ。すると、人間と物と出来事が世界を語ってくれるだろう。世界の在り方をつまびらかに語ってくれるだろう。エリオットばりに、こう呼びかけてみようか、さあ、出かけよう、きみとぼくと、「夜が永遠に等しく、朝は思い出でしかないところに、いっしょに行こう」(サミュエル・R・ディレイニー『ノヴァ』2、伊藤典夫訳) と。

**2012年06月04日(月)**

西院のパン屋さんに行く途中、女性の二人組がべちゃくちゃしゃべりながら、ぼくの前から近づいてきた。ぼくは、人の顔があまり記憶できない性質なので、もう覚えていないのだけれど、というのも、ちらりと見ただけで、もうケッコウという感じだったからなんだけれど、ほくに近い方、道の真ん中を歩いていた方の女性が、ぼくの出っ張ったお腹を見ながら、「やせなあかんわ。」と言いつたのだった。オドリヤ、と思ったのだけれど、まあ、ええわ。人間は他人を見て、自分のことを振り返るんやからと思って、チェツと思いつながらも、そのままやりすごしたのだけれど、ほんと、人間というものは、他人を見て、自分のことを思い出してしまうんやなあ、つくづく思った。パン屋さんに入って、B L Tサンドのランチ・セットを頼んでテーブルにつき、ルーズリーフを拡げると、ノヴァーリスのつぎの言葉が目飛び込ん

できた。「人生で起こる偶然はみな、われわれが自分の欲するものを作り出すための材料となる。精神の豊かな人は、人生から多くのものを作り出す。まったく精神的な人にとっては、どんな知遇、どんな出来事も、無限級数の第一項となり、終わりなき小説の発端となるだろう。」（『花粉』66、今泉文子訳）。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」との出遭いも不意打ちであり、いきなりの偶然であったのだが、「偶然は本質と同じように貴重なのだ」（コルターサル『石蹴り遊び』その他もろもろの側から・133、土岐恒二訳）、「偶然だって？」（ガデンヌ『スヘヴェニンゲンの浜辺』20、菅野昭正訳）「偶然とはなんだと思う？」（グレアム・チャーノック『フルウッド網（ウエツブ）』美濃 透訳）「人間もまた偶然の存在だ。」（ダン・シモンズ『真夜中のアントロピー・ベッド』嶋田洋一訳）「偶然こそ、私たちの生の偉大な創造者というべき神である。」（プリニウス『博物誌』第二十七巻・第二章、澁澤龍彦訳）。ここで、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第6番目に収録されている「アダルト通信」を引用しよう。この詩篇は、前半部分を引用しよう。キー・タームまで。

あまたの隠語で滑（ヌメ）る街道  
蛸走りの行方に捻じ曲げられたビューティフルは  
そんな感じでいいよ、そんな感じで、砂山さん  
この際だからおれたちは気持ちいい有刺鉄線になりましょう  
（その密林を脱げって、脱げよ）  
そしてブチまけられた三・一七秒、三・一七秒たって  
蒸発するおれたちの公衆便所ごっこ  
今春も毛  
痛い毛がジワジワと聞こえて綻ぶまでの距離  
廃材がサクラのように咲いて

反吐が出ますね、砂山さん  
いつまでも膝をねぶって卑猥なトークを  
最近、殴打する夢ばかり見てしまうのは  
海老反りの姿勢でズレてゆく人たちと  
酒を酌み交わすからだって紛らわしいスクリーンで  
「絆」なんて字面で踊る本年度のキノコども  
もう非常口を吐く顔はちがっている  
ちがってますよ、砂山さん  
潔癖な配線を齧って脳タリン  
(どんな白紙にシヨウベンたらしてんの)  
呪って祝って祈って呪って  
足元からせりあがってくるドロドロのアダルト

見事に意味がない。見事に美しくない。見事にくだらない。こんなに意味のない、美しくない、くだらない詩をいくつも書いてしまうのは、ほんとうに才能があるからである。ほとんどの詩人は詩に意味を持たせてしまう。たいていの詩人は詩に美しさを持たせてしまう。多くの詩人が、自分の詩をくだらないものにならないようにしようとする。それらが、詩を遅れたものにするに気がつかないで。新しい詩は、おそらく、意味がなく、美しくもなく、ただただくだらないものであるのだろう。キングオブコメディのコントのように、それは破壊的な癒しの力を持つものなのであろう。金子鉄夫さんのこの「アダルト通信」を読んでニヤリとさせられてしまうのは、ほくにもその書かれた詩句が、ほくが感じているこの世界の様相というものを、この世界の表面の下に隠された猥雑な姿をちらりと見せてくれるからだろう。く

だらなさが持つ力だ。美しいものにはない力である。この詩篇を読むまえには見えなかったものを見させてくれる力である。ここさいきん、ほくは、自分が書いている作品の意味が、自分にもよくわからなかったのであるが、金子鉄夫さんの詩を読んでいて、少しずつわかってきたような気がしたのであった。ほくは、金子鉄夫さんの詩のなかに、ほくの詩の持つくだらなさを見ているのだった。意味のないもののすばらしさを見ているのだった。美しくないもののすばらしさを見ているのだった。ほくたちの生の意味のなさのすばらしさを見ているのだった。ほくたちの意味のない美しくもない生のすばらしさを見ているのだった。ほくたちのくだらない生のすばらしさを見ているのだった。ほくたちは瞬間であり、瞬間の生のなかでのみ生きているのだけれど、芸術家は、その瞬間をつかまえて、永遠の瞬間にするのだった。たとえそれが真実ではなくっても、真実のように思えるような瞬間をつかまえるのだった。しかし、真実でないものは、すべて虚偽なのだろうか？ 何かを考える。何かがあるから考えられる。考えたものが何かになる。ほくは過去においても愚かだったし、いまでも十分に愚かである。見事に浅ましく見苦しい人生を送って来たし、いまでも見事に浅ましく見苦しい人生を送っている。しかし、一瞬ではあったろうが、ひとにやさしく接したことがあるのだった。ほくのためにではなく。そんな一瞬でもない人生ならば、たとえ物質的には恵まれていようと、とことんまでみじめな、無意味な人生であつただろう。文学が少しでもましな人間にしてくれているような気がする。すぐれた詩が、すばらしい小説が、鋭い哲学が、愚かで軽薄なほくを、少しでも注意深い人間にしてくれているような気がする。

しかし、これはいったい、だれの息なのだろうか。いまほくがしている息が、どこか、ほくの息ではないような気がする。ほくの息ではないところがあるような気がする。金子鉄夫さんの詩「アダルト通信」を読んで、つらつらと考えていると、いろいろなことが考えられる。「人生は驚きの連続だ。」(エマソン『円』酒本雅之訳)「愛とは驚愕のことではないか。」(ジョン・ダン『綴り換え』湯浅信之訳)「なんでこんなものを作ったんだろう？」(アイザック・アシモフ『AL76号失踪す』小尾芙佐訳)「創造者であるとともに被創造物でもある。」(ブライアン・オールティス『讚美歌百番』浅倉久志訳)「コーヒーのお代りは？」(ロジャー・セラズニイ『ドリームマスター』1、浅倉久志訳)。

2012年06月05日(火)

金子鉄夫さんの「ヒャクニン」という、詩集「ちちこわし」の第7番目に収録されている詩を読み終わったときに、ふと、こんなことを思った。「それにしても、金子鉄夫さんがこれらの言葉を獲得したのだろうか。それとも、この言葉たちが金子鉄夫さんを獲得したのだろうか。」とおそらく、金子鉄夫さんがこれらの言葉を見出した瞬間に、この言葉たちもまた、金子鉄夫さんという詩人を見出したのであろう。よい詩は、よい目をこしらえる。よい詩は、よい耳をこしらえる。そうして、よい詩は、よい口をこしらえる。ことし詩を一篇も書いていないほかに、こんなに饒舌に、詩について語らせるのだから。ことしほくが出ず詩集の帯文をつぎのように変更したいと、昼に考えた。「この詩集（『The Wasteless Land.VII』）の原稿を書肆山田に送ってしばらくしたあと、金子鉄夫さんというお名前の詩人から、彼の詩集「ちちこわし」を送っていただいた。読んだあと、ほくは自分が詩集を出すことが恥ずかしくなった。ほくの作品が完全に古びて見えたのだった。」と。もし、書肆山田の大泉さんがOKされたなら、こういった帯文にしたいと、夜になつたいまも思っている。こんな敗北宣言のような帯文など、いままでなかったであろうから。さて、これまでほくは、美の欠点についてばかり、そして、くだらなさの長点についてばかり、かなり強調し過ぎたきらいのある感想文を書きつづってきたと思うのだけれど、ここで、美についても長点があり、くだらなさについても欠点があるとも思われるので、そのことについても述べておく。美は過去のものだと、ほくは書いた。そして、くだらなさは、現在と未来のものだと、ほくは書いた。ただし、過去は美であるとは、ほくは書かなかつたし、現在と未来がくだらないとも、ほくは書かなかつた。さてさて、美は過去のものに属するがゆえに、振り返って見られることができる。過去のものであるがゆえに、美の鷹揚なやさしさに慰撫されようとして、たくさんの目が振り返り、たくさんの視線が美しい詩篇のうえに降り注がれる。一方、くだらなさは、現在ただいまのもの、あるいは、やがてやってくる未来、しかもかなり近いものに限った未来のものに属するものであるがゆえに、ほくたちは、そのくだらないものが、目のまえを通り過ぎていくのを、まばたきしながら見つめるほかないのである。振り返って見られるためには、現在や未来が過去になる必要がある。そのくだらなさが、そのくだらなさのすばらしさが承認され、美として認知され、過去のものとならなければならないのである。

金子鉄夫さんの詩は、新しい詩だ。しかし、いつだって、詩は新しいものではなかったのか。いつの間に、詩は美しいものだという誤った見解がまかり通るようになったのだろうか。金子鉄夫さんの、この意味のない、美しくもない、くだらない詩篇の持つ破壊的な癒しの力に、ぼくは目を瞠った。ぼくが目を瞠ることができたのは、ぼくの詩にも、金子鉄夫さんの詩が持つ新しさが少しはあったからであろう。ぼくの詩にも、意味のない、美しくもない、くだらない詩が持つ破壊的な癒しの力が、ちょっとでもあったからであろう。でなければ、ぼくのように自分自身の作品にしかほとんど共感できないような書き手が自分が書いた作品でもない詩篇に、ここまで共感することはできなかったであろうからである。ぼくのなかにも、少しでも、いま現在の、そして少しく未来の詩のきらめきが、ぼく自身の書く詩にもあると思われたためであろう。そのために生じた大いなる共感であり、讚美の気持ちがここに満ち溢れたのであろう。しかし、もっとも新しい新しさは、もっともやく古びる新しさでもある。過去のものとなる宿命からは、なにもものも逃れることはできない。美の定義は、つねに再定義され、更新されつづけなければならない。ああ、それにしても、新しい詩というのは、まるで、「ぶつかることのできる場所のようだ。」(リルケ『黒猫』高安国世訳)。おなじみであるはずの言葉が、意味が、思いがけない組み合わせで並べられ、書き連ねられているのを目のあたりにして、ここは当然のごとく、言葉とぶつかり、意味とぶつかり、言葉と、意味と格闘しなければならない。言葉とぶつかり、意味とぶつかって、その言葉と向かい合い、その意味と向かい合ううちに、ひょいと角度を変えて眺めてやることができれば、その言葉が、その意味が、それまで見せてくれたこともない表情を見せてくれた人間の顔のように、まったく異なった面を持っていたことに気づかせてくれることがあるのである。「ぶつかることのできる場所」というのは、そういうふうに視点を変えて眺めてやることのできる機会を持たせてくれる場所であり、そこが、世界に新しい目をもたらせてくれる場所であり、世界に新しい手をもたらせてくれる場所であるのだろう。ここで、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第7番目に収録されている詩篇「ヒャクニン」を全行引用しよう。

若いままのヒャクニンがヒャクニン

同じ戯言をほざいて

アスファルトに塗れていくのを  
マジマジと見ていたミー  
いちまい捲ってはノド締められる秋空  
今日も、この街道の膚が痒い痒いって  
「なにがどうした、どうもしないさ」  
桃色の暴走は止んで  
(ひとり残らずズタズタになって)  
初っ端から喋る相手を間違えて  
甘いままくさってころがって  
ミーのものがたりのクズ  
(いろいろなかたちのうんこはいろいろにわめいて)  
また声高に笑えばくずれてゆき  
若いままのヒャクニンに出会っていく  
おまえの恥部に放火する月曜日  
ねばねばの罪状を  
隠せる裸体なんてどこにもなくて  
ムダ骨の数式が背後でひるがえって  
腫れあがっているタカダノババ  
ミー、ミーは  
へたりこんでは舐めている

行方のない脳みそプルンプルン

「潰してみろよ」

「潰してみればわかるだろう」

(嫌な感じだぜ)

すれちがうヒャクニンじゃない

その他大勢は皆、胸元に突き刺して

それぞれにそれぞれの愛おしいクビを蹴散らして

反対の方向へ急ぐ

それを眺めていたミー

キュウジュウキュウまでの口に布を突っ込んで

最後のーに託すものがたりのクズ

ミーはミーのまま

まだまだ終わらないんだって

(うるせえな、ひかり)

(黙れよっ、のぞみ)

ほんとに意味のない、美しくもない、くだらない、すばらしい詩篇である。形式に束縛のある俳句や短歌ならば、技術を競うことは容易である。形式に束縛のない自由詩の場合、俳句や短歌とは違った面で競うことになる。形式をつくること、そのこと自体において競うのである。「形式」を「文体」としてもよい。ところで、だれかほかのひとによって書かれた言葉でも、ほく自身が書いた言葉でもよいのだが、その言葉

を読むことによって、ぼくが自分のこのころの在り様を知ることがあるのであるが、これを、言葉がぼくのこのころの在り様を知る、と言い換えてもよいであろう。あるいは、言葉が言葉自体の意味をより深く知ることになる、と言い換えてもよいであろう。新しい形式と文体、新しい言葉と言葉の組み合わせと並べ方が、この世界に新しい目をもたらせ、新しい手をもたらせてきたのである。世界を新しい目にしてきたのである。世界を新しい手にしてきたのである。これによって、美の定義が再定義され、美の意味が更新されてきたのである。しかし、「すべての過程を通して変化しないでいたもの」（グレッグ・イーガン『ディアスポラ』第八部・20、山岸 真訳）がある。金子鉄夫さんが、言葉と言葉を結びつける際に、言葉に付与した自我というのか、ロゴス（構成力）というのか、そういったものが、詩句のすみずみにまで沁み入っているような気がするのである。書くということは、自分を読むことに等しいが、読むということもまた、自分を書くことに等しい。ぼくたちが言葉を見出すのではないだろう。言葉の方が、ぼくたちのことを見出すのであろう。よく知っているはずの言葉が、金子鉄夫さんによって詩に書きつけられると、じつはよく知らなかったものであることに気づかされたのである。これは、その言葉が、金子鉄夫さんを見出したのであり、またその詩を読むぼくをも見出したのである。なんということだろう。なんという言葉のすごさだろう。これまで言葉はいったいどれぐらいの数の人間の体験や思考を消尽してきたのであろう。その意味をさらに自ら知るために。きっと夥しい数の人間の経験や思考を消尽してきたのだろう。一つの単語に何百億人も人間が関わってきたのだろう。一つの成句に何十億人も人間が関わってきたのだろう。一つの歌に何億人も人間が関わってきたのだろう。一つの詩に何千万人も人間が関わってきたのだろう。一つの単語が何百億人も人間をつくってきたのだろう。一つの成句が何十億人も人間をつくってきたのだろう。一つの歌が何億人も人間をつくってきたのだろう。一つの詩が何千万人も人間をつくってきたのだろう。みずからの傷口に溺れることなく、これからもぼくは、言葉によって見出されたい。

2012年06月06日(水)

芸術家にとっては、顧みられないことが苦痛であり、しばしばこの世が地獄のようにまで感じられるくらいである。しかし、ほんとうの苦悩は、その芸術家の作品が多くの人に認められるようになったときにはじまると言ってもよい。金子鉄夫さんの最初の苦悩は、彼の詩集「ちちこわし」によってはじめられるであろう。「存在の大鍋の中の一瞬のきらめき。」(フィリップ・ホセ・ファーマー『紫年金の遊蕩者たち』大和田 始訳)「創造の鍋の中から生き残るのはほんのひと握りなんだよ。」(アン・マキャフリイ『竜の夜明け』上・第一部・6、浅羽 莢子訳)「つねに先がある。その先にもさらに先がある。」(M・ジョン・ハリスン『ライト』27、小野田和子訳)「何度でも生まれ直すんだ。」(ロバート・シルヴァーバーグ『いまひとたびの生』1、佐藤高子訳)「新しい感覚には新しい言葉が必要だ。」(ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』29、窪田般弥訳)「絶えず作り直されねばならない。」(ウィリアム・バロウズ『夢の書 わが教育』山形浩生訳)「旅とは旅のことです。」(ゲルハルト・ケップフ『ふくろうの眼』第二十二章、園田みどり訳)「詩はもっぱらペンによる所産、一連のイメージと音との集まりではなく、ひとつの生き方(,,,,,)である。」(トリスタン・ツアラ『詩の堰』シュルレアリスムと戦後、宮原庸太郎訳)「作品と同時に自分を生みだす。というか、自分を生みだすために作品を書くんだ」(オースン・スコット・カード『エンダーの子どもたち』上・4、田中一江訳)「新しいものはいい」(ジェローム・ビクスピー『日々是好日』矢野浩三郎訳)「毒というのは説得力があるな」(イタロ・カルヴィーノ『柔らかい月』第三部・ティ・ゼロ、脇 功訳)。ぼくの持っているルーズリーフにある言葉をいくつか拾ってみた。あと、3つほど引用しておきたい。「自分自身の感情以上にリアルなものは存在しない。」(フリッツ・ライバー『ジェフを探して』深町真理子訳)「唯一大事なのは、自分の真実の知覚だ。」(ウィリアム・バロウズ『夢の書 わが教育』山形浩生訳)「生きること、世界のいたるところに自分の苦しむ自我を運びまわること。」(ミラン・クンデラ『不滅』第五部・六、菅野昭正訳)。と、こうぼくは、金子鉄夫さんの詩集を思っただけで抜き書きした。もちろん、自分自身にも向けて、これらの言葉を引用したのだ。

2012年06月07日(木)

いまから部屋を出て、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている「死にそこないのクズ」を読む。西院のパン屋さんでB L Tサンドのランチ・セットを食べたあと、そこで優雅に窓際に坐って、クリーム色の布地のカーテンから漏れ出る陽の光を浴びながら。ハーフパンツ姿の短髪ヒゲのゲイのいる風景。B L Tサンドのセット(680円)を食べたあと、パンを4個注文して(これまた、680円くらいだったかな)金子鉄夫さんの詩集を読みながらいろいろ考えを巡らせていたら、3時間ほど過ぎていた。残った2個のパンを持ち帰った。いまから食べる。感想は、あと数十分後に。BGMはノーナ・リーブズの新譜「CHOICE III」。

しかし、平日の午後は、老人たちがいかに多いことか。主婦みたいなひとたちも多いのだけれど、圧倒的に70歳を超えるひとたちが多。彼らの話を耳にしながらパンを食べ、金子鉄夫さんの詩を読んでいた。二つの現実が決定的に同時代の現実なのに、決定的に異なる現実なのだった。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている、第8番目の詩「死にそこないのクズ」を全行引用する。

クルクル脳裏

バウンドさせてキナ臭いドラマ

びりびりにびりびりに破いて新宿

また産まれてしまいうらから

はなびら握りつぶして

騒がしいフトモモの咬合

(いじめてやるよ)

へドが出るね、出るね

生臭い液に浸りきれないやつらが

後をつけてきて恥ずかしい火をぶつける

(ちょっと待てよ)

誰のせいでもないはずさ

そんな口のないペットをひきずって

どこへいけるのさ

あんたに言ってんのさ

(ほら、間違えてる)

壊すなら最後まで壊してしまえ

海へはいけないだろうねえ

明日はない

はずが悪習はますます、熱、帯びて

あたまのなかでハチャメチャに鳴る

ソウルなビート

にのって腰ふればまたいつもの告白

の裏で賭されるカワイイままのふぐり

「さよならだけが人生だ」

なんて頬にペインティングした人々

は互いに刺し違って  
何くわぬ顔で繰り返して繰り返して  
なんでもない穴へ帰ってゆく  
死ねるか？クス、死ねるか？クス  
(ちよつ、ちよつと待つて)  
背骨から溶けてゆく交わり  
やわらかいはずのことばに唾吐いて  
あたらしい息できない他人になる  
塩漬けされた心臓をころがしながら  
つて  
勝手にしろよ  
なにもかもくろく叫びながら  
しゃぶれる骨さえない新宿  
死ねないねエクス死ねないねエクス  
せめて剥き出しに歩を進めろ  
(また間違つてゆく)  
大嫌いさ、ヘドがでるね

ほくが持ち帰った二つのパンのうち、もちっとした触感のチョコレートケーキのようなパンは、適度な甘さでおいしかった。★の形をして

いて、その★のうえから、パウダーシュガーが、シュガーパウダーかな、かかっている、とてもオトメチックな気分を味わいながら食べた。そのあと、金子鉄夫さんの詩をツイッターに打ち込んでいて、そんなに違和感がなかったのだけれど、これはもう、ほくの神経組織のなかに、金子鉄夫さんの詩句がずいぶんとなじんでいるってことを示しているのかどうかかわからないけれど、この「死にそこないのクズ」の詩は、これまで引用してきた7つの詩とはちょっと違う感触もある。オートマチックに言葉を繰り出している感じは、この作品にも大いにある、そのオートマティズムは十分に信頼できるものなのだけれど、これは金子鉄夫さんがベースを弾くからかもしれない。ほくもまたフェルナンデスのジャズベを弾いていて、クリス・スクワイアやジャコ・パストリアスやスタンリー・クラークやポール・マッカートニーやパーシー・ジョーンズといったベーシストが大好きで、彼らの音楽がすばらしいとほくに思えるのは、彼らが、音楽においてベースが音楽のベースであることを大いに知らしめてくれたミュージシャンだからかもしれない。ベーシストは信用できるのだ。で、この「死にそこないのクズ」は、どこが、それまでの7つの作品と違うのかなって思って、単語をしばらく眺めていた。午後のゆるい日差しが、パン屋さんの喫茶店のテーブルの上に落ちていて、ほくはときどき、自分の持っている金子鉄夫さんの詩集の開いたページに、その太陽光線をあてながら、テーブルの上でちょこっと左右上下に動かしてみたりして、開いたままの詩集を少し上にあげてみたりして、陽の光を躍らせて遊んだりしながら、言葉、言葉、言葉と、ハムレットのセリフを、金子鉄夫さんの詩句の上に落として、そうだ、記憶、記憶、記憶、これは、記憶とより強固に結びついた言葉なのだと思ったのだ。無意識領域の記憶がより強く働いたのであろうと思ったのであった。なぜなら、金子鉄夫さんの詩によって、ほくの記憶のなかでもが、ふだん思い出すことのなかった古い記憶が思い起こされたからであった。ほくの無意識領域に記憶されていたさまざまな映像が、音が、息が、感触が思い起こされたのだ。それは、映画のタイトルであったり、ほくが恋人といっしょに見に行ったときの思い出であったり、ほくたちの音楽、映像、鼓動、息、キッス、などなど、いろいろなものが思い起こされたのだ。ふだん思い出すことのなかったもの、もう意識領域には残っていなかったと思えるような、ささいな息吹、触感、声などが甦ったのだ。ほくは、そのことを、パン屋さんに行く前に、その近くにある100円ショップのダイソーで買ったメモパッドに書き留めたのだ。いつも使っているやつがなくて、少し小さめのものだった。いつも使ってる大きさのものがよかったのだけれど、でも、きょう買ったものも、そのうち慣れてきて、使いやすくなるのかもしれないなとも思った。これからパン屋さんから持ち帰った、もう一つのパン、めんたいこパ

ンを食べる。きょう読んだ金子鉄夫さんの詩「死にそこないのクズ」は、ぼくにいろいろなことを思い起こさせてくれたけれど、またこの詩篇は、文学的な古いレトリックがこれまでのものより多く、何か所にもわたって使ってあって、そのことがぼくに、これまで読んできた金子鉄夫さんの7つの詩篇とは異なる感触を味わわせることになったのかもしれないと思われたのであった。さっき食べた★の形のチョコレート味のもちとしたパンとは、味も触感もまったく異なる、ちょっと生臭いにおいのめんたいこパンを、これから食べる。ちと休憩。またあとで、「死にそこないのクズ」の感想を書く。

持ち帰った二つ目のパンを食べ終わったら、きゆうにお風呂に入りたくなくて、お風呂に入って、カドフェル修道士ものを読んでいただけけれど、早々に読書を切り上げて、頭と身体をゴシゴシ洗って出た。というのも、金子鉄夫さんの詩のことで、これは書いておかなくちゃと思うことが思い浮かんだからで、思い浮かんだことがすぐに胡散霧消してしまうぼくは、あわててお風呂から上がったのであった。金子鉄夫さんのこの詩篇「死にそこないのクズ」もまた、見事に意味のない、美しくもない、くだらない詩だった。しかし、その意味のないということが大事なことであったのだ。意味がないからこそ、ぼくは、自分の無意識領域にしまわれた、ふだんなら思い出すことのなかった記憶を思い起こすことができたのだから。ささいな、それこそささいなこと、天津メンをあいだにおいて恋人と二人で、二人のあいだのことを言い争っていたおおむかしの夜、映画「Shall We Dance?」を見た日のことが甦ったのだった。そのときの恋人のまなざしを思い出すことができたのだった。そのとき、二人のあいだに不穏な空気が、まさにそれは不穏な空気だったのだ、二人にとっては、というか、もしかしたら、ぼくだけにとっては、かもしれないのだけれど、そのときの瞬間の雰囲気、金子鉄夫さんの「死にそこないのクズ」という詩篇に書かれた意味のない詩行が蘇らせてくれたのだった。もしも、これが、詩句に意味があったものなら、ぼくに、あのときの不穏な空気を思い出させなかったかもしれないのだ。意味のない、ということが、とても重要なポイントなのである。また、美しくない、ということも重要なポイントなのだ。美はそれ自体が快楽であり、その美に浸らせることで読み手をからめとり、そこから動かなくさせるからである。自由度がきわめて低いのである。ぼくは、このあいだ、金子鉄夫さんの詩は、さまざまなものぐつかり合う場所であると書いた。ぐつかり合うには、自由度が必要なのだ。美は限定する。美は自由をゆるさない。したがって、詩における美というのは、必要なものなのではな

く不必要なものでさえあるのだ。ぼくはリズムをととても大切に思う書き手だが、もしかすると、言葉の音楽のもつ美というものも、不必要なものかもしれない。それが美であるということからである。金子鉄夫さんの詩篇も、音楽的な美からは解放されてはいない。というよりも、金子鉄夫さんの詩篇は、音楽そのもの、耳にここちのよい音楽そのもののような気がする。しかし、音楽的な美については、いま深く触れるのはやめておこう。ぼく自身が、いま思いついたばかりで、ほんとうに、音楽的な美さえ、詩には不必要でないものであるのかどうか分からないからである。音楽は必要であると思う。音楽的な美は、どうだろう。詩における音楽的な美は、どうだろう。いまは、詩において、音楽的な美が必要であるか必要でないかは言明しておかないでおこう。しかし、くだらなさ、ぼくはすぐに、キングオブコメディのコントのことに思いを馳せるのだが、絶対的に必要だと思う。笑いという、人間的な、おそらく人間的なものなかでも、もっとも人間的な喜びを与えてくれるこのくだらなさは、絶対的に必要なことだと、ぼくには思えるのだった。意味のない、美しくもない、くだらない詩が、破壊的な癒しの力をもっているのは、そうした笑い、自分のくだらない人生を、その人生の瞬間瞬間を、笑いをもって、ぼくたちに思い起こさせてくれるからだろう。それは苦笑いかもしれず、涙じりの笑いかもしれないが、ただひとつ、ぼくたちの人生を愛おしく思わせる笑いであることはたしかだ。そして、そういった詩篇をこそ、ぼくは最上の詩だと思うのだ。日々の意味のない、美しくもない、ささいな出来事が祝福されるのは、そういう詩篇においてこそなのだと、ぼくは思うのだ。

お風呂に入るまえに思ったのだけれど、金子鉄夫さんの詩集を読み出してから、ぼくは元気になったような気がする。人生を生き生きとさせる力が、すぐれた芸術作品にはある。ぼくを元気にしてくれ、ぼくの思考を生き生きとさせてくれた、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」との出遭いに感謝する。ぼくが詩を書いていることも、ぼくが詩を読んでいることも、ぼくがツイッターしていることも、すべてが偶然だった。偶然というものがあることで、意味のない人生が、美しくもない人生が、くだらない人生が、とても興味深いものになっているような気がするのだった。日々訪れる数えきれない偶然の数々から、ぼくたちはできている。そして、その名前のない偶然を思い起こさせてくれる力が、その偶然の出来事を保存している無意識領域にある記憶を呼び覚ましてくれる力が、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」にはあると、ぼくは確信したのであった。

**2012年06月08日(金)**

きょうは、いい夢見ました。きのう金子鉄夫さんの詩の感想で書いてた、むかし付き合ってた恋人といっしょに旅行した夢でした。ぼくが30代の後半でした。彼は20代で、まだ京大生でした。寝床につくときに、二人でふざけているときに目が覚めました。きょう読む、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている、第9番目の詩のタイトルは「烏賊脱ぎ」。詩集を持って仕事に。通勤電車のなか、授業と授業のあいだの空き時間に読む予定。感想は帰ってきてから。きょうは、どんなことに気がつくことができるか、自分でも楽しみ。

きのう書いた、いっしょに「Shall We Dance?」を見たその彼って、ぼくが自分の詩集の「The Wasteless Land.IV」の「熊のフリー・ハグ」に書いてた、エイジくんのことで、彼もぼくと同じように、ゴツツイ体格してて柔道してたから、いつもふざけて暴れていたけど、いまどうしてるんやろか。雪の日の深夜の雪合戦がなつかしい。

阪急西院駅の改札を通過してすぐ左手にゴミ入れがあつて、隅に残ったジュースをストローでチュパチュパ吸ったあと、ゴミ入れに直方体の野菜ジュースの紙パックを捨てるときに気がついた、着ていたシャツのボタンを掛け違えていたことに。一時間目から授業があるときは、西院のマクドナルドを利用することが多くて、たいていは、チキンフィレオのコンビで野菜ジュースを注文して、あと一つ、単品のなんとかマフィンを頼んで食べるんだけど、今朝もそうだったんだけど、野菜ジュースだけがまだ残っていて、でも時間が、と思って、ジュースを持って、店を出て、駅まで歩きながらチュパチュパしていたのだった。いや、正確に言うと、横断歩道では信号が点滅していたし、車のなかにいるひとたちの視線を集めるのが嫌で、チュパチュパしていなかったんだけど、それに、小走りで横断歩道を渡らなければならなかったし、改札の機械に回数券を滑り込ませなければならなかったの、そんなに歩きながらチュパチュパしていなかったんだけど、というわけで、改札に入ってから最後のチュパチュパをして、野菜ジュースの紙パックをゴミ入れに投げ入れるまで目を下に向けることがなかった

ので、自分の着ているシャツの前のところが長さが違うことに、ボタンを掛け違えて、シャツの前の部分の右側と左側とでは長さが違うことに気がつくことができなかつたのであつた。さて、ここからは、通勤途中の京都市地下鉄烏丸線に乗りながら書いているんだけど、これから、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第9番目に収録されている詩篇「烏賊脱ぎ」を読もう。この電車は、竹田駅で乗り換えなくてすむ、新田辺駅まで行く電車なので、読む時間はある。30分間のあいだ、この詩を読んで思ったことをメモしていった。この詩篇「烏賊脱ぎ」は、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」のなかにあるほかの詩と違って、意味のある詩だつた。詩句が意味を生じさせていて、文脈が明瞭に読みとれる詩だつた。全篇引用しよう。

油膜につつまれた穏やかな春先  
あつあつとつまるおまえを尻目に  
おれは烏賊を脱ぐ  
(脱いだらもうガキじゃない)  
脱いだ烏賊を上空三千メートルに投げ上げ  
(もうガキじゃない)  
さあようならだ  
むずかしく考えるのはやめようぜつ  
烏賊を着衣しておれが歩いた町は  
あらゆる貌が塩で錆びついて岩しかない町  
さあようならだ  
(なくんじゃあないよ)

うにゆうにゆながい足で撫でた  
おまえの首筋  
にはくつきり吸盤のあと  
ねっ、ねじ間違えてしまって締めてしまって  
堅い床に干あがってしまうヨルなんて  
まっぴらさ  
さあようならだ  
あたまのなかで  
ムラサキのガスみちみちてゆき  
烏賊を脱いだおれは  
すごいスピードで筋肉が生育してゆくようだ  
(おまえの包丁もおれみただ)  
烏賊を脱ぐ  
烏賊を脱いで  
どんどんおれは発汗し  
あたらしい生物になってゆく  
そしてあたらしい町を歩いてゆく  
(なくんじゃないよ)  
おまえが愛してしまったのは  
揚げることができるおれ

(たとえばゲソの天ぷら)

烏賊であったおれ

(勝手にしやがれっ)

意味のある詩だ。しかし、くだらなさはバツグンな詩だ。美しさがほんの少し沁み出しているけれど、邪魔にはならない。言葉は十分に音楽的だ。音楽についてはべつの機会に考察する。ここでは、この詩の意味について考えを巡らせてみたい。第9番目に意味のある詩を配するというのは、うまいと思った。詩篇の流れを単調にしないためにも、適切な配慮のように思える。そういう意味では、金子鉄夫さんは、編集の才能も高い詩人でもあるということだ。詩の才能があっても、編集の才能に恵まれていない書き手もいる。詩篇が殺し合っていることに気がつかないのである。かつてのぼくがそうだった。とにかく書いたものをすべてぶち込んで、大冊の詩集を立てつけに出していたのだ。500ページを超える「Forest。」や、350ページの「みんな、きみのことが好きだった。」を出したぼくには、編集の才能がなかった。ことし書肆山田から出す「The Wasteless Land.VII」は、この2冊のなかから引用を駆使した詩篇を選んでつくったアンソロジーだ。来年出す予定の「The Wasteless Land.VIII」もまた、この大冊の2冊からゲイ・ポエムだけを選んで編むつもりだ。編集の才能がなかったぼくが、編集の大事さに気がついたのは、ここ数年のことだ。さいきんの「The Wasteless Land」シリーズには、編集の才能が発揮されているように思う。金子鉄夫さんは、リカちゃんに聞いたところ、まだ20代後半の青年だということから、詩の才能と、詩集の編集の才能の、そのどちらも持ち合わせていらっしゃるので、これから先、どのような詩集をつくっていられるのかと考えると、ソラ怖ろしい気がしたのであった。ぼくを含めて、たいいていの詩人は、よっぽど精進しないと、負けっぱなしになるよ、と思ったのであった。というか、足元にも近寄れないよ、って感じかな。金子鉄夫さんの詩を読んで変わらないひともあるかもしれないけど、まあ、そういうひとつ、どんなにすごいもの見ても変わらないひとだろうからロンガイなのだけれど、そんなひと多そうな気もする、笑。まあ、ひとつ、そうそうカンタンに変わらない、変わらないものかもしれないしね。ぼくは、つぎつぎ変われる、変わるひとだけれど。そうそう、「烏賊脱ぎ」には意味があると、

ほくは書いた。解釈できると書いたほうがよいのかもしれないけれど、この詩篇は、「童貞喪失」の喜びを歌ったものであるのか、あるいは、「包莖手術の成功」の喜びを歌ったものか、あるいは、そのどちらをも同時期に経験したことの喜びを歌ったものであるのだろう。ほくが若いころは、まあ、中学生か高校生のときのことだけど、チンポコがイカ臭いと言えば、きのうオナニーしたって意味で、友だちをからかったり、からかわれたりしたもので、まあ、あまり清潔にしていないチンポコは、じっさいイカ臭いものである。イカ臭いと言うよりはイカのスルメの臭いかな。きちんとセッケンでゴシゴシ洗わないと、そういうイカ臭いにおいがするのは、あたりまえのことなのである。とりわけ包莖ならば、イカ臭さも、キツツイ。したがって、彼女ができて、もうそんなにオナニーしないぞっていう気がいが、この詩篇にはするのだけれど、どだろ。なにやら勝利宣言のようなこの詩篇の雰囲気からそう思えたのだけれど、どだろ。そこにまた、「包莖手術の成功」の喜びもビシバシ伝わるのだけれど、どだろ。手術が成功して、もうまえほどきつい臭いがしなくなったぞという気分も伝わってきたのだけれど、どだろ。包莖は恥ずかしい。一部のひとは、包莖のほうがいいと言うけれど、一般には、包莖は恥ずかしい。真性だと、ことさらである。詩篇の最後に出てくる「ゲソの天ぶら」の「ゲソ」は、もちろん、チンポコの先っちょの皮のことである。包莖手術で切除した包皮の一部のことである。うまい詩だと思う。「童貞喪失」の喜びと、「包莖手術の成功」の喜びを、こんなにおもしろく書いて、すごいなと思った。卑近な事柄を使って青春を謳歌してしまうというこの手腕に、完全にまいったな、って感じである。かつて、ほくが付き合った恋人のなかにも、包莖手術をした子が二人いた。その子たちのことも思い出された。その二人との付き合い。その二人の恋人とのこと。その二つの離れた時間。

2012年06月09日(土)

きょうは、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」のタイトル・ポエムを読み込む予定。いまから、DABO ちゃん似の恋人が部屋に遊びにくるから、読み込んで感想を書くのは、夕方くらいかな。きのうの感想のつづきからかな。それとも、まったく新しくはじめるかもしれないけど。

DABO ちゃん似の恋人が、お昼に広島風のお好み焼きをつくったものを持ってきてくれて、それをお昼ご飯にしたんだけど、晩ご飯はフレスコでって思ってたんだけど、半額になったさばの塩焼きと、これまた半額になったシャケの塩焼きを買って、キリン一番搾りの大きいヤツを買ってきた。この方が指がキーボードの上を滑りやすいだろうって思ったし、お酒が飲みたかったし、そうだ、フレスコに入るまえに、シェイクスピアの戯曲のセリフを思い出していたのであった。あとでルーズリーフを見直そう。DABO ちゃん似の恋人と話してたんだけど、どうして苦痛は3分の2で、快感は3分の1なのかって。わからないという返事だった。せめて半々くらいだったらいいのって言ったんだけど、わからないという。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」のタイトル・ポエム、「ちちこわし」を引用する。

うねうねでうねうね

踊れ、踊れ

ムカデのように逸る都市

の奇景を孕み

太いリズムの導火線

(裂けろっ、ばかっ

うねうねでうねうね

いびつな交差ばかりの生活の底で

サークルになって震える

零度の肌

に散る熱力学

とそこまでだろう

きみの読解力

ここからは泥まみれの形容詞の毛穴

をひらく

針

針があつたりもする

いのち漬けのドリッピング

ピンクに抜かれた赤ちゃんたちが流れる

国の道

(もうすこし、もうすこしでにぎやかになる

心術、なんてものかどうかは定かじゃない

が何もかもほどけてゆき

横文字の、肉の、下痢の、

おもしろいじゃないか父さん

うねうねでうねうね

あなたの睡で汚れたバックシートに座り  
窓外はまっくら  
まっくらにならないのが溶ける世代  
(僕／その他)の世代  
吃音にならざる得ない  
ブヨブヨの不可解な断面を捜査する日  
は必ず土砂降り  
おもしろくないだろう父さんは  
殴ればすむ  
そんなソウルが大事だったりもするのさ  
うねうねでうねうね  
でもどうしてこんなに血がこわい  
ってことがあるだろうか  
頭ひとつ喜ぶパフォーマンスが終わった空  
ジルジルになったチルドレンが踵を打つ  
国ノ道  
何を待っているわけじゃない  
が追ってくるものがある気がして  
誰だよ、と問えば破線をたどり  
インポ

インポだったりする都市

(安い身体だぜえ

(笑わせるな

(いや、笑わせておけ

もうすこし、

もうすこしでにぎやかになるはずです父さん

ここで首から下だけ改行

なんて無理な話

うねうねでうねうね

うねうねでうねうねの逃走のさきに

盛りあがってくる

あなたを壊すパニック

(害虫のようだガイチュウ……

うそぶくなコノヤロウっ

おもしろいじゃないか

最後はひとり

通り抜けていった花の名前をつぶやき

踊れよ、踊れ

この詩篇も、「烏賊脱ぎ」と同様に、意味のある詩行の繋がりが見られ、ほぼ把握できる文脈を形成しているように思われるが、意味を分断する言葉や語調がところどころに見られる。詩句のまたがり方は、かつての荒川洋治のように、文節破壊的である。しかし、この詩篇を読んでさいしょに思ったのは、いたるところに文学や音楽の破片が散りばめられていることだった。いや、散らばっていることと言ったほうがより適切だろうか。「導火線」はディラン・トマスだし、「バックシート」はポール・マッカートニーだ。そういえば、「烏賊脱ぎ」のなかにあった「すごいスピードで」というのは、吉増剛造だった。これは、ぼくの読書体験と、金子鉄夫さんの読書体験が混じる一つの場所だ。さまざまなフェイズで体験が混じり合うのだろうけれど、ぼくの場合、読書体験のひきずりが大きいので、即、反応したのだろう。シェイクスピアの『リア王』の第四幕・第六場に、「ああ、意味と無意味が入り混じっている！」（野島秀勝訳）というセリフがある。金子鉄夫さんの詩篇は、金子鉄夫さんの現実と、ぼくの非現実が入り混じる場所であり、金子鉄夫さんの非現実と、ぼくの現実が入り混じる場所だ。金子鉄夫さんの詩篇は、金子鉄夫さんの意味と、ぼくの無意味が入り混じる場所であり、金子鉄夫さんの無意味と、ぼくの意味が入り混じる場所だ。「まさに理解不能な世界こそ——その不合理な周縁ばかりでなく、おそらくその中心においても——意志が力を発揮すべき対象であり、成熟に至る力なのであった。」（フエンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳）、「一つ一つのものは自分の意味を持っている。」（リルケ『フィレンツェだより』森 有正訳）「その時々、それぞれの場所はその意味を保っている。」（リルケ『フィレンツェだより』森 有正訳）「断片はそれぞれに、そうしたものの性質に従って形を求めた。」（ウィリアム・ギブスン『モナリザ・オーヴァドライブ』36、黒丸 尚訳）。おそらく、金子鉄夫さんのなかで、さまざまな断片が、言葉の断片が、意味の断片が、記憶の断片がぶつかり合っ、くっついていったのだと思う。詩人としては、幸福な時期だ。言葉が勝手に繋がっていつてくれるのだから。それにしてもリアルである。言葉に運動性がある。で、それでいて、なおかつ、不動性があるのだ。「矛盾ほど確実な土台はない」（ジーン・ウルフ『拷問者の影』8、岡部宏之訳）。「学校や公園や通りや塔など、バラバラになったぼくの人生の断片を通り抜けていった。オリジナルよりもずっとリアルなものに並びかえられたジグソーパズル。」（リチャード・コールダー『デッドガールズ』第七章、増田まもる訳）「肝心なことはね、人生がすごくリアル（、、、）に感じられるようになったことでしてね。」（ジョン・スラデック『平面俯瞰図』越智道雄訳）「文体とは、まさに作家の思考が、現実に対して加える変形のしるしです。」（プルースト『サント＝ブーヴに反論する』サント＝ブーヴとバルザック、出口裕弘・吉川一義訳）意味を形成しよう

とする詩行と、その詩行の意味をなくさせようとする詩行が、そうだな、3分の2と、3分の1くらいの混じり合い方が、ぼくには、いい感じかな。半々くらいのもんじゃないかもね。さまざまな言葉の、意味の、記憶の断片たち。「断片だけがわたしの信頼する唯一の形式。」(ドナルド・バーセルミ『月が見えるだろう?』邦高忠二訳)。「首尾一貫など、偉大な魂にはまったくかわりがないことだ。」(エマソン『自己信頼』酒本雅之訳)。「読書の楽しさは不確定性にある——まだ読んでいない部分でなにが起きるかわからないということだ。」(ジェイムズ・P・ホーガン『ミクロ・パーク』26、内田昌之訳)「驚きあってこそその人生ではないか。」(デイヴィッド・プリン『スタータイト・ライジング』上・第三部・32、酒井昭伸訳)「人生はほとんどいつもおもしろいものだ。」(タビサ・キング『スモール・ワールド』5、みき 遥訳)。あつ、「意味を形成しようとする詩行と、その詩行の意味をなくさせようとする詩行が、そうだな、3分の2と、3分の1くらいの混じり合い方が、ぼくには、いい感じかな。」って書いたけど、これは、逆かもしれない。いや、まあ、バランスが悪ければいいかな。「西洋の庭園の多くは均整に造られるのにくらべて、日本の庭園はたいてい不均整に造られますが、不均整は均整よりも、多くのもの、廣いものを象徴出来るからであります。」(川端康成『美しい日本の私』)「多くを言うために少なく言う言いかたで」(ガデンヌ『スヘヴェニンゲンの浜辺』17、菅野昭正訳)、「短い言葉なのに、たくさんの意味がこめられている。」(シオドア・スタージョン『フレミス伯父さん』大村美根子訳)。もしかしたら、俳句や短歌の感覚に近いのかもしれない。そだ。きつと、金子鉄夫さんは、きわめて日本的な詩人なのだ。

あつ、あほやった。「金子鉄夫さんの詩篇は、金子鉄夫さんの意味と、ぼくの無意味が入り混じる場所であり、金子鉄夫さんの無意味と、ぼくの意味が入り混じる場所だ。」なんて書いてたけど、金子鉄夫さんの詩篇は、金子鉄夫さんの意味と、ぼくの意味が入り混じる場所でもあって、金子鉄夫さんの無意味と、ぼくの無意味とが入り混じる場所でもあったのだった。あらゆる可能性があるのだった。と言っても、まあ、一人について、2つやから、2×2で、4通りだけやったけど。そういえば、フレスコに行く途中、道に落ちてたお父さんやお母さんを引きずって帰る子どもたちがいたな。ひとりで難儀してる子どももいたけど、兄弟姉妹たちで仲良くお父さんやお母さんを引きずって帰る子どもたちもいた。ぼくも、むかしの恋人を引きずりながら買物してたけど。

あつ、ルーズリーフを読み返しながらか、さつきツイートした自分の言葉を思い出していたら、2×2じゃなかったことに気がついた。言葉と意味と記憶は別々のものなのだから、ひとりで3×2の6つなのだから、6×6で、36通りだ。金子鉄夫さんの詩篇は、金子鉄夫さんの言葉と、ほく言葉がぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの言葉と、ほく言葉でないものがぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの言葉でないものが、ほく言葉とぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの言葉でないものが、ほく言葉でないものとぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの言葉と、ほくの意味がぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの言葉と、ほくの無意味がぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの意味と、ほく言葉がぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの無意味と、ほく言葉がぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの記憶と、ほく記憶がぶつかる場所であり、金子鉄夫さんの記憶でないものと、ほく記憶がぶつかり、金子鉄夫さんの記憶と、ほく記憶でないものがぶつかり、金子鉄夫さんの言葉でないものと、ほく記憶でないものがぶつかり、などなどと、36通りあるのだった。詩行ごとにぶつかるとしたら、ものすごい総計だ。まあ、じっさいのところは、ぶつかってばかりじゃないだろうけれど。でも、よくぶつかる、いい言葉だ。隣の言葉はよくぶつかるいい言葉だ。赤言葉、青言葉、黄言葉。言葉のうえに言葉をのせて、その言葉のうえに言葉をのせて、その言葉のうえの言葉に言葉をのせて、とつづけて言葉をのせていって、そこで、一番下の言葉をどけること。ときどき、言葉に曲芸をさせること。ときどき、言葉に休憩をとらせること。言葉には、いつもたっぷり睡眠を与えて、つねにたらふく食べさせること。でもたまには、田舎の空気でも吸いに辺鄙な土地に旅行させること。とは言っても、言葉の親戚たちはきわめて神経質で、うるさいので、ちゃんと手配はしておくこと。温度・湿度・気圧が大事だ。ホテルではみだりに裸にならないこと。支配人が髪の手をつかんで引きずりまわされるからだ。階段から突き落とされる掃除婦のイメージ。まさかさまだ。ホテルでは、みだりに裸にはならないこと。とくにビジネスホテルでは、つねに盗聴されているので、気をつけること。言葉だからと言って、むやみにほかの言葉に抱かれたりしないこと。朝になったら、ドアの下をかならずのぞくこと。差し込まれたカードには、新しい意味が書かれている。

2012年06月10日(日)

たくさんのお手が出るおにぎり弁当がコンビニで新発売されるらしい。こわくて、よう手え出されへんわと思った。きゆうに頭が痛くなって、どしたんやろうと思って手を額にあてたら熱が出てた。ノブユキも、ときどき熱が出るって言ってた。20年以上もむかしの話だけど。ぼくがまだあんまり人にバカにされていなかったころの話だ。年齢をとると、やれ、口臭がする、加齢臭がすると言って、あからさまにバカにされる。金子鉄夫さんは若いらしい。詩も元気があつて、ぼくも元気をもらった。きのう、日知庵で、新谷さんに、「きょうのあっちゃん、元気やな。ここさいぎんのあっちゃんと、ぜんぜん違うなあ。」と言われて、「ぼくもそう思うわ。(と言って、リュックのなかから、金子鉄夫さんの詩集を出して)、この詩集、読み出してから元気になったみたい。きょうは、この「烏賊脱ぎ」って詩を読んでたのね。読んでみて。(と言って、隣の席に坐つた新谷さんに金子鉄夫さんの詩集を手渡した。)」 「どう？」 「いや、わからへんわ。」 詩集を返される。「ええとね、これって、ぼくには、童貞喪失と、包茎手術の成功を同時に迎えて大喜びしてる青年が主人公やと思えんねんけど。」 「えっ。もっかい貸して。」 もっかい読み直す新谷さん。「ほんまや。あっちゃんの解説で、そんな意味してると思って読んだら、おもしろいわ。」 「そんな意味にしか、ぼくには思えへんけどね。でもね。この詩集、この詩のまえまでは、ぜんぜん意味がなかったんだけどね。その意味がないってところが、ぼくにはおもしろかったんだけど、意味のあるこれもおもしろかったんだよね。」 ここで、新谷さんの携帯に電話がかかってくる。新谷さんがいったん店の外に出る。ぼくは新谷さんの奥さんに、金子鉄夫さんの詩集を手渡して、「この詩集の詩、ぜんぜん意味がなくて、美しくもないし、くだらないのね。でも、そのくだらなさが、ぼくにはまるで、キングオブコメディのコントのようにおもしろくてね。さいしょのページを開いたときには拒絶反応があつたんだけど、手から離れなくなっちゃってね、とうとう、お風呂にまで持ち込んで、ぜんぶ読んじゃったんですよ。」 奥さんが詩集を読んでいるのをジャマしちやいけな思つて、焼酎のロックをちびりちびり飲みながら、奥さんが詩集のページから眼を離すのを待っていた。新谷さんが戻つてこられて、奥さんが、「うちにはわからへんわ。」とおっしゃつたので、ぼくが、「わからないってことがいいんですよ。しかも美しくもなく、くだらないってことがね。キングオブコメディのコントのように意味もなくて、

美しくもなくて、くだらないってことがすばらしいですよ。また、えんえんと、1冊の詩集に、くだらないものを書きつけていくってところがすばらしい。ふつうは美しくしちゃうでしょ？」「うちは、美しいほうがええわ。」「いや、美はもうダメですよ。過去のもんです。きのうのもんです。美は拘束力がありますから、ダメなんです。自由度が低い。読者の思考に運動をもたせないんですよ。知的ではない。美は墮落なんです。読者に考えさせないんです。」返された詩集をリュックにしまう。「でも、うちは美しいほうがええわ。」詩集をしまったリュックを叩きながら、「ときには美しいものもいいでしょうね。でも、ここには美にはないものがあるんですよ。キングオブコメディのコントがもつような癒しの力です。くだらないと思わせつつ、魂を救済するんですよ。ほくたちのくだらない人生に光をあてるんですよ。意味のない、美しくもない、くだらない人生に。」左端のひとが金沢から来たひとらしく、新谷さんが、「金沢のどこからいらっしたんです？」と、見知らぬ客に声をかけたので、ああ、もう詩の話はやめなあかんと思って、焼酎のロックを、ちびりちびり。タバコが吸いたくなって、タバコ、タバコと言って立ちあがったら、その金沢のひとからこれどうぞと言われて、マールボロのほくの知らない白い箱のマールボロを差し出されたので、「じゃあ、お礼にはくの詩集、あげますね。」と言って、リュックのなかから自分の詩集『The Wasteless Land.V』を出してプレゼントした。「帯に、このお店の名前の日知庵って出てるでしょ。この詩集の大部分が、このお店でしゃべったことを書いてるのね。」とか、ぺらぺらと自分の詩について語り出す、51歳・独身・短髪・ヒゲのほくやった。まあ、むかしはかわいかったわ。

金子鉄夫さんの詩集のおかげか、脳みそが覚醒してほとんど眠れなかった。くつきりー。これから、西院のパン屋さんでモーニング食べながら、金子鉄夫さんの詩集のつぎの詩篇「マディ・ウォーター」を読むことに。この単語の意味、知らんからいちおう調べておこうと。

泥水のことやった。でも、音楽に「マディー・ウォーター・ブルース」ってのがあったり、マディー・ウォーターズって名前のミュージシャンがいたりするのね。ポール・ロジャースが出てきてびっくり。バドカンじゃね？ と思って。なつかしかった。

西院のパン屋さんに行く前に、郵便局に行って、白鳥央堂さんに、ほくの詩集「The Wasteless Land.III」と「IV」と「V」を送っておいた。

詩篇「マディ・ウォーター」から、どろんこプロレスや、田んぼで泥の掛け合いをする田舎の祭事を思い出した。散文詩の形っていうのも、どろんこプロレスや、田圃で、あの泥の掛け合いをする田舎の祭事にぴったり符合するなとも思った。さてさて、内容はどやろか。これから西院のパン屋さんに行こかな。窓際の席に、51才・短髪・髭のゲイのハーフパンツ姿のオジサマが詩集を読んでいる、おされな景色が出現する。

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第11番目に収録されている「マディ・ウォーター」は、とてもかわいらしい作品だった。きょうは、これから、京都東急ホテルの2階で焼酎の会があるので、感想は夕方か夜に書く。金子鉄夫さんが好きなディラン・トマスの書簡を引用して。

焼酎の会のあと、武田先生と、おされな店で飲んで、蕎麦屋でそばを食べ、そのあとジュンク堂に寄って、そこで武田先生と別行動になり、日知庵に行き、帰りに歩いていたら、十年以上もまえに付き合ってた子と出会う、ありゃ、こりゃ先月のパターンかと思ってる、そうでもなくて、いままで飲んでただけだけど、帰りに、またいつしょに飲みたいなって言ってきて、いろいろあったことをちゃらにして、この子はすごいなあと思ったのだけれど、この子の言葉でハツとした。ノブユキも、ほぼ同じ言葉を、ほくにつぶやいたのだった。「おれ、つまらん人生してる。」その子は、「つまらない毎日。」でも、ほくから見たら、その子も、ノブユキも、ぜんぜんつまらん人生していないし、つまらない毎日を過ごしてるようには見えないのだった。その子はショートドレッドのテクノカットで、おされなボンボンだし、ノブユキは毛髪残念組だけど、やはりボンボンだし、まあ、二人とも、お金持ちの家の子だし、なに言ってるのかなって思ったのだけれど、ハツとしたっていうのは、つまらん人生とか、つまらない毎日ってのは、少なくない人間が日々感じていることなんだなってこと。成功してるひとつで、ほくの身近には、弟くらいしかいなくて、ほくにはとてもムリって人生していて、ほくは、ほくの意味のない、美しくもない、くだらない人生を愛してるんだなって思ったのだった。ノブユキだって、その子だって、ほくに、「くだらん人生してる。」「つまらない毎日。」って言ったときには、半分笑いながらの、照れたような、あきれたような表情で、でも、けっしてつらいことを避けたり、嫌なことから逃げ

たりしてるような感じじゃなかった。その子もそうだった。人生を愛してるなって感じがしてた。じっさい愛してるとは言わなかったけれど、訊けば、二人ともそう答えたと思う。でも、逆に考えれば、とても不気味な人間ができあがる。意味のある、美しい、くだらなくない人生してるひと。これは怖くて不気味だなと思った。意味があるものをつくろうとしたり、美しいものをつくろうとしたり、くだらなくないものをつくろうとしてるわけだけど、どこかしら、いびつで不気味だ。そう考えると、意味にとりつかれたひとや、美にとりつかれたひとたちが、どこか不気味な感じをかもしたしてるというのは、とてもよくわかる。何人もの詩人たちの顔が思い浮かんだ。ほくは、むかし、雑誌に載ってる詩人の顔を見てびっくりした記憶がある。人生に生き生きとしたものを感じているのかどうか知らないけれど、けっして幸せそうじゃなかった。ほくなんて、いっぱいいろんなことがあっても、ほとんどいつもニコニコしてるのだけれど、なんか取り憑かれてるっていうか、男の詩人も、女の詩人も怖い表情のひとばかりだった。いまは、そうじゃないみたいで、明るい表情で、ニコニコしてるひとが多くて、ほくのように臆病なひとは、ほっとしてると思う。金子鉄夫さんのお顔は知らない。知らないけれど、きっと、余裕のある表情をなさってると思う。詩篇に余裕が感じられるからね。そういえば、むかしの詩人たちの作品には余裕がなかったなあ。余裕が顔に出てたのって、西脇順三郎くらいじゃないかな。田村隆一も、吉岡実も、彼らの書く詩には余裕がなかったし、表情にも余裕がなかった。詩と詩人の顔はべつやろって、まえにだれかに言われたけれど、ほくは、顔や表情にぜんぶあらわれてると思う派である。きょうは、金子鉄夫さんの詩篇「マティ・ウォーター」の感想をきちんと書く予定だったのだけれど、酔っ払っているんで、あした、きちんと書くことにする。午前中に取ったメモが10枚あるんだけど、それを入力するのは2時間以上かかるだろうから、きょうはムリ。ごめんなちゃい。

2012年06月11日(月)

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第11番目に収録されている「マディ・ウォーター」を引用する。

不意に動けなくなって、はらわた掠め取るコードが響き、すれちがう人に「おまえも切れよ」と錆びた鋏を渡される新宿の夕闇ポン酢臭い白紙が舞い落ちて、肺魚の姿勢のまま歪んでいるおれはマディ・ウォーター。買う、買わないの話じゃなくて盗む、盗まないの話でもない。ダデい、恥ずかしい患部が痒くなる度、毛穴から無数のしゃがれたボイスがするのだが、それはおれがこの新宿に二の腕から沿っていないからか？ 誤読してしまった高島屋から千鳥足で出てくる電柱たちは、どこかしらに、まぶしい木目を持っていて動脈で捲れない、本日のページにケツ隠すおれはマディ・ウォーター。さびしいわけじゃない、顎から粉末になってゆく、この新宿の感嘆符に恐怖してデブってゆください。このまま生きぬいてしまうつもりだけど頭の捻子を抜いて浮き足立れば射止められる惑星だってあるかもしれないだろう。マディ・ウォーター、おれはマディ・ウォーター。ダデい、偶然じゃないのさ、いつかは鼻っ柱折られるフラクタル。だけどおれはこのまま生きぬいてしまうつもりさ（わりいねっ）全身にのたうちまわるブラックを浴びて、一億万本のセブンスターを啜って痒い痒い患部を曝して歩く新宿の夕闇。「おまえも切れよ」とすれちがうノッペラな人に錆びた鋏を渡されて、手にした鋏で何を切ろうか？ 新宿。振れた血液がながれたあとでおれはマディ・ウォーター、切るものなどどこにある？

この詩篇も前作にひきつづき、繰り出される詩句の意味が繋がってる詩篇なんやね。きわめてバロウズ的な情景が出現している。ワイヤードという点では、ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアの「接続された女」が思い出される。難病の老人の夫をピストルで撃ち殺し、自分もまたあとで自殺した、アメリカの女流SF作家のね。繊細だけど、凶太い感じもする。感覚が鋭くて、神経が実生活ではズタズタにされ

てるけれど、なぜかしぶとく生きていくことができる。ほくがそうだから、金子鉄夫さんも、そうかなって思ってしまう。この詩篇のモチーフは、とてもSF的だ。ところどころで挟まれる文学的な修辞というか、詩的な言い回しにも、現代詩の残滓が見られる。ピチグソのうんちだ。うんこだと固いかんじだから、うんちなんだけど、ピチグソのうんちがキライでもないボクは、ニヤリとしてしまう。高島屋から千鳥足で出てくる電柱たちは、あの黒っぽいコートをまとった宮沢賢治を思い出させる。たくさんの、あのやぼったい宮沢賢治が高島屋からどどーつと出てくるイメージだ。

「風景はなぜ立止つてくれないのだらう。」(金子光晴『わが生に与ふ』4)「その動作それ自体が詩であり」(ブライアン・W・オールティス『中国的世界観』12、美濃 透訳)「偶然は本質と同じように貴重なのだ」(コルターサル『石蹴り遊び』その他もろもろの側から・133、土岐恒二訳)。「クマの縫いぐるみか」(ウィリアム・ピーター・ブラッティ『エクソシスト』I・1、宇野利泰訳)。「熊の縫いぐるみに何がわかるというんだ？」(フレデリック・ポール『ゲイトウエイ』21、矢野 徹訳)「そのぶよぶよした体を、魚たちにくれておやり。」(フィリップ・ホセ・ファーマー『異世界の門』2、浅倉久志訳)「うすばかデブちんが」(ブライアン・W・オールティス『地球の長い夜』第三部・22、伊藤典夫訳)「優れた詩のように」(ジェイムズ・P・ブレイロック『ホームクルス』2、友枝康子訳)、「きみは生きている限り、きみはまさに瞬間だ」(H・G・ウェルズ『解放された世界』第三章・3、浜野 輝訳)。「芸術家にとっての限界はたった一つだけで、それはあらゆるもののなかで最も大きなもの、つまり形式です。」(ディラン・トマスの手紙、パメラ・ハンフフォード・ジョンソン宛、一九三三年一月一日、徳永暢三・大田直也訳)「重要なのは形式なのである。」(P・D・ジェイムズ『ナイチンゲールの屍衣』第四章・8、隅田たけ子訳)「世界は新しい形のものだ」(ギブスン&スターリング『ディファレンス・エンジン』上・第二の反復、黒丸 尚訳)。

わりと順調に読み込んでいけるような気がする。それは、もちろん、金子鉄夫さんの詩が、ほくにさまざまなことを思い起こさせてくれる、頭脳を刺激する詩だからだ。ほくは、以前に、元気になる詩のアンソロジーをつくらないかと詩人たちに呼びかけたことがあった。稀な詩だと思うけれど、ほくには、とても意義のあることに思えたのだ。頭脳を刺激する、さまざまなことを考えさせてくれる詩だ。ほくはドイツ

トマンの名前をあげた。もっとも健康的な詩だからだ。金子鉄夫さんの詩は、潜在意識に存在していて、ふだんなら思い出さないことまで思い出させてくれた。無意識領域にまで刺激を与えて、忘れていた記憶を思い起こさせてくれるような力のある詩は、ほんとうに稀だ。金子鉄夫さんの詩は、ホイットマンの詩より、ほくを元気づけてくれた。この詩集は、21世紀のいま現在の、もっともすぐれたパワフルな詩集だと思う。

これからお風呂に。それから西院でモーニング。きょうは、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第12番目に収録されている「分裂しよう、そうしよう」を読み込む予定。読んで、ほんとに楽しい。いっぱいいろんな記憶が思い出される、考えが思い浮かぶ。言葉と言葉が結びつくのだ。

かなりヨツパだけど、いまワードに金子鉄夫さんの詩篇「分裂しよう、そうしよう」を打ち込んでいる。いったんワードに書き込んでから、ツイットした方が間違いが少なくなりそうだから。どだろ。あ、1冊の詩集には、1冊分の詩集評があつて、当たり前やと思うんやけど、どだろ。ああ、そして、ほくはこう思ったのだった。詩句をすべて自分で書き込みながらでないと、文体のもっている力をきちんと把握できないんじゃないかなって。少なくとも、ほくのように紙に何度も詩句を書き写すタイプの書き手は。そんな気がした。ほくは、あんまり勉強もできなかったし、なにか一つのことを理解するだけでも、すごい時間のかかるひとだったので、そう思うのかもしれないけど。いまじゃ、書いても、書いたこと忘れるくらいに頭が悪くなってるけど。頭のいいひとはいいなあとは思うけど、ほくには、なぜかかわいそうな気もする。どしてかな。

かなりのヨツパ。焼酎、720MLの3分の2近く飲んでる。ノーナの新譜を何度も掛け直して。そいえば、むかし、ユリイカの編集長だった歌田明弘さんに、ほくが東京に行って会ったとき、自分の投稿した詩を一日中ながめていますって言ったら、「へんな人ですね。」と言われた。これからフレスコに行って夜食を買う。帰って、お腹がいっぱいになったら、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第12番目に収

録されている「増殖しよう、そうしよう」の感想を書こう。プラトン哲学の中核に触れるところと、詩の音韻的效果について言及しようと思う。ヨッパだわ。あちゃー、「増殖しよう、そうしよう」じゃなかった。いま裏返しにしていた金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」を手にもって見直したら、「分裂しよう、そうしよう」だった。南 大祐くんの詩に「知らないうちに増殖してしまいそう。」ってのがあって、その記憶がダブったのかな。とりあえず、フレスコへ非難します。あ、避難します。こんな時間からベロンベロンで、まわりのひとが顔しかめるかもしれへんけど。平日は、これくらいの時間から食べ者が半額になるのだった。あつ、食べ物が、だな、笑。変換ミスは楽しい。むかしの詩人は味わえなかったね。あ、南 大祐くんの詩の言葉、「知らないうちに、きみ、増えてるんちゃう？」やった。なんちゆう忘却力。すさまじいいきおいで、記憶に忘れ去られてしまっている。そうだな。記憶が、ぼくのことを忘れていくのだと思う。忘れていく記憶がぼくかな。フレスコは？ 行ってきます。

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている、第12番目の詩篇「分裂しよう、そうしよう」を引用する。

何年

住みついても変わらない

(いつだって刺し違えてしまう) この町

の表皮の味

今夜もスリ潰した怒号がするのだけれど

声の主は見当たらない

なにもない沼へ

帰るふりをする人々は皆

一度は汚い国道に流されて  
別の筋肉をまとめて戻ってくるという  
(いつだって刺し違えてしまう) この町  
そんなおれだって一度は流されて  
背にへえんな符牒を張られて  
クソにもならないクリシェを繰り返して  
ユビが溶けるまでしゃぶっている  
だから今夜だけは  
身元がわからぬように 頭から大きな紙袋を破って  
分裂しよう、そうしよう  
可能なかぎり卑猥を叫んで  
ズブズブ深い、この町の闇に  
まずは四方に四肢を散らして  
分裂しよう、そうしよう  
血脈を織ってまで解読しようとした  
(いつだって刺し違えてしまう) この町  
を囲む笑うプリン体  
溢れる、うっとうしいエレジーで  
クチビルが切れてしまうさ  
帰りたいぜ、帰りたいぜ

爬虫類のようなリフレインが壁という壁に  
こだまして今夜も海へはたどりつけないやつら  
大嫌いだって、この町の臭い  
(あんたと同じ臭いがする)  
暴こうと後をつけてくる  
くずれてしまった塑像  
大嫌い、大嫌いだって  
「否」で満たされてゆくおれの膚  
を舐めはじめ鋭利なノイズ  
ずっと見ているんだろう  
さっきから見ているんだろう  
頸筋に湿った荒縄をあて  
フラフラしている  
産まれてこなかった方法が  
夥しい「青」を吐き散らしている  
(いつだって刺し違えてしまう) この町  
の余白  
四方へ散った四肢は  
今夜も何もつかめはしないだろう

こんな夜はなんて言えばいいんだろう

漂いながら、漂いながら

砂を噛んで痺れている

それでも今夜だけは

分裂しよう、そうしよう

この詩篇のタイトルを読んですぐに、ぼくは、プラトンのディアレクティケーの手法を思い起こした。ディアレクティケー、すなわちダイアローグ、対話形式という、思考そのままの写しのようなものというか、自分のなかにある対思考用の「仮の話し相手としての自己」との会話を思い起こしていたのだった。まあ、もともと、思考とは、自己との対話からなるものではあるが、こんなにダイレクトにタイトルにまで入れているのは、はじめて目にした。ディアレクティケーの痕跡は、もちろん詩句のなかに散りばめてある。そして、同じ詩行のリフレインによる音楽的なリズムも十分に計算してある。そして、この詩において、ようやく意味のなさが回復されたのであった。繰り返される言葉の無為さに大いに慰められる。意味もなく、美しくもない詩句の繰り返した。くだらなさもバツグンである。そして、いつか書こうと思っていたのだけれど、この詩人、金子哲也さんがタダ者ではないことが、この詩篇において、ぼくには決定的になったのであった。「生」が適切どころを、この詩人は、えんえんと、「産」という字を書いていたのであった。ぼくは、むかし、詩を書く前に小説を書いていて、文学座の演出をしていたひとと付き合っていて、そのひとに、ぼくの書いていた文章を見てもらっていたのだけれど、とにかく、言葉にうるさいひとだった。誤字など、とんでもなかった。不適切な漢字を書いたりしたものだったら、そらこっぴどく叱られたものだった。ぼくには小説が無理だといって、ぼくに、「きみが書いているのは小説ではなくて、詩だよ。」と言ってくれたひとだった。まあ、それで、詩を書くことになり、投稿したらすぐに掲載されて、ユリイカの新人になったのだけれど、そのひとには感謝している。いろいろあって、ぼく

につらい思いをさせたひとでもあったのだけれど、大恩人であることには変わりはない。金子鉄夫さんが「生」ではなく「産」の字をしつこく書きつづけるのは、おそらく読み手に違和感を引き起こすためであろう。これは一つの賭けである。読者のところに違和感を引き起こしてまで、詩篇の意味を攪乱させているのである。無意味というものも意味なのだろうか。無意味という意味の意味である。無意味という意味を発生させるために、この詩人、金子鉄夫さんは、ここまで言葉を計算して使っているのだ。ぼくが同じような手法で詩を書いていたのでわかったのだが、はてさて、ほかのひとにも通じていただろうか。まあ、それは話が別だ。ぼくが感受したことのみ語ろう。詩は、ぼくにとって、コラージュである。それは、つくり手としてのぼくの見方だけれど、金子鉄夫さんも、きっとそう思っただけのじゃないかなと思えるのだけど、どだろ。頻出する東京の土地の名前は、ぼくが京都の地名を頻繁に書きつけるところといっしょで、これはもちろん、土地に小便をひっかける犬のマーキングである。土地の名前に小便をひっかける犬のマーキングである。詩人とは言葉に自分の小便を繰り返し繰り返しぶっかける犬なのである。まあ、ぼくも、金子鉄夫さんも、小便だけじゃなくって、うんちのほうも、ブリブリブリッて、ぶっかけてると思うけどね、笑。いやいや、そうじゃないか。金子鉄夫さんは、ぼくよりずっとじょうずに、ぶっかけてるか。ぼくももっとじょうずに言葉にうんちをぶっかけられるような詩人になります。かなりヨッパで、ひどいこと書いてるかなあ。まあ、いいか。いまさら、きれいぶっても仕方ないしね。思ったことを書くと、ぼくは決めたのだから。たかだか100年未満の自分の人生だもの、好きに書くわ。しつぺ返しはかならず来る。おもしろいほど来る。

2012年06月12日(火)

きょうも金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」を持って行って、通勤途中や授業と授業の空き時間に読むつもり。第13番目に収録されてる詩篇で、ちょうど半分のところのもの。うわー、あと半分しかないのか。さびしい。しかし、ここまで見事に、1作1作が個性的なものばかりやった。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」収録、第13番目の「おまえのせいだよ」を引用する。

いきなり殴ってクチビル腫らし  
深く爛れていく夜になるまえに  
ビニールシートは不意に捲られて  
あわてて入れるスポットには  
貌、顔がないのだから安易なナミダはながれない  
(それは安心さ)  
無数の矢印に白い恥ずかしい肉を刺されて  
はみだしてカマドウマの虚言  
孕んでゆく沿線のさきで見知らぬ銅像のツバに  
汚されて舌嚙んで桜色に染まる  
おれの裏表紙  
「おまえのせいだよ」

「てめえがわるいのさ」

ヤミヤミでまわるあまたのこし

思想（塩ビ使用）なんかじゃないぜ

カラフルなペンキに塗れた頭を端からたいらげてゆく経験

（はっ、ここはどういったセミナーだよ）

誤読から炎症する先端を漬けて

あぶくたつあぶくたつなかみのみなのあおいケツ

わめき続けてジユクジユクするんだね

（いる？ いない）

（きれい？ きたない）

潰れてろって

次はおれからこの町の間を抜けた怪獣を犯してやる

（あおげばとおとし、あおげばとおとし）

振りむけば弾けそうな人ばかりのまなざしに

真っ青になって吐くゲロの中で泳ぐムツシュ

（それは不毛な労働だ）

なんて言い草をまたするんだな

ゆるんではほつれる荒景を方に落として

深く爛れていく夜に呆けてろって

見渡せばカワイイ廃屋たち

恨むなんてしないさ

でも

「おまえのせいだよ」

「てめえがわるいのさ」

金子鉄夫さんの詩句には、その音には、映像をふくらませる力がある。と同時に、金子鉄夫さんの詩句には、その音には、せっかくなつくつた映像を即座にぶち壊してしまう力がある。つくっては壊し、つくっては壊すという運動性が感じとれるのだ。むかし、ほくの詩をよく読んで批評してくれた友だちの言葉を思い出した。ジミーちゃん言葉だ。「あなたの詩はリズムによって理性が崩壊するところがよい。」という言葉だ。ルーズリーフを眺めていると、ジミーちゃんのこの言葉に目がとまったのだ。すばらしい言葉だと思う。この言葉は、金子鉄夫さんの詩にもあてはまるような気がする。踏めば爆発する地雷のようなものか。まあ、そこまで激しくバラバラにしてしまうことはないが、飛び地のような自我のかけらに、くらくらと目がくらませられる。ほくは、ほくの詩にうんちのような自我をばらまいていて、読んでいるひとが顔をしかめるような気がするんだけどね。ブヒッ。どだろ。金子鉄夫さんのこの詩は、一行一行をとると、意味がわかりやすく、ということは現実感がありありとしてあるんだけど、文脈をたどろうとすると、それまでとはまったく異なった情景に出くわすのだった。つぎつぎと情景を登場させては退場させてゆく言葉たち。つぎつぎと情景を転換させて爆走してゆく言葉たち。リフレインによって再想起された言葉たち。その肯定と否定の交代は、まるで二人が一人になって踊っているかのようだ。まるで一人が二人になって踊っているかのようだ。文脈を形成しようとする力と、文脈を破壊しようとする力が拮抗しているのだ。詩篇全体の意味を無効とさせてしまうこの手法は、ほくもしばしば採用する方法であるが、金子鉄夫さんの手腕の方がすぐれて現代的だ。生き生きとしているのが、その証左だ。かつて彼であったものや、彼でなかったものが、言葉によって貼り付けられては引き剥がされてゆく、まことに見事なダンスである。つぎつぎと言葉は金子鉄夫さんとなり、つぎつぎと金子鉄夫さんは言葉となる。つぎつぎと言葉を拾っては捨てて、捨てては拾ってゆく金子鉄夫さ

んと、つぎつぎと金子鉄夫さんを拾っては捨てて、捨てては拾ってゆく言葉たち。意味と無意味が連れ立って爆走してゆく、この快感は、すさまじい。きのう書いた「無意味というものもまた意味なのだろうか。」「無意味という意味の意味。」といった言葉は、紫式部の『源氏物語』の「竹河」にあった「無情も情である」（与謝野晶子訳）という言葉から思いついたものであった。それにしても、見事な語の選択と配列である。新たな位置関係は、新たな意味を生じる。新たな位置関係は、新たな意味を生じさせ、文脈はその意味をめぐる自ら議論し、応答し、活力を得て、生き生きとしたものとなるのであった。魂はどんなことをも記憶している。けっして忘れることはない。金子鉄夫さんの言葉は、ぼくが思い出すことのなかった、潜在意識に保存されていた記憶をも思い出させてくれるのであった。ジミーちゃんが元気だったころ、ぼくの詩を読んで感想を口にしてくれ、ぼくがその言葉から、またつぎつぎと詩を紡ぎ出していたころのことを。喧嘩もよくしたし、ののしり合って、手を出しあったこともあった。もう、そんな友だちは二度と持てないかもしれないな。バブル。ダブル。ドリブル。バブル。ダブル。ドリブル。言葉がどんどんぶつかって、記憶にどんどんぶつかってゆく。記憶がどんどんぶつかって、言葉にどんどんぶつかってゆく、金子鉄夫さんのこの詩は、ぼくのちょっと足りないぎみの脳みそも刺激してくれる、ほんもののすごい詩だ。しかし、この詩集を出したあと、金子鉄夫さんは、どんな詩集を出すのだろうか。「独創とはくりかえしからの脱出だ。」（ウォレス・ステイヴンズ『アデーリア』片桐ユズル訳）「内容は形式として生まれてくるほかない」（オスカー・レルケ『詩の冒険』神品芳夫訳）。金子鉄夫さんのつぎの詩集が、どのような文体のものになるのかは想像できないけど、すごい期待している。「芸術は感覚の仕事ではなくて、表現の仕事だ。」（ピエール・ルヴェルディ『私の航海日誌』高橋彦明訳）「偶然の成功を増やしていき、（…）それらの成功を結びつける当人が、それらに心をとめ、大切にすることが必要である。」（ヴァレリー『『パンセ』の一句を主題とする変奏曲』安井源治訳）「芸術は偶然の終るところに始まる。しかし芸術を富ませるのは偶然が芸術にもたらすすべてのものなのだ。」（ピエール・ルヴェルディ『私の航海日誌』高橋彦明訳）。ジミーちゃんちの庭で、日向と木陰のまじった場所にテーブルを置いてもらって、二人で坐ってコーヒーを飲みながら百人一首を読み合ったことがあった。どの歌がいちばん音がきれいかと、選び合って。そのときに選んだ歌のいくつかを、むかし、國文學という雑誌の原稿に書き込んだ記憶がある。「短歌と韻律」という特集号だった。ぼくが北山に住んでいた十年近くむかしの話だ。たくさん恋をした。たくさん傷つけた。たくさん傷つけられた。むかし。あ、「夜になるまえに」は、レイナルド・アレナスだなんて思った。プイグもすごかったけど、アレナスもす

ごかった。おねえ度が、笑。そいえば、プイグに捧げて詩を書いたことがあったなあ。あ、逆か。詩を書いたあとで、プイグに捧げたのか。  
いつか、アレナスにも捧げよう。

**2012年06月13日(水)**

これから、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第14番目に収録されている「ノウ！」を引用する。

廃油に汚れたクビ

のふりをして泣く粒子どもであふれ

うにゆうにゆの中央線

うるさい箱がやっと黙った、そのあとで

なにげない町の穴から

ああふざけたバタフライ

泳ぎ出てくるベイビたちの眉間に

五寸釘ブスッ

また捲られようとする新たな膚にツバ吐き  
もうそんな生臭いカット、おれいらない  
ひゃっひゃっしたノウ！ 燃やして  
おれいらないし、あ、あつ、あ  
(せこい塩に染まりすぎたのさ)  
バラバラに  
あなたはいつもバラバラにしてしまうのねって  
なつかしい凶事の台詞  
その台詞、一文字一文字にザーメンたらして  
眼の裏側で砂を囓む蛇腹のみにくいみにくいとモダチ  
(またおれはおまえを絞め殺しちやいそうだ)  
痒い痒い血イを含んだスモークが背に迫り  
脱がして脱がされた平成のライフの頬を拭った  
ポロ雑巾  
(おまえにそっくりだ)  
をひろげてみれば  
バラバラ、いつもバラバラ  
肛門に突っ込まれたナカユビのダンス・ナンバー  
は鳴り止み  
もう盗まれる骨などこの体のどこにある

せめて朝焼けの方へ勃起したまま終われよ  
燃える燃えるひゃっひゃしたノウ！  
満足ですっ満足ですっ  
って誰に言ってる  
ひとりだろう、ずっとひとりで喋っていたらろう  
燃えて燃えつきてひゃっひゃしたノウ！  
ハイになって  
おれはこの町の澱んだ河川へ散らすだろう  
くずれたビートのジェネレーションの物語  
ひゃっひゃしたノウ！  
交わりはないはずだから笑わない  
バラバラだって、いつもバラバラ  
肘からくずれて死ねよブタっ  
バラバラバラバラ  
おれ、あつ、あ、あ

金子鉄夫さんの言葉は、金子鉄夫さんが結びつけると音楽になるなあ。言葉が音楽となるために、金子鉄夫さんを必要としたのだろう。言葉は新しい音楽となるために、金子鉄夫さんを結びつけたのだろう。言葉は新しい音楽となるために、金子鉄夫さんと結びついたのである。言葉がほくたちの一部になるように、ほくたちは言葉の一部だ。いや、あ。言葉が音楽となるために、金子鉄夫さんを必要としたのだろう。

言葉が新しい音楽となるために、金子鉄夫さんを結びつけたのだろう。言葉が新しい音楽となるために、金子鉄夫さんと結びついたのだろう。言葉がほくたちの一部になるように、ほくたちは言葉の一部になるのだった。いや、言葉がほくたちのすべてになるように、ほくたちは言葉のすべてになるのだった。金子鉄夫さんの詩には、さいしょ面食らったのだが、いまはもう、さいしょに持った違和感はまったくない。むしろ、どれだけ慣れて、同化したのかと考えると、ちと怖い。「だが、慣れることと、気にもとめないことは別物だ。」(アルジス・パドリリス『隠れ家』浅倉久志訳)、もちろん。慣れても慣れても、慣れ切れないところ、この詩篇でいえば、見事な音楽性と目覚ましい比喩の冴えだろうか。金子鉄夫さんの詩篇には、かならずところを捉えるなにかがあるのだ。それにしても、金子鉄夫さんが、美をご自分の詩篇のなかに持ち込まなかったのは正解だったと、はげしく思う。けたたましく思うのだった。なぜなら、なにより、「美は批判力を墮落させる。」(P・D・ジェイムズ『死の味』第三部・4、青木久恵訳)ものだからである。「私らはたえず自分が一度好きになったものにしがみついて、しがみついていることを忠実と考えるけれど、それは怠惰にすぎない。」(ヘッセ『夢の家』岡田朝雄訳)「我々の思考は発展しなければならないし、同時に保存されなければならない。思考は極端なものによってしか前進しないが、存続するのは平均的なものによってである。究極的な秩序は自動性であるが、それは思考の敗北である。究極的な無秩序はさらに迅速に思考を奈落へ導くだろう。」(ヴァレリー『精神の危機』恒川邦夫訳)「事物や存在を支える偶然」(イヴ・ボンヌフォア『詩の行為と場所(抄)』宮川 淳訳)「この世でひとたび掴み得た一つのは、多くのものに匹敵しよう。(リルケ『ドゥイノの悲歌』第七の悲歌、高安国世訳)「考えよ、たえず考えるんだ。いろいろなことを。」(レイ・ブラッドベリ『浅黒い顔、金色の目』一ノ瀬直二訳)「詩は存在を救わねばならぬ、ついで、存在がわれわれを救わねばならぬ。」(イヴ・ボンヌフォア『詩の行為と場所(抄)』宮川 淳訳)「私が自由なのは、私が自由だと感じる時だけである。しかし、私が自由だと感じるのは、私が制約されていると感じるとき、現在の私の状態と対照的な状態を考え始めるときだけである。／自由とは、したがって、一つの対照効果によってのみ、感じられ、認知され、希求されるものだ。」(ヴァレリー『精神の自由』恒川邦夫訳)「自由って、何のための自由？」(バルガス＝リョサ『小犬たち』Ⅲ、鈴木恵子訳)「それならしょっちゅう自問自答してることさ。」(ブライアン・オールティス『子供の消えた惑星』1、深町真理子訳)「用心しないと、自分はこの遊びが気に入ってしまうだろう。」(P・D・ジェイムズ『ナイチンゲールの屍衣』第四章・1、隅田たけ子訳)「どういう意味？」(スティーヴン・バクスター『虚空のリング』下・第五部・30、小

木曾絢子訳)「他人が考え 生みだしたものが／ほしいままにほくらの内部に入りこんで／ほくら自身の思念にひとしくなる」(ホフマンスタール『思念の魔』川村二郎訳)「そこには何か、深い悲しみに似たものがあった。」(シオドア・スタージョン『必要』宮脇孝雄訳)「人生の目的は事物を理解することではない。それは自己の防御体制と平衡を維持し、できるだけよく生きることである。」(ウィリアム・エンブソン『曖昧の七つの型』下・8、岩崎宗治訳)「生きること、生きつづけることであり、幸せに生きることである。」(フランシス・ポンジュ『プロエーム(抄)』Ⅶ、平岡篤頼訳)。

## 2012年06月14日(木)

きょうは、これから近くの公園に行って、金子鉄夫さんの詩集でも読んでみようかな。公園で詩集を読むのは、ひさしぶりだ。

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第15番目に収録されている「注釈・M氏」を引用する。

じゅばりーん、じゅばりーん

触るんじゃねえ

と言われて振り返ったら

刃物を所持した裸体は消えて  
愛せないものだけが泡立って  
今日はいろはにほへとつと  
貧血の鬼が舌なめずりしない日  
右頬には語れない刺青  
ついに呼ばれなかった  
から  
穴へは帰らない  
脱皮した（一体）の尻に咬みついた  
それは、それでこわあい  
「でも、もう生まれちゃったんですよ」  
やっぱり消毒は必須  
遅れてやってきた三丁目のホームセンター  
のまえてレンタルしてきた日の丸をふる  
ママのふりをするひとたち  
（以前は全身、毛でおおわれて）  
ずっと眺めていた  
らしいと  
じゅばりーん、じゅばりーん  
スノップなM氏

首を傾げて踝からコンクリートへ

じゅばりーん、じゅばりーん

そうやって慈しみのことばさえムダになるのさ

金子鉄夫さんの詩篇が持つ音楽性については、何度か触れた。詩句のリフレインによる音の反復。頻出するオノマトペも効果的だ。そして、言葉のもつ音の魅力を最大限に引き出す文節の切断である。前者は古代から詩に用いられてきた手法である。オノマトペは、日本の詩ではよく用いられるが、ぼくの知るところ、外国の詩ではそれほど多く見られない。オノマトペ自体があまり使われることがないためであろう。とくに、西洋言語では、なにを述べているのか明確にするための言語使用が当然のごとく前提とされているためである。日本では、言葉によってあらわすことよりも、言葉によって隠されたことを感じとるように、ぼくたちが、日々、訓練されてきたためであろう、オノマトペはその代表的なものであろう。空気を読めよという文化であった。ぼくは、暗示の文学の代表である俳句も短歌も嫌いではない。とくに俳句は大好きだ。もちろん、短歌も好きで、好きな俳句や短歌を見つけては、ルーズリーフに書き込んでいる。ここ十年ばかり、俳人や歌人の知り合いとのやりとりがぱったりとなくなったので、新しい句や歌が、ぼくのルーズリーフに新しく書き込まれることはなくなったのだけれど。そだ、金子鉄夫さんの詩篇の音楽性について言及しているところだった。羊の話に戻ろう。オノマトペの頻用は、詩を幼くさせる可能性が大きいのだが、金子鉄夫さんの詩篇の場合は、そんなことはぜんぜんなくて、詩篇に緊張と喜びを持ち込んでいる。まことに見事な手腕である。これは、言葉に対する十二分な敬意と愛着をもって、金子哲夫さんが真摯に生きておられるからだと思われる。ところで、文節を切断したり、当然切れるべき文節をわざと繋げたりする手法は、ぼくは、この詩集評で、荒川洋治的だと以前に書いたのだが、ふと思い出してみたのだが、紀元前の詩人であるホラティウスの詩が、すでにその技法を用いていたのだった。紀元前六五に生まれ、紀元前八年に亡くなった古代ローマの詩人である。ウェルギリウスとはほぼ同年代の詩人である。日本の自由詩の歴史は、まだ100年ほどで、金子鉄夫さんが用いているような激しい文節の切断と接続は、たしか、荒川洋治がやり出したのだったかと記憶しているのだが、もしかしたら

間違っているかもしれない。しかし、西脇順三郎も北園克衛も、生真面目に文節の切れ目で詩を改行していた。あんなに激しくぶちぶちにぶつ千切れた詩行を書いていた二人の詩人だったのだけれど。ほくは自分のことを、詩においては古典主義者だと自負しているので、文節を壊して詩行にしたことはなかった。金子鉄夫さんの詩篇に漲る言葉の力の一つが、この文節の破壊にあると、ほくは見た。化学反応における分解エネルギーのようなものだろうか。化学反応においては、結合する際に、熱エネルギーを放出するものがあるのだが、分解する際に、エネルギーを放出するものもあるのだ。もちろん、結合する際に熱エネルギーを吸収する化学反応もあれば、分解する際に熱エネルギーを吸収する化学反応もあるのだが、金子鉄夫さんの詩篇における、詩句の文節切断は、確実に、物質の分解の化学反応が放出する熱エネルギーのように、言葉の持つエネルギーが放出されているように思う。それは、かつて金子鉄夫さんが目にした光でもあり、読み手のほくがかつて見た光でもあり、金子鉄夫さんとほくの二人が共に見たこともなかった光であったりするのだろう。その光の輝きはすさまじく、ほんものの詩だけが持つことのできる光である。音楽の力とは、なんと強烈なのだろう。言葉の持つ音楽の力とは、なんとすさまじいのだろう。そして、その言葉の持つ音楽の力を十二分に発揮できる詩人が、ようやく2012年の日本に、1冊の詩集を引っ提げて、いや、もろ手に持ち上げて現われたのである。金子鉄夫さんがばらまく詩集を、詩篇を、ほくたちは拾い上げなくてはならない。けっして見逃してはならない。ところで、きょうは、金子鉄夫さんの詩の言葉が持つ音楽性については書くつもりなどなかったのだ。きのう読んだ詩篇「ノウ！」の比喩の見事さについて書きはじめる予定だったのだが、きょう読んだ「注釈・M氏」の、そのあまりに巧みな言葉の音楽性にあらためて目を瞠らされて、思わず、金子鉄夫さんの詩の言葉が持つ音楽性について書きはじめてしまったのだ。カモンツ！

ようやく、現代詩においても、天才が現われたのだと思う。音楽家では、ノーナ・リーブズの西寺郷太さんが天才である。そして、芸術のなかで、最高位に位置する音楽に匹敵するほどの高い地位にあるコメディイアの分野で言えば、キングオブコメディの今野浩喜さんが天才だろうか。まだ、だれも金子鉄夫さんが天才だと明言していなかったとしたら、ほくがさいしょに電子データに残る形で書き込んだことになる。だとしたら、ほくにとって、名誉なことだと思う。はてさて、ほくは、きょうは、金子鉄夫さんの詩篇の比喩表現の巧みさについて書くつもりであったと書いていた。きょうは、雲がほとんどない青空で、すっごく天気がよくて、五条大宮の公園でベンチに坐りながら、金子鉄

夫さんの詩集「ちちこわし」の第15番目に収録されている詩篇「注釈・M氏」を読みながら、自分の詩について考えていたのだった。詩についてというより、詩のできなさについて考えていたのだった。ほくは、ことし1作も詩を書いていない。それでも、毎月毎月、文学極道というところにある詩投稿掲示板に、月に2篇の詩を投稿しているのだけれど、ことし投稿しているものはすべて、10年から20年ほどまえに書いたものばかりである。投稿するまえに読み直すのだけれど、あれ、こんなこと書いていたかな、忘れてしもてるなあ、など思ったのだった。まあ、書きまくっていた時期のものだから、書いたこと自体を忘れていたものもあって、そのことには、自分でもびつくりした。まるで忘れるために書いてるんじゃないかなって、ふと思われたのだった。自分のなかになにも残さないために書いてるのかなとか、自分を忘れるために書いてるのかなとも思われたのだった。わかいころのことだけど、ほくがまだ詩を書きはじめた20代の終わりのころのことだけど、ほくが詩に書くことのできるものは、書く対象のものが、書く対象の事柄が、そのときの自分の現在時点とは、ある程度の距離を持ったものに限っていたのだった。いま現在のことが書けるようになったのは、10年から20年ほどまえの疾風怒濤のように詩を書きまくる時期を過ぎてからのことで、ここ10年ほどになってようやく、いま現在のことを詩に書くことができるようになったのだと思うのだけれど、なぜ、わかいころは、ある程度、時間をおかないと、自分がしたことや、されたこと、自分が置かれた状況や、自分に起こった出来事をきちんと把握できなかったのだろうか。ほかのひともそうなのかどうかはわからない。しかし、金子鉄夫さんの詩篇を読むかぎりにおいては、そうではないようだ。金子鉄夫さんは、いま現在の自分の置かれた状況を、自分の身に起こった出来事を巧みな比喻を通して、また比喻を通さずにまっすぐ詩篇のなかにそういつたい現在の状況や出来事を書き込んでいるように思える。ほくにはできなかった。恋人とのことを書いたのも、恋人と別れてからずいぶん経ってからのことだった。どうしてだろう。たしかに、ほくには、自分がころから彼らを受していたとは言えないところがある。どこか自分をも他人のようにして眺める自分がつねにいたのだった。恋人と付き合いながらほくたちのことを、ある物語の断片であるような気持ちで観察している自分が、いつもいたのである。別れたあとで、その恋人と過ごした時間や場所や出来事を、何度も何度も思い出して、さまざまな思いをめぐらすことに熱中するほくのような人間は、ライブにひとを愛することができないのかもしれない。ほくが愛しているのは思い出であって、思い出こそが、ほくの恋愛対象であったのかもしれない。こういうふうに、人間をリアルに愛することができなかったのは、学生時代からのことであつたようだ。学生時代には小説を書いていて、ひとと

の接触もすべてつねに小説の材料として見ていた節がある。自分の体験したことしか小説には書けなかったのだけれど、もちろん、体験したことをそのまま時間的にも比例させて書いていたわけではないし、時間を凝縮させたり拡大させたり、出来事や状況を入れ換えたりして創作していたのだけれど、基本は現実起こったことだった。そのためであろう。詩を書きはじめたころは、自分の思い出しか書けなかった。ほくがさいしょに書いたのは、「高野川」という詩で、ほくが23才くらいのころで、20才の恋人の住んでいる下宿に遊びに行くまえに見た高野川での一瞬の光景を切り取ったものであった。「反射光。」という詩を、ことしの7月に、「夏の思い出。」とともに、文学極道の詩投稿掲示板に投稿する予定だけれど、これらもまた、ほくが学生時代の思い出を詩にしたものであった。書いたのは28才と29才の、詩を書き始めて間もないころ、ほくが、まだユリイカという雑誌の詩の投稿欄に詩を投稿していた時期のことであった。「反射光。」は、現代詩手帖の何月号かは忘れたけど、たぶん、1989年の6月か7月だったような気がする、投稿欄で、佳作だった。選者は、荒川洋治。「夏の思い出。」は、1990年の9月号のユリイカの投稿欄に掲載された。選者は、大岡 信。28才のほくも、29才のほくも、いまのほくとは、もうとっくに他人だけど、もともと、ほくはいつもほくとは他人だったのだ。なんの不思議もない。だれもがほくであることと同じだ。文学にのめり込んだのは、大学院を出てから、作家になろうと思って家を出て自活してからのことである。とくに詩を書きはじめた20代後半からである。それまでのほくは、ほとんどSFやミステリーしか読んでいなかったのだった。純文学というものに触れたのは、20代の終わりからである。自分が勤めている学校の図書館で文学全集を借りまくって読んでいた。文学全集も何種類にもわたって読んだけれど、それが終わると哲学・思想関係の全集を読んだりして、いろいろなものがあることを知った。ここ最近、熱中するものがなくて、ほくの気分も口ウになっていたのだけれど、金子鉄夫さんが、詩集「ちちこわし」を送ってくださって、それを読み出したら、気分がハイになって、こうして言葉を連打するほどにまで元気を取り戻すことができたのだった。詩集をリュックにしまって、さて、立ちあがろうかなと思って腰を浮かせかけたら、2才か3才だろうか、一人の男の子が小枝を手に鳩を追っている姿を目にして、浮かしかけた腰をもう一度、ベンチのうえに押しつけて坐り直して、背中にしよったリュックを横に置いた。男の子の後ろには、その男の子のお母さんらしきひとがいて、その男の子が、段差のあるところに足を踏み入れかけたときに、そっと、その男の子の手に握られた小枝を抜き取って、その男の子の目が見えないところに投げ捨てたのだけれど、するとその男の子が大声で泣き出したのだが、泣きながら、その男の子は道に落ちていた枯れ葉

に近づき、それを手に取り、まるでそれがさきほど取り上げられた小枝かどうか思案しているかのような表情を浮かべて泣きやんで眺めていたのだけれど、一瞬か二瞬のことだった。その男の子はその枯れ葉を自分の目の前の道に捨てて、ふたたび大声で泣き出したのであった。すると、あとからやってきた父親らしきひとが、その男の子の身体を抱き上げて、母親らしきひとといっしょに立ち去っていったのであった。なんでもない光景だけれど、ほくの目は、この光景を、一生、忘れることができないと思った。

言葉遊びをしよう。言葉で遊ぶのか、言葉が遊ぶのか、どちらでもいいのだけれど、ラテン語の成句に、こんなのがあった。「誰をも褒める者は、誰をも褒めず。」ラテン語自体は忘れた。逆もまた真なりではないけれど、逆もまた真のことがある。一時的に真であるというのは、論理的には無効なのだけれど、日常的には、そのへんにごろごろこがっている話ではある。で、逆もまた真であるとする場合があるとすると、「誰をも褒めない者は、誰をも褒めている。」ということになる。さて、つぎの二つの文章を読み比べてみよう。「どれにも意味があるので、どこにも意味がない。」「どこにも意味がないので、どれにも意味がある。」意味のない、美しくもなく、くだらない詩篇が、ほくの意味のない、美しくもない、くだらない日常のさまざまな事柄に光をあてて、ほくの人生を生き生きとしたものにしてくれている理由の一端がうかがえる文章に思えるのだが、どうだろう。きょうは塾で、高3と高2の子に、数学Ⅲの逆関数の微分法の応用問題と、数学Bの位置ベクトルの応用問題を教えていたのだが、塾からの帰り道、こんなことを考えながら歩いていた。ほくに狂ったところがまったくないとしたら、ほくは狂っている。ほくが狂っているとしたら、ほくには狂ったところがまったくない。じっさいには、少し狂ったところがあるので、ほくは狂っていない。ほくは狂っていないので、少し狂ったところがある。おれなんか、ちゃらいですか？ かわいい顔してなに言ってるんや。なんでそんな目で見るとですか？ なんでそんな目で見るとですか？ いったい、どんな目で見るとんだらう。そういえば、付き合った子にはよく言われたな。ほくには、どんな目か、自分ではわからないのだけれど。よくどこ見てるの、とも言われたなあ。ほくには、どこ見てるのか、自分でもわからなかったのだけれど。

2012年06月15日(金)

さて、PC切るか、と思って、メールチェックしたら、大事なメールをいったん削除してしまった。復活させたけど。あれ、なにを書くつもりか忘れてしまった。そうだ、オレンジエキス入りの水を飲んで寝ます。新しい恋人用に買っておいたものだけど、自分でアクエリアス持ってきて飲んでたから、ほくが飲むことに。ほくのこともっと深く知りたいらしい。ほくには深みがないから、より神秘的に思えるんじゃないかな。「あつすけさん、何者なんですか?」「何者でもないよ。ただのハゲオヤジ。きみのことが好きな、ただのハゲオヤジだよ。」「朗読されてるチューブ、お気に入りに入れましたけど、じっさい、もっと男前ですよん。」「えっ。」「ほく、撮ったげましょか。でも、それ見て、おれ、オナニーするかも知れません。」「なんぼでも、したらええやん。オナニーは悪いことちゃうよ。」「こんど動画を撮ってもええですか。」「ええよ。」「なんでも、おれの言うこと、聞いてくれて、おれ、幸せや。」「ありがとう。ほくも幸せやで。」「これはきつと、ほくが、不幸をより強烈に味わうための伏線なのだった。きょうデートした新しい恋人に間違った待ち合わせ場所を教えて、ちょっと待たしてしまっただ。」「放置プレイやと思って、おれ興奮して待つとったんですよ。」「って言われた。ほくの住んでるところの近く、ゲイの待ち合わせが多くて、よくゲイのカップルを見る。西大路五条の角の交差点前。身体を持ち上げて横にしてあげたら、すごく喜んでた。「うわ、すごい。おれ、夢中になりそうや。もっとわがまま言うて、ええですか?」「かまへんで。」「口うつしで、水ください。」「ほくは、はじめて自分の口に含んだ水を新しい恋人の口のなかに落として入れた。そだ、水を飲んで寝なきや。「彼女、いるんですか?」「自分がバイやからって、ひともバイや思うたら、あかんで。まあ、バイ多いけどな。これまで、ほくが付き合った子、みんなバイやったわ。偶然やろうけどね。」「偶然違うやろうけどね。と、そう思うた。偶然であって、偶然ではないということ。矛盾してるけどね。

また、きょうも眠れなかった。睡眠導入剤も、精神安定剤もいっさい効かなくなってる。金子鉄夫さんの詩が、脳みそを刺激しているのだろうね。こんなに覚醒状態がつづくのは、「もうね、あなたね、現実の方が、あなたから逃げていくっていうのよ。」を書いたとき以来はじ

めてだ。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の、あれ、いま気がついたけど、この「ちちこわし」ってタイトル、「父怖し」「父壊し」「父強し」「乳怖し」「乳壊し」「乳強し」の6通りに読めるんやね、あ、詩集「ちちこわし」の第16番目に収録されている「うたかたの日々」を引用する。

脇の下に脱水症状のおとこをひとり

隠して歩いている

路上禁煙地区

(舌をまいた猫ばかり)

今朝も閉めたとおもっていたはずの螺子が

ゆるんでいて

あわてて毛を剃って般若心境を唱えたりした

そのあとで

「うんざりよ、うんざり」

とそう言われたものだから

うたかたの日々ということに馳せ

落書きをするように歩いている

路上禁煙地区

いつかの夜からずっと硬い床を

寝床にしているから何度も

犬死する夢ばかり見て

カラダだけが日々を消化して  
僕自身は遅れてしまう  
なんだかねえ嫌になっちゃったよ  
うたかたの日々  
(清潔すぎるのもおそろしい)  
路上禁煙地区  
ケムリのない地区  
(なのに誰かの口臭でむせてしまつて)  
悪態ばかりつき澁みのない風に  
首筋がムズムズ  
このまま泡のように消えれたら  
そんなのくだらないねえヴィアン  
こめかみに何げない穴あいた六月  
フツと背後に寄り添った  
いつかのおまえに似たものの  
白いプニプニの横腹を押しては  
うたかた、うたかたの日々

この詩篇には、文節の切断がいっさい見られない。音の構造はきわめて滑らかだ。冒頭一行目から13行目までの描写の巧みさには目を瞠らさ

れる。しかも、この詩には意味があり、作者の倦怠感というか、世のなかのくだらなさ、くだらない世のなかに対して、自身も投げやりな感じで処して生きているって様子がありありと目に浮かぶのだけれど、とくに、ヘソのあたりにある、というか、ヘソのネジを締め忘れていたという比喻と般若心経を唱えてその締め忘れたネジを締め直したというくだりには、ほくの好みなのだろうけれど、すごく魅かれた。ふと、A・バーtram・チャンドラーが書いたSF短篇の傑作『左まわりのネジ』を思い出した。ロボットが自分のヘソのところにあるネジを回してみたけれど、なにも起こらずで、ロボットが、ただぼつねんと、自分のヘソにあたるネジを見下ろしていた、という話だったと思うけど、なにも起こらずってところが、ユーモアあるなあと思ったのだった。金子鉄夫さんのこの詩篇は、このほかのところもみな描写が巧みで、この詩人の才能には、いささかの疑いも起こさせない、すばらしい出来栄の詩篇である。十全な詩の才能を持ち合わせておられることがわかる。いったい、いかなる状況によって、この詩人が誕生したのか、ほくにはいっさいわからないのだけれど、ちらと想像するだけでも、ブルブルとふるえてしまうほど、圧倒的な力なのだ。

**2012年06月18日(月)**

やはり、この文体は毒であるのだろうか。毒が効いてきたのだ。この文体がずっとつづけばいいと思えてきたのだ。まあ、「シナプス、脳の中にある経路で、何かを何度も何度も繰り返してやると、道路状態がますます良くなるのさ。」(シオドア・スタージョン『[ウィジェット]と[ワジェット]とボブ』16、若島 正訳) 以前、ほくは金子鉄夫さんのつぎに出される詩集では、詩集「ちちこわし」とは違う文体のものが見てみたいと書いていたのだけれど、いまのほくは、このままずっと、詩集「ちちこわし」と同じ文体のものがつづけばいいと思って

いるのだ。もしも、同じような文体のものであったら、それは知的怠慢であるなどと、偉そうに書いていた自分が恥ずかしい。この詩集「ちちこわし」の、とくにこの詩篇のすばらしい出来栄のせいでもあろうが、この文体のままつけて、この文体のすばらしい詩篇をずっと読ませてほしいと思ったのであった。今回は、これまで読んできた、詩集「ちちこわし」に収録されている詩篇の比喩の巧みさについて考えてみたい。これはたしか、まえに読んだ詩篇「ノウ！」の感想のなかに書き込むつもりであったものである。金子鉄夫さんが書きつけたと同時に、金子鉄夫さんを書きつけたこの言葉たち。金子鉄夫さんが一つに結びつけたと同時に、金子鉄夫さん一つに結びつけたこの言葉たち。金子鉄夫さんが解き放つと同時に、金子鉄夫さんを解き放したこの言葉たち。ぼくのこころの目は、きのうの公園で見かけた、2才か3才の男の子を出現させる。小枝を握りしめたかわいらしいプニプニした小さな手を挙げて鳩に近寄っていく男の子のあぶなかしげな歩き方。鳩はその首をくいくいと不規則にあちらこちらと首を曲げて、まるで壊れたおもちゃのようだ。ぼくのこころの目は、いったん鳩を飛び立たせ、翼を折って地面に叩きつける。男の子が大声で泣き出す。ぼくは、その男の子の手のひらに握られた小枝を取り上げる。瞬時に、ぼくの手の中の小枝は棍棒となって、ずしりと重くなる。棍棒の一方の先は鋭くとがっている。ぼくは棍棒の太い方をぎゅっと握って力を入ると、鋭くとがった方を鳩の軀に突き入れた。鳩の軀は銚に突き刺された魚のように身もだえする。男の子の姿は消え、ぼくのこころの目も公園から消え、通勤電車のなかに戻ってきている。朝の通勤電車のなかで見た光景だったのだ。言葉は現実を複製する。現実  
は言葉を複製する。言葉は苦痛を複製する。苦痛は言葉を複製する。言葉は快楽を複製する。快楽は言葉を複製する。言葉は悲しみを複製する。悲しみは言葉を複製する。言葉は喜びを複製する。喜びは言葉を複製する。複製され、また複製された複製現実、さいしよのオリジナルな現実とは少し異なっている。複製され、また複製された複製苦痛は、さいしよのオリジナルな苦痛とは少し異なっている。複製され、また複製された複製快楽は、さいしよのオリジナルな快楽とは少し異なっている。複製され、また複製された複製悲しみは、さいしよのオリジナルな悲しみとは少し異なっている。複製され、また複製された複製喜びは、さいしよのオリジナルな喜びとは少し異なっている。複製の複製の複製は、さらに複製され、さらにまた複製される。複製されるたびに、さいしよのオリジナルな現実とは違った現実になっていく。さいしよのオリジナルな苦痛とは違った苦痛になっていく。さいしよのオリジナルな快楽とは違った快楽になっていく。さいしよのオリジナルな悲しみとは違った悲しみになっていく。さいしよのオリジナルな喜びとは違った喜びになっていく。ますます違った現実になっ

ていく。ますます違った苦痛になっていく。ますます違った快樂になっていく。ますます違った悲しみになっていく。ますます違った喜びになっていく。脳はつねに複製を繰り返すようにつくられている。絶え間なく繰り返される複製が脳をつくるようになっていく。「一つの現実からもう一つの現実へと」(シオドア・スタージョン『[ウィジェット]と[ワジェット]とボブ』16、若島 正訳)「今までは現実じゃなかった」(K・W・ジーター『グラス・ハンマー』黒丸 尚訳)「別の関連の中へ」(リルケ『ドゥイノの悲歌』第九の悲歌、高安国世訳)「ほんの少し視点を変えるだけで、世界はすっかり変貌するのだ。」(ニコラス・グリフィス『スロー・リバー』7、幹 遙子訳)「意味が新しくなる。」(ポール・ヴァレリー『ムッシュウ・テストと劇場で』清水 徹訳)「そうして言葉が世界をつくるのだ。言葉が現実を構築する。」(イアン・ワトスン『星の書』第四部、細美遙子訳)「現実を変えてしまうのさ。」(K・W・ジーター『グラス・ハンマー』黒丸 尚訳)「それはわたしをどこまで連れ去るのか？」(ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』32、窪田般弥訳)「あらたいへん、ビールを冷やすのを忘れてた。」(イアン・ワトスン『オルガスマシン』第一部、大森 望訳)「人生を楽しむ秘訣は、細部に注意を払うこと。」(シオドア・スタージョン『君微笑めば』大森 望訳)「観察の正確さは思考の正確さに相当する。」(ウォレス・スティヴンズ『アデージア』片桐ユズル訳)「見ることはまったく能動的な——徹底して形成的な——行為なのだ。」(ノヴァーリス『断章と研究 一七九八年』今泉文字子訳)「細部こそが、すべて」(ブライアン・W・オールティス『三つの謎の物語のための略図』深町真理子訳)「魂は物質を通さずにはわれわれの物質的な眼に現われることがない」(サバト『英雄たちと墓』第1部・2、安藤哲行訳)「et parvis sua vis. 小さいものにもそれ自身の力あり。」(『ギリシア・ラテン引用語辞典』)「小さくてつまらないことでも、大きな象徴とおなじように役に立つ。法則が表現される際の象徴がつまらないものであるほど、それだけいっそう強烈な力を帯び、人びとの記憶のなかでそれだけ永続的なものになる。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)「思考はあらゆるものを、利用可能なものに変える。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)「卑猥とさえ思えることも、思考の新しい脈絡(みやくらく)で語られると、輝かしいものとなる。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)「おそらく認識や知などはすべて、比較、相似に帰せられるだろう。」(ノヴァーリス『断章と研究 一七九八年』今泉文字子訳)「語りは比喩でなされるし、人間は比喩そのもので、それ以外のなにものでもない。」(R・A・ラファティ『イースターワインに到着』6、越智道雄訳)「相対的なものに極限はない。」(ポール・ヴァレリー『オリエンテム・ウェルスス』恒川邦夫訳)「われわれ人間は、類似性や対比や関係を見出すことで、自分たちの周囲のものを、自分が経験したことを、自分自身を理解

しようとする。われわれはそれをやめられない。」(コニー・ウィリス『航路』下・第Ⅱ部・承前・34、大森 望訳)「いたるところに類似を読みとろうとする」(ロジェ・カイヨワ『妖精物語からSFへ』第三部・二、三好郁朗訳)「類似が明確であればあるほど、陶醉も一層大きなものとなる。」(ロジェ・カイヨワ『妖精物語からSFへ』第三部・一、三好郁朗訳)「魂には、自己を増大させる比率(ロゴス)がそなわっている。」(『ヘラクレイトス断片』115、廣川洋一訳)「すべてはこのロゴスにしたがって生じている」(『ヘラクレイトス断片』1、廣川洋一訳)「それは精神幾何学である、なんとなれば、宇宙に対するわれわれの比例感を定義するから。」(岡倉覚三『茶の本』第一章、村岡 博訳)「相対的なものに極限はない。」(ポール・ヴァレリー『オリエンテム・ウェルス』恒川邦夫訳)「巧みに世界を縮小することが可能であればあるほど、私たちは一層確実に世界を所有する。」(澁澤龍彦『胡桃(くるみ)の中の世界』)「我々の内部にあるものは、やはりつねに我々の外側にもあるんだ。」(トンマーゾ・ランドルフィ『ころころ』米川良夫訳)「聖テレサが、魚は海に、そして海は魚の中にあると言ったように」(ジョアナ・ラス『フィーメール・マン』第七部・V、友枝康子訳)「抽象的なことを身近な体験に凝縮(ぎようしゆく)することだ。ぼくは自分が理解しようとしていたこと、探し求めていた凝縮を、正確に捉(とら)えようとする。」(ルーディ・ラッカー『ホワイト・ライト』第二部・10、黒丸 尚訳)「本質的に小さなもの。それは芸術家の求めるものよ」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の大聖堂』第二巻、矢野 徹訳)「もっといろいろ見たいだろう?」(ロジャー・ゼラズニイ『ドリームマスター』3、浅倉久志訳)「プーははにかんで小さなおちんちんをつかんだ。」(オーガステン・バロウズ『ハサミを持って突っ走る』青野 聡訳)「こんなに小さいのははじめてだ。」(ジョン・ヴァーレイ『ウィザード』下・40、小野田和子御訳)「そうした幸せは、まさしく小さなものであるからこそ存在しているのだ」(サバト『英雄たちと墓』第Ⅱ部・4、安藤哲行訳)「芸術において当然栄誉に値するものは、何はさておき勇気である。」(バルザック『従妹ベット』二、清水 亮訳)「人間がその死性を免れる道は、笑いと絆を通してでしかない。それら二つの大いなる慰め。」(グレゴリー・ベンフォード『輝く永遠への航海』下・第六部・5、冬川 亘訳)「ハンカチいるか」類猿人が言った。(ロバート・ブロック『ノーク博士の謎の島』大瀧啓裕訳)「ハンカチ貸そうか?」と類猿人は言った。(ロバート・ブロック『ノーク博士の島』伊藤典夫訳)「このハンカチを使えよ、さあ」(ジョン・ベリマン『76 ヘンリーの告白』澤崎順之助訳)「しわくちやのハンカチ。」(ブライアン・W・オールティス『世界Aの報告』第一部・1、大和田 始訳)「宇宙は小さなハンカチでしかなかった。」(ブライアン・W・オールティス『ああ、わが麗しの月

よ!』浅倉久志訳)「なんのための芸術か?」(ホフマンスタール『一人の死者の影が……』川村二郎訳)「作家は文学を破壊するためでなかったらいったい何のために奉仕するんだい?」(コルターサル『石蹴り遊び』その他もろもろの側から・99、土岐恒二訳)「言葉以外の何を使って、嫌悪する世界を消しさり、愛しうる世界を創りだせるというのか?」(フエンテス『脱皮』第三部、内田吉彦訳)「あらゆる表現は対比的なものの中におかれ、自由に結合することが、詩人を無制約なものにする。」(ノヴァーリス『断章と研究 799-1800』[705]、今泉文子訳)「事物を離れて観念はない」(ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ『パターソン』第一巻・巨人の輪郭・1、沢崎順之助訳)「重要なのは経験だ。」(ミシェル・ジュリ『不安定な時間』鈴木 晶訳)「経験は避けるのが困難なものである。」(フィリップ・ホセ・ファーマー『飛翔せよ、遙かなる空へ』上・15、岡部宏之訳)「人生のあらゆる瞬間はかならずなにかを物語っている。」(ジェイムズ・エルロイ『キラー・オン・ザ・ロード』四・16、小林宏明訳)「すべての経験はわたしという存在の一部になるのだから」(ジーン・ウルフ『拷問者の影』11、岡部宏之訳)「新しさというものは、過去の残滓(ざんし)からだけしか組み立てることができないのである。」(J・G・バラード『燃える世界』第二部・8、中村保男訳)「あらゆるものがあらゆるものとともにある」(ホルヘ・ギリエン『ローマの猫』荒井正道訳)「言葉同士がぶつかり、くっつきあう。」(ルーディ・ラッカー『ホワイト・ライト』第四部・22、黒丸 尚訳)「新しい関係のひとつひとつが新しい言葉だ。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)「レサマは「覚えておくんだよ、わたしたちは言葉によってしか救われないってこと。書くんた。」とほくに言った。」(レイナルド・アレナス『夜になるまえに』通りで、安藤哲行訳)「われわれのかかわりを持つものすべてが、すべてわれわれに向かって道を説く。」(エマソン『自然』五、酒本雅之訳)「あらゆるものが、たとえどんなにつまらないものであろうと、あらゆるものへの入口だ。」(マイケル・マーシャル・スミス『ワン・オヴ・アス』第3部・20、嶋田洋一訳)「思考はあらゆるものを、利用可能なものに変える。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)。

きのう、新しい恋人からプレゼントしてもらったウォッカを飲んでいる。2杯目だ。大きなグラスに。ウォッカって、たしか、火の酒と書いたかな。火が、ほくの喉のなかを通る。火が、ほくの喉の道を焼きつくす。喉が、火の道を通ると言ってもよい。まるでダニエル記に出てくる3人の証人のように。その3人の証人たちは、3つの喉だ。喉の道を炎が通り過ぎる。3つの喉が、炎の道を通り過ぎる。ほら、偶

然が、ほくの言葉を火の色に染める。さあ、3人の証人たちよ。火のなかをくぐれ。3つの喉が、炎のなかを通り過ぎる。ジリジリと喉の焼き焦げる音ができる。ジリジリと魂の焼き焦げる音ができる。ジリジリと喉の焼けるにおいがしないか。ジリジリと魂の焼き焦げるにおいはしないか。ジリジリと、ジリジリとしないか、魂は。ほくの喉も焼けてきた。恋人からのプレゼントが、炎の通る道を、ほくの喉のなかに開いてくれた。偶然のつくる火の道だ。魂のジリジリと焼き焦げる味ができる。あまい酒だ。偶然がもたらせた火の道だ。ほらジリジリと魂の焼き焦げるにおいがしないか。My Sweet Baby! Love & Vodka!「運命とは偶然に他ならないのではないか?」(フィリップ・ホセ・ファーマー『飛翔せよ、遙かなる空へ』下・48、岡部宏之訳)「だれもが自分は自由だと思っとるかもしれん。しかし、だれの人生も、たまたま知りあった人たち、たまたま居合わせた場所、たまたまでくわした仕事や趣味で作りあげられていく。」(コードウェイナー・スミス『ノー ストリリア』浅倉久志訳)「すべては同じようにはかなく移ろいやすいものだ。少なくともそのために、束の間のもを普遍化するために書く。たぶん、それは愛。(サバト『英雄たちと墓』第Ⅱ部・四、安藤哲行訳)「ほくにとってこれが人生のすべてだった。」(グレッグ・イーガン『ディアスポラ』第三部・8、山岸 真訳) ウオッカ、あまくて、おいしい酒だ。頬が熱い。汗が噴き出てきた。偶然がもたらせた火の道だ。ジリジリと喉の焼き焦げる味ができる。ジリジリと魂の焼き焦げるにおいがしないか。きょうは、火の酒を飲みながら、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第17番目に収録されている「肝、もえ(くずれる) まちにて」の感想を書いていく。そのまえに、きのうかな、おとついだつたかな、ほくがツイットに書いた詩句を書き込む。金子鉄夫さんの詩篇が、ほくの詩魂を刺激してくれたのだろう。ほくに魂があるならね。

袋に詰められるだけ詰めて同級生、300円だった。買ってきた同級生を射出する。床に落ちてぐったりしている同級生を詰め直す。ちよつとくたびれた同級生を射出する。口から血涎が落ちる同級生は、ほくと同い年だ。はやっ、3回目でぐったりした。つぎの同級生を射出する。袋に詰められるだけ詰めて正方形、300円だった。買ってきた正方形を射出する。床に落ちてぐったりしている正方形を詰め直す。ちよつとくたびれた正方形を射出する。端から角が崩れる正方形は、ほくと同じ図形だ。はやっ、3回目でぐったりした。つぎの正方形を射出する。袋に詰められるだけ詰めて雨粒、300円だった。買ってきた雨粒を射出する。床に落ちてぐったりしている雨粒を詰め直す。ちよつとくたびれた雨粒を射出する。膝から虹がこぼれる雨粒は、ほくと同じ雨粒だ。はやっ、3回目でぐったりした。つぎの雨粒を射出する。

歯を磨いたかどうか忘れることがある。ほくの母はとても薄いので、磨き過ぎると神経が剥き出しになる。朝の4時ごろに電話をかけてくる母を磨いたかどうか忘れることがある。ほくの歯はとても薄いので、磨き過ぎると神経が剥き出しになって、朝の4時に電話をかけてくる。

呼吸ができないと怒られる。ほくにはわからない。呼吸ができないと怒られる。ほくにはわからない。呼吸ができないと怒られる。ほくにはわからない。リフレインはいつだってここちよい。ちょうど500円硬貨と同じ大きさだ。呼吸ができないと怒られる。ほくにはわからない。

ほくは台所にはいない。ほくはベランダにはいない。ほくはトイレにはいない。ほくは玄関にはいない。ほくは部屋にはいない。靴箱のなかにも入っていないし、本棚にも並んでいない。リュックのなかにも入っていないし、PCのなかにも入っていない。ちょうどいい大きさだ。

新しい恋人もほくのこのツイットを見てみたい。見てるとは思わなかった。恥ずかしい。「萌えたの、そこなの？」という言葉が。そのときの表情とともに印象に強く残っている。めっちゃウケた。名前出してへんからいいよ。というのだけれど。ほくにも書けへんことあるわな。と言った。

これからモーニングを食べに西院に。ハサミとセロテープをもって、紙を切り刻んでは、くっつけていく、51才・短髪・ヒゲ・半ズボンのおされなゲイが窓際に坐る日曜日の午前の風景が出現するのだった。どう思われたって平気だからね。どうせ、もともとロクな人間じゃないんだし。

これからコンビニに、高速バス代金を払いに行く。帰ってきたら、ちょっと焼酎でもロックで飲むかな。あ、夕方に新しい恋人が。あんま

り飲みすぎないようにしなきゃね。ラベンダーからバラの匂いの芳香剤に替えた。ほくは嗅覚障害でわからないけれど。ラビアンローゼか。神さま。

むかし、ちょっとのあいだ付き合ったトラックの男の子のこと、思い出してしまった。運動できる、かわいいブタって感じの青年やった。ジャニ系のゲイの子から好かれてて、困っていた。人間って、ぜいたくなんやなあと思った。なんで、そのトラックの男の子とすぐに別れたのか思い出せへんけど。

きょうは、新しい恋人から、ウォッカのプレゼントが。ロシア語で書いてある。読めない、笑。ちょっとロシア語やってたのに。うわっ、もう12時。クスリ飲む。おやすみ、Dちゃん。マラルメの詩集、買い直さなければ。つまらない詩集だけれど、歴史的には意味のあるものだった。ミントチョコのアイス、食べてもらうの、忘れてた。自分のツイット、読み直して気がついた。あほや。ごめん。きょうは、ロッキー・ホラー・ショーやった。こんどは、溺れる魚を。4列はきついか。たぶん、ほくの隣のひとが圧迫感を感じると思う。ほくは瞑想しとくわ。

お風呂に入った。ぬるめにした。眠れなくなるから。金子鉄夫さんの詩集を読んでの感想文のつづきは、あしたに。まだ引用のピースを貼り合わせていないものがあって、その作業をして寝る。Dちゃんと源氏物語の話をしてから駐車場で見送った。どの表情もかわいかったなあ。再会して間もないけど、じょじょにのめり込んでいくタイプのほくだから、自分でもどうなるのか、わからない。だから人生は、おもしろいかな。おもしろいものは、わからない。わからないから、おもしろい。わかるけれど、おもしろくない人生なんて、ぞっとするなあ。

ウォッカ4杯目。つぎに、金子鉄夫さんの詩篇「肝、もえ（くずれる）まちにて」を引用する。

よおつよおつばかみてえじゃん  
おればかみてえじゃん  
肝、もえ（くずれる）まちにてである  
やすい豆ばかりくって  
廃材のひょうじょうで  
くすんでいるくすんでいる  
（ふるいたマシい）  
おれであるである  
（みえているのかいつ）  
まーまっまーまっ  
とおいなんておもってしまったが  
けっくけっく  
おればかみてえじゃん  
よおつよおつくだらねえじゃん  
そんなはだあれてしまう  
（めはとじたまま）  
皺をなぞりながら  
じゅうなんねんもしゃべりつづけていたら  
（みいもふたもねえ）  
あしくびさえもうしなって

肝、もえ（くずれる）まちにてである

まーまっまーまっ

「ひ」のかたちで曲がる

電柱のしたには

肉のうすいうすい昨日の引喻が

くさってくさっていてさ

（今晚の趣味のわるい着）

奥歯のないこの町の

にごったさむい空をとぶ

ななしのかかしのともだち

しにたいってしにたいって

いってるうちに溶けてしまうぜ

（どうせイクんだらうって）

けっくけっく

おればかみてえじゃん

よおつよおつくだらねえじゃん

（そぐわないふるいタマシい）

くるしいねえくるしいねえ

何がくるしいって

歌舞いた素手が

まだなま温かいつてこと  
ことつ  
(きつときもちいい表現をわすれていない)  
まーまっまーまっつて  
この町にはつかむところがなさすぎるのさ  
だから怪獣柄のビキニ  
で落ちちゃうひとだっている  
まーまっまーまっつて  
ナメクジのような修辞  
ばかり食わされすぎて痒くなっちゃうよ  
(かゆいっかゆいっかゆいっつらいっ)  
けっくけっく  
おればかみてえじゃん  
よおつよおつくだらねえじゃん  
のびすぎた顎ヒゲをなびかす  
くさい風さえ演じる町さ  
やむやむやみにくびしめられて  
こんやもねむれない  
肝、もえ（くずれる）まちにてである  
まーまっまーまっ！

もう冷めきってしまった  
あなたのベ口のうえにかえりたい  
なんておもってしまう  
(ふるいタマシい)  
おれである  
よおつよおつて

意味のない言葉の連呼。美しくもない言葉の連呼。くだらない言葉の連呼。ここまで読んできた、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」のなかで、ほくは、あらゆる意味のない言葉と出合ってきたような気がする。あらゆる美しくもない言葉と出合ってきたような気がする。あらゆるくだらない言葉と出合ってきたような気がする。しかし、この詩篇は、これまでほくが感想を書いてきたどの詩篇よりも、意味がなく、美しくもなく、くだらない詩篇だった。まことにすばらしい出来のくだらない詩篇であった。タイトル・ポエムの「ちちこわし」と同様に、金子鉄夫さんの詩篇では長い方に部類する5ページにわたる長さの作品だ。よくもまあ、この長さにわたって、こんなに、意味のない、美しくもない、くだらない言葉をつらつらと書き並べられたものだなって思った。凡庸な詩人は、つい意味のあることを書いてしまう。凡庸な詩人は、つい美しくしてしまうのだ。うっかり意味のある詩句を書きつけてしまうのだ。うっかり詩行に美を潜ませてしまうのだ。金子鉄夫さんの詩篇は、意味を拒絶し、美を拒絶してるのだ。だからこそ、その詩篇は、キングオブコメディのコントのような破壊的な癒しの力を持つことができたのだ。破壊的な癒しの力を持った詩篇である。じつにくだらない詩篇なのだ。そのくだらないところに、ほくたちの魂は癒されるのだ。意味のない、美しくもない、くだらないほくたちの人生に光があたるのだ。「(そぐわないうふるいタマシい)」「みいもふたもねえ」「くるしいねえくるしいねえ」「人間であることは、たいへんむずかしい」(サルトル『嘔吐』白井浩司訳)「人間であることはじつに困難だよ、」(マルロー『希望』第二編・第一部・7、小松 清訳)「もしかすると、きみがこうしていることが、この

宇宙に実質と生命力を与えているのかもしれない。ことによると、きみが(、、、)宇宙なのかもしれない。」(バリー・N・マルツバーグ『ローマという名の島宇宙』10、浅倉久志訳)「困難なことが魅力的なのは」とチョークは言った。「それが世界の意味をがらりと変えてしまうからだよ」(ロバート・シルヴァーバーグ『いばらの旅路』1、三田村 裕訳)「きみの苦しみが宇宙に目的を与えているのかもしれないよ」(バリー・N・マルツバーグ『ローマという名の島宇宙』10、浅倉久志訳)。「おればかみてえじゃん」「よおつよおつくだらねえじゃん」「やむやむやみにくびしめられて／こんやもねむれない／肝、もえ(くずれる) まちにてである」「心のなかに起っているものをめったに知ることはできない」(ノーマン・メイラー『鹿の園』第三部・10、山西英一訳)「ある場所、ある時間、ある不思議な類似性、ある錯誤、なんらかの偶然を介して、最も異質なもの同士が遭遇する。」(ノヴァーリス『断章と研究 1799-1800』[559]、今泉文子訳)「あなたの潜在意識よ、ミューシャ! なにかの記憶だったのよ!」(ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア『最後の午後に』浅倉久志訳)「すべての真の詩、すべての真の芸術の起源は無意識にある。」(コリン・ウィルソン『ユング』4、安田一郎訳)「詩というのは」(J・L・ボルヘス『月』鼓 直訳)「無意識世界の無意識の象徴だ」(J・G・バラード『地球帰還の問題』永井 淳訳)「隠れている背後の自己のほうがもっと驚かす」(エミリー・ディキンソン『作品六七〇番』新倉俊一訳)「驚きあってこそその人生ではないか。」(デイヴィッド・布林『スタータイド・ライジング』上・第三部・32、酒井昭伸訳)「きみの中で眠っていたもの、潜んでいたものすべてが現われるのだよ。」(フィリップ・K・ディック『銀河の壺直し』5、汀 一弘訳)「意識的に受け入れたわけでもないつながりを、自分自身の中にもってるからなのよ」(フエンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳)「芸術は意識と無意識の結婚なのだ。」(ジャン・コクトー『ライターズ・アット・ワーク』より、村岡和子訳)「ああ、意味と無意味が入り混じっている!」(シェイクスピア『リア王』第四幕・第六場、野島秀勝訳)「このすべてに、どんな意味があるのだろうか?」(フィリップ・ホセ・ファーマー『飛翔せよ、遙かなる空へ』下・47、岡部宏之訳)「言葉よ。意味はないわ。」(K・W・ジーター『グラス・ハンマー』黒丸 尚訳)「あらゆるものに意味があったのではないかな?」(A・バートラム・チャンドラー『左まわりのネジ』乗越和義訳)「意味?」(マイケル・ムアコック『北京交点』6、野口幸夫訳)「どこにも意味なんてありはしない。」(ジョージ・R・R・マーティン『ストーン・シティ』安田 均訳)「意味などない。実際、意味がないからこそいいのだ。」(マイケル・マーシャル・スミス『ワン・オヴ・アス』第3部・18、嶋田洋一訳)「無意味なものに意味をもたせてなんになる?」(オースン・スコット・カード『ゼノサイド』下・15、田中一江訳)

「意味がないところになぜ意味を求めるのだ？」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の大聖堂』第一巻、矢野 徹訳)「きみは韻をふんでいる。言葉が韻をふむというのがどういうことかわかっているかい？」(トマス・M・ディッシュ『M・D』上・第一部・12、村岡剛史訳)「韻律とは何か？」(ディラン・トマス『黄昏の明かりに祭壇のごとく』Ⅳ、松田幸雄訳)「なんの意味もなさないのは、そこになんの意味もないからだ。」(ジョージ・アレック・エフィンジャー『重力が衰えるとき』6、浅倉久志訳)「人生なんて何があったところでジョークではないのさ。」(ルーシャス・シェパード『戦時生活』第二部・6、小川 隆訳)「コーヒーのことを、すっかり忘れていた。」(クリフォード・D・シマック『中継ステーション』19、船戸牧子訳)「もっとコーヒーを飲むかい？」(フィリップ・K・ディック&ロジャー・ゼラズニイ『怒りの神』17、仁賀克雄訳)「何もかも馬鹿げたことさ。」(ミラン・クンデラ『シンポジウム』第一幕、千野栄一訳)。「もう冷めきってしまった／あなたのベ口のうえにかえりたい／なんておもってしまう／(ふるいたましい)／おれである／よおつよおつて」。

## 2012年06月19日(火)

きょうも、ウォッカを飲みながら、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている詩の感想を書く。きょうは、詩集の第18番目に収録されている「ズブズブっ、ズっ」の感想を書く。まず、詩篇を引用していく。

過ぎ去った動脈のうるさい空だ

今朝も可燃のいきものを  
辱めでじゆるじゆるになった川へ流して  
不燃のいきものを拾って帰ってきたら  
変化しないボーダーラインばかり眺めてくるしいのに  
J子、おまえはひとの形ばかりで営みを燃やしている  
から気がつかない  
だからおれは  
爪痕、生々しい文化の前歯をヘシ折って  
破る  
破りつくすフィルム  
(これで幸せだろうね)  
もう誰の名も呼びはしない  
ちがう血いを浴びて  
やみやみにやみれてズブズブっ、ズっ  
(ゲロにゲロれて)  
ズブズブっ、ズっ  
(クソにクソれて)  
砂嚙んで幸せだねっ  
幸せだねっなんて口走ってしまおう  
悪い土で拵えた記号

だらけのこの二〇六号室で  
生まれなかったこどもたちの  
本日も耐えられない密度の絶唱  
いつでもこういう笑い方をしてしまうおれは  
J子、おまえの肌をいちまい剥がして  
騒ぐ、赤い森のなかで  
ふたたび溺死してしまうだろう  
暖かさなんて求めるなって  
消えてゆく、その最後尾で  
骨折ってハードでポップな遺体たちは  
おまえとおれの口癖でスウィングして  
ズブズブっ、ズっ、ズブズブっ、ズっ  
帰るところもない  
それもひとつのイキ方  
そうやってお互いに眼球をなくしてうたうのは  
ズブズブっ、ズっ、ズブズブっ、ズっ  
J子、これもやぶれにやぶれたおれたちのラブ・ソング  
だったりもしたのだろうか  
(ほらほら、またくさい皮を被って演じる時間ですよ)  
ズブズブっ、ズっ、ズブズブっ、ズっ

2杯目のウォッカもロックでいただきやつ。Dちゃん、ありがとね。ウォッカ、めっちゃおいしい。まえに、金子鉄夫さんの詩句の音楽性について述べた。そのときも文節を切断してたけれど、この詩篇「ズズズっ、ズっ」も文節を切断している。うまく切断してある。この詩篇も、この詩篇以前の、ほくが感想を書いたときの詩篇も、もしも言葉に意味がなければ、音楽そのものになっているのではないかと思われた。それくらい音楽的なのだ。文節の切断と同様に、金子鉄夫さんの特徴が出ているオノマトベだが、この詩篇に繰り返し現われるオノマトベも、全角のカタカナに、撥音便の小さなひらがな「っ」がくっついた「ズズズっ、ズっ」というのは、とくによい出来のものであると思った。これが連呼される「ズズズっ、ズっ、ズズズっ、ズっ」という箇所では鳥肌が立った。こういったオノマトベは、詩篇を幼い印象のものにさせる危険もあるのだが、金子鉄夫さんはそれを見事に回避しているように思われる。音楽性については、ここまでにしておこう。きょうは、この「ズズズっ、ズっ」という詩篇に至るまで出てこなかったと思われる固有名詞について書きたい。この「ズズズっ、ズっ」という詩篇においてはじめて固有名詞が現われたように思うのだけれど、記憶違いだろうか。「J子」という、たとえ略称だとしても、個人名が出てきたことには、意外な気がしたのである。「二〇六号室」という部屋番号も関係しているのだろうか。「J子」といっしょに過ごされた部屋の番号だろうか。ここで、じっさいに、金子鉄夫さんの住所を確認したりはしないところが、ほくの趣味のよさ、笑。Dちゃん。「J子」さんて、「じゅん子」さんだよ。え。「じゃん子」さんでもなく、「じえん子」さんでもなく、「じおん子」さんでもないよね、きっと。ああ、「名前は何かいったっけ？」(フィリップ・ホセ・ファーマー『わが夢のリバーポート』6、岡部宏之訳)「なんて名前だったっけ？」(テリー・ピッスン『赤い惑星への航海』第一部・1、中村 融訳)「名前なんかどうでもいい」(シオドア・スタージョン『コスミック・レイブ』6、鈴木 晶訳)「名前なんてのは、忘れられるものだ。」(ニールス・スティーヴンソン『スノウ・クラッシュ』上・23、日暮雅通訳)「間違った名前と呼ばれるのを聞いた」(ガルシア＝マルケス『族長の秋』鼓 直訳)「名前はなかった。」(フィリップ・ホセ・ファーマー『デイワールド』35、大西 憲訳)「なぜ名前をもっていなくちゃいけないと思うのだね？」(ダグラス・アダムズ『宇宙の果てのレストラン』29、風見 潤訳)「名前は忘れてしまったけれど」(ガルシア＝マルケス『族長の秋』鼓 直訳)「名前のない体験のなり止 (や)

まぬのはなぜだらう」(伊東静雄『田舎道』)「その名が何を意味するか」(トマス・アクィナス『神学大全』第一部・第二問・第二項、山田晶訳)「名前っていったい何なのか?」(シェイクスピア『ロミオとジュリエット』第二幕・第二場、平井正穂訳)「無意味、無意味、無意味、」(リチャード・マシスン『縮みゆく人間』10、吉田誠一訳)「過去もその記憶も、すべてが変わっていくのである。」(J・G・バラード『過去の扉を開けて』木原善彦訳)「いくつもの名前が」(レイ・ブラッドベリ『浅黒い顔、金色の目』一ノ瀬直二訳)「顔になる。」(アーサー・ポージズ『ビーグルの鼻』吉田誠一訳)「花は愛だったのに……」(J・ティプトリー・ジュニア『故郷へ歩いた男』伊藤典夫訳)「花から花へ」(テニスン『イン・メモリアム』22、入江直祐訳)「人間の約束」(フィリス・ゴットリーブ『オー・マスター・キャリバン!』9、藤井かよ訳)「それは夢で」(ストルガツキー兄弟『神様はつらい』4、太田多耕訳)「花はなかったし」(紫式部『源氏物語』東屋、与謝野晶子訳)「いい言葉だけど、真実を表してはいないわね。」(P・D・ジェイムズ『神学校の死』第三部・2、青木久恵訳)「幾百もの顔。」(ウィリアム・ギブスン『ニューロマンサー』第一部・2、黒丸 尚訳)「恋愛なんて取るに足らない行為ですよ。際限なく繰り返すことができますからね。」(アルフレッド・ジャリ『超男性』1、澁澤龍彦訳)「無数の名前」(イタロ・カルヴィーノ『見えない都市』1 都市と記号1、米川良夫訳)「風景はなぜ立止つてくれないのだらう。」(金子光春『わが生に与ふ』四)「枝にかへらぬ花々よ。」(金子光春『わが生に与ふ』二)「濡れた黒い枝の先の花びらなどなし」(ジャック・ウォマック『ヒーザーン』7、黒丸 尚訳)。「ところで、きみの名前は?」(トマス・M・ティッシュ『話にならない男』若島 正訳)「ぼくの名前は?」(ジョン・T・スラテック『西暦一九三七年!』乗越和義訳)「きみの名前だよ。」(J・ティプトリー・ジュニア『ハドソン・ベイ毛布よ永遠に』伊藤典夫訳)「きみの名前は?」(J・G・バラード『終着の浜辺』遅れた救出、伊藤典夫訳)「きみの名前は?」(ジャック・リッチー『貯金箱の殺人』田村義進訳)「きみの名前は?」(ハリイ・ハリスン『ステンレス・スチール・ラットの復讐』11、那岐 大訳)「きみの名前は?」(コニー・ウィリス『リメイク』大森 望訳)「きみの名前は?」(コードウェイナー・スミス『ナンシー』伊藤典夫訳)「きみの名前は?」(ノーマン・スピラッド『星々からの歌』クリア・ブルー・ルー、宇佐川晶子訳)「きみの名前は?」(アルジス・バドリス『隠れ家』浅倉久志訳)「きみの名前は?」(エリック・F・ラッセル『ディア・デビル』伊藤 哲訳)「きみの名前は?」(ジョン・ボイド『エデンの授粉者』13、巻 正平訳)「きみの名前は?」(ニールス・スティーヴンソン『スノウ・クラッシュ』下・41、日暮雅通訳)「きみの名前は?」(R・A・ラファティ『とどろき平』浅倉久志訳)「きみの名前は?」(R・A・ラファティ『つぎの岩につづく』浅倉久志訳)。

ところで、金子鉄夫さんの詩が、なぜ、こうも、ほくのところに響くのか、何度も考えたのだけれど、いちばん妥当な理由は、つぎの二つの引用にある言葉が代弁してくれてるように思ったのだけれど、どうだろうか。「我々は自分に欠けているものを愛するとプラトンは言った。」(ジョアナ・ラス『フィーメール・マン』第七部・II、友枝康子訳)「人間の精神活動をいきいきとしたものに行っているのは、じつは“自己投影” そのものにほかならなかったのである。」(山田正紀『チョウたちの時間』4)。この二つの引用にある言葉に、ほくには思い当たる節があるのだ。つまり、金子鉄夫さんの感覚が、ほく感覚と遠くて近いような気がするのだ。それも、きわめて遠く、きわめて近いような気がするのだ。とりわけ、音の感覚である。詩篇における音楽性の獲得の仕方が、ほく感覚からくる仕方がきわめて遠くて、きわめて近い感じがするのだ。『音が耳を創りだす。』(マックス・コメル『拒否された「あとがき」』川村二郎訳)という言葉がある。金子鉄夫さんの耳がどのようなものを聴き、金子鉄夫さんの目がどのようなものを見てきたのか、読んできたのか、たいへん興味がある。「解読するとは生み出すこと」(コルターサル『石蹴り遊び』その他もろもろの側から・71、土岐恒二訳)という言葉がある。この言葉が置かれた文脈から切り離して考える。金子鉄夫さんの詩篇の解読が金子鉄夫さんの詩篇を生み出す、ではなくて、ほくが金子鉄夫さんの詩篇を解読することによって、ほくを生み出す、というふうな。そう考えると、ほくがいま非常に生産的な状態になっていることの説明がつく。しかし、ここまで集中して読まれた詩集は、D・H・ロレンスの全詩集を、1、2年前に夢中で読まれたとき以来のことであった。ディラン・トマスがお好きなことは、ツイットで答えてくださったのだが、ほかには、どのようなものを本棚に並べてらっしゃるのか、ものすごく知りたいところである。20代後半のほくの本棚は貧しかった。

「新しいものはいい」(ジェローム・ビクスビー『日々是好日』矢野浩三郎訳)「新しい顔、新しい声に」(キャサリン・マクレイン『接触汚染』斎藤伯好訳)「花から花へ」(テニスン『イン・メモリアム』22、入江直祐訳)「あの日があらゆる日々のなかにあつて」(エミリー・ディキンソン『作品六五九番』岡 隆夫訳)「花はみんな約束を果たす。」(ナンシー・クレス『ベガーズ・イン・スペイン』2、金子 司訳)。

## 2012年06月21日(木)

「言葉、言葉、言葉。」(シェイクスピア『ハムレット』第二幕・第二場、野島秀勝訳)「言葉にならなかった何かを言おうとして、」(アストウリアス『グアテマラ伝説集』春嵐の妖術師たち 3、牛島信明訳)「言葉、言葉と思っている彼の前に、バスが止まった。」(リチャード・マシスン『狂った部屋』小鷹信光訳)「バスが停まっても誰も乗らない。」(アゴタ・クリストフ『昨日』堀 茂樹訳)「たぐいなく美しい一輪の花が、おだやかな波にゆられて、輝きながら漂ってきた。」(ノヴァーリス『青い花』第一部・第九章、青山隆夫訳)「水が水と出会うように、」(エマソン『償い』酒本雅之訳)「言葉と水が混じり合う」(ティラン・トマス『ほくがノックシ』松田幸雄訳)「波はあなたの足を濡らした。」(レイナルド・アレナス『めくるめく世界』9、鼓 直・杉山 晃訳)「きれいな花ね。なんというの?」(ジョン・ウィングダム『野の花』大西尹明訳)「魚さ。」(ギブスン&スターリング『ディファレンス・エンジン』上・第二の反復、黒丸 尚訳)「何という名前だったかな、」(ナボコフ『賜物』第5章、沼野充義訳)「水の中に答えはない。」(ロジャー・セラズニイ『ユニコーンの徴(しるし)』10、岡部宏之訳)「その水は、ちらちらと見える魚の住むひとつの夢であり、」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第三巻、矢野 徹訳)「夢自体、影にすぎない。」(シェイクスピア『ハムレット』第二幕・第二場、野島秀勝訳)「でも」(ゴンブローヴィッチ『フェルティドウルケ』1、米川和夫訳)「この夢から醒めることは、またこの夢のなかにとびこむことだ、」(シオドア・スタージョン『コスミック・レイプ』19、鈴木 晶訳)「われわれ人間は夢と同じもので作られている。」(シェイクスピア『テンペスト』第四幕・第一場、伊東杏里訳)「ほくはなにを見つけられると思っていたのだろうか?」(グレッグ・イーガン『ワンの絨毯』山岸 真訳)「幾千匹もの魚たち、」(J・G・バラード『夢幻会社』21、増田まもる訳)「夢に、さまざまな声にひきよせられたのだ。」(ルーシャス・シェパード『戦時生活』第四部・13、小川 隆訳)「だがそのすべてが贗物でありうるのだ。」(ジョン・スラデック『使徒たち——経営の冒険』野口幸夫訳)「書き止めておいた、メモの切れっぱしが見つかった。」(ガルシア=マルケス『族長の秋』鼓 直訳)「これは詩になるな」(ウィル・ワーシントン『プレニチュード』井上一夫訳)「あはん。」(ポール・アンダースン『タウ・ゼロ』11、浅倉久志訳)「軟弱ねえ。」(ジョン・ヴァーリイ『ミレニアム』15、風見 潤訳)「引用?」(ジョセフィン・

テイ『時の娘』3、小泉喜美子訳「もちろんさ。」(アイザック・アシモフ『ミクロの決死圏』5、高橋泰邦訳「引用しただけさ。」(アイザック・アシモフ『信念』伊藤典夫訳「すでにあるものを並べなおす」(グレッグ・イーガン『ブランク・ダイブ』山岸 真訳「それだけだよ。」(ゼナ・ヘンダースン『血は異ならず』月のシャドウ、宇佐川晶子訳「それでも、それは美しい。そうではないか?」(ポール・プロイス『破局のシンメトリー』一年後、小川 黎訳「数えきれない詩を書いているんだよ。」(フィッツ＝ジェイムズ・オブライエン『手から口へ』大瀧啓裕訳「じゃあんたは現代詩のことはよく知ってるんだ!」(ティム・パワーズ『アマビスの門』上・第四章、大伴墨人訳「あの雲をごらんよ」(ステイーヴン・バクスター『虚空のリング』上・第一部・4、小木曾絢子訳「雲が動いているのを見て」(プイグ『赤い唇』第九回、野谷文昭訳「あの白いフワフワしたやつかね?」(クリフォード・D・シマック『宇宙からの訪問者』40、峰岸 久訳「目を離したら、雲の様子を正確に形容できない」(ジャック・ウォマック『ヒーザン』2、黒丸 尚訳「一片一片が瞬間ごとにおのおのべつの動きをする。」(モンテニュー『エッセー』第Ⅱ巻・第1章、荒木昭太郎訳「一瞬一瞬をさまざまな消息を経ながら新たに生きている。」(トマス・M・ディッシュ『歌の翼に』16、友枝康子訳「おのおのの瞬間は、それにつづく他の瞬間を導くためののみ、あらわれる。」(サルトル『嘔吐』白井浩司訳「一つ一つの動きが次の動きにつながっていく。」(ロジャー・セラズニイ『ユニコーンの徴(しるし)』3、岡部宏之訳「その動作それ自体が詩であり」(ブライアン・W・オールディス『中国的世界観』12、増田まもる訳「あらゆる動きが永劫を暗示している。」(ボブ・ショウ『メテューサの子ら』14、菊地秀行訳「雲がむくむくと形を変え、」(P・D・ジェイムズ『わが職業は死』第三部・1、青木久恵訳「意味が新しくなる。」(ポール・ヴァレリー『ムッシュウ・テストと劇場で』清水 徹訳「空はまた奥深くなり、ひろびろと視線をあそばせてくれる。」(ホリア・アラーマ『アイクサよ永遠なれ』17、住谷春也訳「よくいうことをきく雲のようであった。」(シオドア・スタージョン『神々の相克』村上実子訳「どんなに美しい風景でも、しばらくすると飽きてしまうからだ。」(ジョージ・R・R・マーティン『フィーバードリーム』5、増田まもる訳「その白さにどんな白さをくわえられようか」(エズラ・パウンド『詩篇』第七十四篇、新倉俊一訳「更に多くの「空白」?」(ジェイムズ・メリル『ページェントの台本』上・&、志村正雄訳「その言葉そのものに?」(サミュエル・R・ティレーニイ『バベル-17』第一部・2、岡部宏之訳「言葉はすべてに違う意味合いをもちこむ」(J・G・バラード『ハイ・ライズ』13、村上博基訳「思いもしなかったような意味になって出てくることもある」(シオドア・スタージョン『[ウィジェット]と[Wジェット]とボフ』9、若島 正訳「なぜ「き

みを愛している」といえなかったのか？」(リチャード・コールダー『アルーア』浅倉久志訳)「愛ならば、すんなりと受け入れてしまうわ。本当の愛にはお芝居が付きものだし、そのお芝居を別のものに変えてしまうものよ。」(チャールズ・ポーモン『レディに捧げる歌』矢野浩三郎訳)「顔、顔、顔。」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第二巻、矢野 徹訳)「記憶の記憶の記憶。」(オースン・スコット・カード『神の熱い眠り』2、大森 望訳)「知恵は影の影にすぎない」(エズラ・パウンド『詩篇』第四十七篇、新倉俊一訳)「空には雲一つない。」(クリフォード・D・シマック『宇宙からの訪問者』11、峰岸 久訳)「水に変化する——。」(ウィリアム・バロウズ『ノヴァ急報』では、身支度を……、諏訪 優訳)「水とは生まれてきた魂でなくて何か？」(イェイツ『クール荘園とバリリー、一九三一年』高松雄一訳)「眠ることのない潜在意識が、」(アーサー・C・クラーク『犬の星』南山 宏訳)「世界中のあらゆる記憶が宿っているのだ。」(ロア=バストス『汝、人の子よ』VII・7、吉田秀太郎訳)「自分の記憶だけではなく、あらゆる人々の記憶が。」(マイケル・マーシャル・スミス『スペアーズ』第二部・13、嶋田洋一訳)「水を愛し、」(紫 式部『源氏物語』蜻蛉、与謝野晶子訳)「水へはいつてしまった人は」(紫 式部『源氏物語』蜻蛉、与謝野晶子訳)「すべて」(ジョン・スラデック『使徒たち——経営の冒険』野口幸夫訳)「溺れる」(パメラ・ゾリーン『心のオランダ』野口幸夫訳)「人がよく死ぬ水だ」(紫 式部『源氏物語』浮舟、与謝野晶子訳)「同じ水だけれど、」(フェリスベルト・エルナンテス『水に浮かんだ家』平田 渡訳)「この考える水も永劫には流れない」(西脇順三郎『旅人かえらず』)「魚はみんないなくなっていた。」(アルフレッド・ベスター『コンピューター・コネクション』3、野口幸夫訳)「同じ夢を見ていたのだろうか？」(イタロ・ズヴェーヴォ『トリエステの謝肉祭』8、堤 泰徳訳)「ちひさき魚は眼(め)にもとまらず。」(萩原朔太郎『広瀬川』)「その詩なら知っている」(P・D・ジェイムズ『黒い塔』3・2、小泉喜美子訳)「引用さ」(ゼナ・ヘンダースン『血は異ならず』知らずして御使(みつか)いを舍(やど)したり、宇佐川晶子訳)「すべて本から仕入れたものさ。」(P・D・ジェイムズ『不自然な死体』第二部・1、青木久恵訳)「思考はあらゆるものを、利用可能なものに変える。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)「どのような自我の排出が行なわれ、そしてどのような自我の再充填が行なわれているのか。」(ロバート・シルヴァーバーグ『一人の中の二人』7、中村保男訳)「これまでに、こんなものを見たことがあるかい？」(サミュエル・R・ディレイニー『エンパイア・スター』12、岡部宏之訳)「自分のものではないとわかっている多くの記憶のこま切れた。」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の大聖堂』第三巻、矢野 徹訳)「文学作品からの引用が」(ジョン・スラデック『書評欄』越智道雄訳)

「それは一つの純粹な詩なのだ。」(ロバート・シルヴァーバーグ『内死』1、中村保男・大谷豪見訳)「経験や行為は場面や戦慄となって表現されるのである。」(オリバー・サックス『妻を帽子とましがえた男』第三部・15、高見幸郎・金沢泰子訳)「詩人というものは、」(シェリー『鎖を解かれたプロメテウス』序文、石川重俊訳)「創造者であるとともに被創造物でもある。」(ブライアン・W・オールティス『讚美歌百番』浅倉久志訳)「詩人は詩による創造であり、詩は詩人による創造である。」(オクタビオ・パス『弓と豎琴』詩的啓示・インスピレーション、牛島信明訳)「なぜこんなものを選んだのだろう。」(キム・ニューマン『ドラキュラ紀元』38、梶元靖子訳)「己の内で叫びたてるものには声を与えてやらねばならぬ。」(タニス・リー『彼女は三(死の女神)』安野 玲訳)「たとえ些細(ささい)なことでも人にはそれぞれもって生まれた使命がある。もし、それをなし遂げることができなければ、人生を無為に過ごしたことになる。」(ベルナール・ウェルベル『蟻の革命』第3部、永田千奈訳)「人間は、自分の才能(ちから)を生かせる場所に行くしかない。」(オースン・スコット・カード『神の熱い眠り』3、大森 望訳)「ほかになにがあると思っているんだい？」(ブライアン・オールティス『子供の消えた惑星』2、深町真理子訳)「ぼくらは夢と同じ生地で織られている」(ホフマンスタール『三韻詩(テルツイーネ)』川村二郎訳)「溺れる人間が立てる音はどのようなものか？」(パメラ・ゾリーン『心のオランダ』野口幸夫訳)「じつはきみの夢もためしてみたんだ」(ゼナ・ヘンダースン『果しなき旅路』ヨルダン、深町真理子訳)「ぼくは、きみが苦しんでいるのを見ると楽しいのさ。」(スティーヴン・バクスター『虚空のリング』上・第一部・2、小木曾絢子訳)「きみも詩を書いているのか？」(ティム・パワーズ『石の夢』上・第一部・第八章、浅井 修訳)。「あるいは、その逆か」(アヴラム・デイヴィッドスン『眠れ美女ポリリー・チャームズ』古屋美登里訳)。

新しい恋人と交互に、キッチンの端に坐って、マールポロのタバコを吸ってた。交互に風景が入れ換わって。見る視点が交互に変わって。意味のない、美しくもない、くだらない風景だけれど、ぼくの目は、きっといつまでも忘れないと思う。考えることがあると言う新しい恋人を見送ってきた。

きょうは、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されている、第19番目の詩篇「ダンス・レッスン」を読む。まず、詩篇「ダンス・レッ

スン」を引用しよう。

あらゆる場所に苦い草が育ってしまう

(午前四時五十三分)

耳をすませばひびいてくるビートに

(まるでペースト状だか)

頭をゆらせば

ひらけてくる身もあるだろう

そう信じてレッスン、おれはダンスっ・レッスン

捻られた鴉を吐いて入り口だけいっぱい

漂白された戦争は終わって

鎖骨ばかり磨いては苦笑うブサイクな愛人たち

とポロポロの日々

(ラブ&ピースなんて口走ってしまっ)

若気のいたりのにおもわず産みおとしてしまった

夥しいはたちは悪意にみちみちて

しああわせ？ しああわせじゃない？

脊柱だけになって喋っている

救えない救えない桃を汚れた盥で洗う

それだけがおれの勤め

(うんざりだって)

(ラブ&ピースなんて口走って)

どうなるわけでもないけど頭ゆらせ

どの方向でもいいけれど

とりあえずは南の方へ頭ゆらせ

ブクブクにこれ以上、ブクブクに

テブってゆくことはできないから

(く、そ、っ、た、れ)

ダンスっ、ダンスっ、ダンスっ

(ながれるのは血イじゃねえぜ)

本年も遭難ばかりして爪噛めば

すぐにつまらない角材に老成してしまう

ダンスっ、ダンスっ、ダンスっ

ひびいてはひるがえるビートに

(まだまだペースト状だが)

頭ゆらしてターンするから見てろよ

(へったくそな絶壁みたいだなあ)

くびの皮、いちまい捲って

何を期待するわけでもないが

レッスン、おれはダンスっ・レッスン

見事に意味のない、美しくもない、くだらない詩篇だ。しかし、だからこそ、金子鉄夫さんの詩篇には、キングオブコメディのコントがもつ破壊的な癒しの力があるのだ。ほくたちの意味のない、美しくもない、くだらない人生の瞬間瞬間に、光をあてるのだ。ほくたちの意味のない、美しくもない、くだらない人生を、愛おしく思わせるのだ。「(午前四時五十三分)」「(ラブ&ピースなんて口走って)」「ダンスっ、ダンスっ、ダンスっ」ことしの秋ごろに、ほくの新しい詩集『The Wasteless Land.VII』が書肆山田から出されるのだが、その詩集に、つぎのような詩を収録している。「WHY SHOULD I CRY FOR THE BOY IN THE BATHROOM?」というタイトルのものだが、金子鉄夫さんの詩篇「ダンス・レッスン」の一部の詩句と通底する情景が描かれているように思った。ほくの「WHY SHOULD I CRY FOR THE BOY IN THE BATHROOM?」を引用してみよう。

浴室の／白いタイルが（来住野恵子『脱衣』）

窓という窓に（来住野恵子『発端』）

闇を迎え入れる（来住野恵子『Welcome Wreath』）

踊りながら／見え隠れする（来住野恵子『N. Y. 作品』）

鏡の（来住野恵子『原種系』）

素足（来住野恵子『野外舞踏』）

海岸通り 午前五時（来住野恵子『プラチナの朝』）

寄せては返す（来住野恵子『二千年の秋へ』）

私という言葉（来住野恵子『夏の終りに』）

ガラス窓に（来住野恵子『白日の祈り』）

置き去りにした（来住野恵子『Los Angeles より愛をこめて』）

ばらばらの死骸たち（来住野恵子『薔薇・Ms. Caligula』）

スキンヘッド（来住野恵子『N. Y. 作品』）

ゼリイのやうにくづれて（来住野恵子『Tabura Rasa』）

自爆する（来住野恵子『N. Y. 作品Ⅱ 聖夜』）

金子鉄夫さんの詩篇に、ほくが大いなる共感を寄せる理由が明らかであろう。「ダンスっ、ダンスっ、ダンスっ」。数多くの顔が通り過ぎていった。数多くの声を通り過ぎていった。ほくは数多くの顔と声過ぎ去る場所だった。数多くの耳が、ほくの声聞いた。数多くの目が、ほくの顔を見た。彼らは、ほくが通り過ぎていった場所だった。少しく形を歪め、表情をつくって見せてくれた顔たち。大きく形を崩して表情をつくって見せてくれた顔たち。やさしくささやくようにして聞かせてくれた声たち。怒りに震えてどなり声をあげた声たち。思い思いの感情を吐露した顔と声を思い出す。ほくの方も思い出されているのか、それはまったくわからないのだけれど、きょうもまた、引用で終わろうと思う。「記憶の記憶の記憶。」（オースン・スコット・カード『神の熱い眠り』2、大森 望訳）「また増えてるのかい？」（ボブ・ショウ『メデューサの子ら』2、菊地秀行訳）「わたしはわたしとなり、」（ゼナ・ヘンダースン『果しなき旅路』荒野、深町真理子訳）「やがて

世界中すべてが、わたしの声と顔、そして手触りに満ちる。」(シオドア・スタージョン『闇の間近で』樋口真理訳)。

きょうは、もう一篇、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の詩を読む。第20番目に収録されている「モンキーブック」である。まず、引用する。

毛むくじゃらかよ

ページにあつぱあつぱ浮上する

直後にこめかみに記され

泣くほどに濃い「止マレ」を

捺された頬にイキたえだえ

ここに降る五月雨は非人称の味

今になって延焼するなマザーのマナー

濁音にまみれた消去法を孕んで卒倒していく

ぼくのゆきずりちゃん

ゆるしてはなんだよバーカ

滴るデノテーションに緊縛され鞭うたれて

尻づたいに煌びやかな魚類の嘘に

なめされて

ぼくのゆきずりちゃん

「であるでしょう」からうじゃうじゃ

漏れ出た裏側の吃音を把捉して

感情論をいびつなスタッカート

(サービス業じゃないんだぜ)

サイケチックに錯綜する

剥がれて落ちてびらびらでびらびらで

ページを捲って

のっぺらな営みの肌理

バレてんだよ畜生めえ

臭い肉のままに

そのドライブして行方は不明

一枚、一枚、ページを破いて

ぼくのいきずりちゃん

センチ、メンタルな生首を

舐めまわして

絶えず脳膜で温存する歯ならび

あつぷあつぷ

また浮上してしまったのは

モンキーブックのページのうえ

くだらねえなあ、おいつ

「モンキーブック」なるものが、どういうものかわからないが、その本のうえに戻ってくることは戻ってくるのか。それとも、どこへも行かずに、こころの断片が、たださまざまなヴィジョンを引き寄せただけなのか。この詩篇もまた、意味がなく、美しくもなく、くだらない、すばらしい詩篇であった。「ぼくのゆきずりちゃん」かあ。さきほどの詩篇の感想のところに引用した言葉を、もう一度、ここに引いてみたくなった。「一片一片が瞬間ごとにおのおのべつの動きをする。」(モンテニュー『エッセー』第Ⅱ巻・第1章、荒木正太郎訳)。べつべつの動きをする詩句たちだが、手綱をしっかり握ってらっしゃるのだろう、金子鉄夫さんの詩句は、まさに、「One For All. All For One.」って感じがする。まさしく、キングオブコメディのコントのようだ。パーフェクトだ。これまでの詩篇にも言えることだと思うが、二、三の引用を置いて、この詩篇の感想の終わりにする。「人生にはなにか見落としているものや自分の知らないものがあるだろうか？」(アンナ・カヴァン『愛の渇き』5、大谷真理子訳)「自由なのは見捨てられたものだけだ。」(ブライアン・W・オールディス『終りなき午後』5、伊東典夫訳)「創造性とは、関係の存在しないところに関係を見出す能力にほかならない。」(トマス・M・ディッシュ『334』ソクラテスの死・4、増田まもる訳)。この詩篇の随所にきらめく光は、音だ。音楽そのものの、すばらしい音色を奏でる光だった。

2012年06月23日(土)

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第21番目に収録されている詩篇「クソっブタ町」を引用する。

にらにらと

にらにらと腹黒い肉の臭いのする方へ

ふとい根と根のあいだから

へらへらと舌を這わせ

辛いなんておもってしまったら

クソっブタ町へ、あべこべにぬって

いこうぜ、いこうぜ

剥き出しのままに

背後から羽交い絞めにされて

爆裂な実験の末の股グラ、グラグラ

(いつもまっしろいが正しいわけじゃないぜ)

それだけ覚えているが

早いところブン殴ってしまって

前からやってくるヨダレたらずピンクな背景を背負ったひとたちと  
肝ころがして捻れてしまえばいい  
わけなんだが  
殴っても殴ってもどうしてどうして  
嘘をつくばかりで  
ひとちがいじゃないですか？なんて言われてしまった  
ぼくのきんにくたち  
(それはこの際、問題ではないのです)  
クソっブタ町、クソっ  
あたりを跳びはねてカワイイ電腦  
からあふれだすプルンプルンの「アタシ」の歴史だって  
コミュニケーションじゃない？  
コミュニケーションが大事じゃあなあい？  
さっきから下半身を這う包丁のような女が  
ずっと舌なめずりしているが  
その貧相な蹠を馳せて泥沼へ帰っていけよバカっ  
うちをめぐりめぐるあついあつい原液  
ふたたび殴ってみるがダメ  
羽交い絞めする力が強くなる  
(じょ一念、じょ一念かよ)

口走って血走る関係

本来ならまわらぬ方向へまわしてみても

こめかみから躍り出てくる末世のワンダー

泣けない、もう泣けてはこないだろう

殴る、殴るが

ぜつつめい

クソっブタ町、クソっ

どうせならここで死ねっ

路上で死ねっ

この詩篇に、金子鉄夫さんの詩の音楽的な構造がとてもよく現われている。オノマトペ、その他のさまざまな品詞の「同語反復」と、文節切断による音の調整と、撥音便の小さな「っ」の効果的な使用と、リフレインというのか、モチーフとなるヴィジョンをそっくり音とともに繰り返すところが、この作品ではすべて計算によって（おそらくは、その大部分が、無意識のものであろう）導き出されていることが容易に把握できるであろう。ほくは、この音の構造を容易に把握できるだろうと書いた。しかし、この完璧な音の構造をつくり出すことは至難の技である。技芸は修練の賜物であるが、才能がなければ、その努力が報われることはない。それが芸術の冷酷なところだが、われわれはそのことを受け入れるしかない。厳然とした事実だからだ。ほくは、構造から詩を読む人間である。まず紙面における文字の大きさと配置状態。字の部分と余白の部分のバランス。漢字とひらがなとカタカナのバランス。そして、詩行が構成する音の構造である。意味については、金子鉄夫さんのこの詩篇「クソっブタ町」のように、つぎつぎと異なるヴィジョンを想起させては破壊していくものが好きだ。破壊しつつも、破壊し尽くさずに、まえに創り出したヴィジョンに立ち戻らせてくれ、再想起の喜びをも与えてくれる、金子鉄夫さんの詩篇は

理想である。理想を実現されてくやしい気持ちはある。しかし、ようやく、日本現代詩が、天才を持てたのだという喜び、いわば、ほかのジャンルの文芸にも、いや、ほかの分野の芸術にでも誇れる才能の持ち主を、日本の現代詩が獲得したのだぞと声高に宣言できることの喜びの方が、はるかに大きいのだ。

金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」が出たあとの状況はおもしろい。いつまでも美に執着する詩人たちはいるだろう。美が、ぼくたちの思考をめぐらせないことに、いったいつ気がつくのだろう。このとき、ぼくが使っている美という言葉は、最上の美ではなく、そこらにある美のことである。最上の美は、もはや美ではないのだ。破壊的な癒しの力をもつ、キングオブコメディのコントのように、意味のない、美しくもない、くだらない詩篇においてしか現われるものではないのである。かつて、ぼくも旧来の美を追求していたことがある。しかし、書肆山田から『The Wasteless Land.Ⅲ』を出したころから、ぼくは美ではなく、驚きを追求しはじめたのだ。音楽的な美は、生得のものであったから、ヴィジョンのつぎつぎと変わるもの、グロテスクなものと明るいコミカルなものを混合させ、金子鉄夫さんの詩篇のように、ときおりヴィジョンを再帰させ、変奏させ、交錯させて、詩をつくるようになったのだ。そういうぼくのまえに、金子鉄夫さんの詩集が現われたのだ。金子鉄夫さんの詩篇は、その手法の理想的な実現であったのだ。ぼくはさいしょ、とまどい、拒絶したけど、すぐに大喜びして、受け入れ、むさぼるように読み、一篇一篇を、ぼくにできる可能な範囲で把捉しようと試みたのだ。この詩集評がそれである。ふつうの詩集評ではないかもしれない。ぼくが対象にのめり込み、自己同一化しているところが数多くあるからだ。しかし、そんなことはどうでもよい。自分が生きているあいだに、すさまじい詩篇に出合え、あまつさえ、その詩篇をこうして喜びをもって語るすることができるのだ。至福である。ぼくが元気になって、気力が充実して、幸せな気持ちになっているのだ。すぐれた芸術がそうであるように、すぐれた詩もそういうものなのだ。読み手の魂に栄養を与え、気力を充実させ、幸せな気持ちにさせるのだ。しかも、すぐれた詩は、人間についてより広くかつより深く考えさせ、読み手自身についての知見をも与えてくれるのである。それまで読み手が気がつかなかったことをも教えてくれるのである。感じるまで気がつかないでいたこと、考えるまで気がつかないでいたこと、そういった、あらかじめ思いもしなかったことを教えてくれるのだ。人間の秘密について、自分の秘密について。金子鉄夫さんの詩篇に共感し、かなりの程度、同化してしまっ

いるほくである。しかし、金子鉄夫さんの詩篇はパーフェクトだ。ほくのは劣っている。劣っているのはわかっているのだけれど、金子鉄夫さんのこの詩篇「クソッブタ町」の最後の二行を目にしてしまったほくは、自分の作品「死んだ子が悪い。」を引用したくてたまらなくなったのである。10年ほどまえに、ほくの詩集「みんな、きみのことが好きだった。」に収録してあるもので、これを読んでもらえば、ほくがなぜ、金子鉄夫さんの詩篇に夢中になるのか、さらによくわかってもらえるだろうと思ったからである。ほくの作品「死んだ子が悪い。」を引用する。

こんなタイトルで書こうと思うんだけど、って、ほくが言ったら、  
恋人が、ほくの目を見つめながら、ほそっと、  
反感買うね。

先駆形は、だいたい、いつも  
タイトルを先に決めてから書き出すんだけど、  
あとで変えることもある。

マタイによる福音書・第27章。

死んだ妹が、ほくのことを思い出すと、  
砂場の砂が、つぎつぎと、ほくの手足を吐き出していく。

(胴体はない)

ずっと。

(胴体はない)

思い出されるたびに、ほくは引き戻される。

もとの姿に戻る。

(胴体はない)

ほら、見てごらん。

人であったときの記憶が

ぼくの手と足を、ジャングルジムに登らせていく。

(胴体はない)

それも、また、一つの物語ではなかったか。

やがて、日が暮れて、

帰ろうと言っても帰らない。

ぼくと、ぼくの

手と足の数が増えていく。

(胴体はない)

校庭の隅にある鉄棒の、その下陰の、蟻と、蟻の、蟻の群れ。

それも、また、ひとすじの、生きてかよう道なのか。

(胴体はない)

電話が入った。

歌人で、親友の林 和清からだ。

ぼくの一番大切な友だちだ。

いつも、ぼくの詩を面白いと言って、励ましてくれる。

きっと悪意よ、そうに違いないわ。

新年のあいさつだという。

ことしもよろしく、と言うので

よろしくするのよ、と言った。

あとで、

留守録に一分間の沈黙。

いない時間をみはからって、かけてあげる。

うん。

あつ、

でも、

もちろん、ほくだって、普通の電話をすることもある。

面白いことを思いついたら、まっさきに教えてあげる。

牛は牛づら、馬は馬づらってのはどう？

何だ、それ？

これ？

ラルースの『世界ことわざ名言辞典』ってので、読んだのよ。

「牛は牛づれ、馬は馬づれ」っての。

でね、

それで、アタシ、思いついたのよ。

ダメ？

ダメかしら？

そうよ。

牛は牛の顔してるし、馬は馬の顔してるわ。

あたりまえのことよ。

でもね、

あたりまえのことが面白いのよ。

アタシには。

う〜ん。

いつのまにか、ほくから、アタシになってるワ。

ワ！

(胴体はない)

「オレ、アツスケのことが心配や。

アツスケだますの、簡単やもんな。

ほんま、アツスケって、数字に弱いしな。

数字見たら、すぐに信じよるもんな。

何パーセントが、これこれです。

ちゅうたら、

母集団の数も知らんのに

すぐに信じよるもんな。

高校じゃ、数学教えとるくせに。」

「それに、こないなとこで

中途半端な二段落としにする、つちゆうのは

まだ、形を信じとる、つちゆうわけや。

しょうもない。

ろくでもあらへんやっちゃ。

それに、こないに、ぎょうさん、

ぱっぱり、つめ込み過ぎつちゆうんちゃうん？」

ぱっぱり、そうかしら。

「ぱっぱり、そうなのじゃあ！」

現状認識できてましえ〜ん。

潮溜まりに、ひたぬくもる、ヨカナーンの首。

(胴体はない)

棒をのんだヒキガエルが死んでいる。

(胴体はない)

醒めたまま死ね！

(胴体はない)

醒めたまま死ね！

金子鉄夫さんの生き生きとした表現と比べるとみすばらしいものだろうけれど、「醒めたまま死ね！」の連呼が、金子鉄夫さんの詩篇「クソつ  
ブタ町」にある最後の二行の「どうせならここで死ねっ／路上で死ねっ」という詩句と共鳴したのだと思う。「オリジナルよりもずっとリ

アルなものに並びかえられたジグソーパズル。」(リチャード・コールドー『デッドガールズ』第七章、増田まもる訳)「いくつものばらばらな記憶」(デイヴィッド・布林『キルン・ピープル』下・第三部・61、酒井昭伸訳)「自分の記憶だけではなく、あらゆる人々の記憶」(マイケル・マーシャル・スミス『スペアーズ』第二部・13、嶋田洋一訳)「それをならべかえる」(カール・ジャコビ『水槽』中村能三訳)「好きなように世界が配列できるのだ」(スタニスワフ・レム『天の声』17、深見 弾訳)「自分自身の感性以上にリアルなものは存在しない。」(フリッツ・ライバー『ジェフを探して』深町眞理子訳)「誰があなたをここへ？」(ブライアン・W・オールティス『解放されたフランケンシュタイン』第二部・5、藤井かよ訳)「こんな場所に誰が連れてきたのだろうか？」(シャルル・プリニエ『醜女の日記』一九三七年五月二十二日、関 義訳)「人生はまず生きてみなくてはいけない。」(ホセ・ドノーソ『閉じられたドア』染田恵美子訳)「どんなものも、過去になつてしまわない限り現実味を持たない。」(マイケル・マーシャル・スミス『ワン・オヴ・アス』第2部・13、嶋田洋一訳)「いかに記憶し、いかに思考過程をはじめるか」(ブライアン・W・オールティス『率直にいこう』井上一夫訳)「あれこれ思い返しては何度もそのときを生きただった。」(アドルフォ・ピオイ＝カサーレス『パウリーナの思い出に』平田 渡訳)「これは、心の始まりだろうか？」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の大聖堂』第三巻、矢野 徹訳)「はじめはそんな単純なものさ。」(スタニスワフ・レム『浴槽で発見された手記』2、村手義治訳)「ぼくはここからはじめる。」(オースン・スコット・カード『キャピトルの物語』第一部・5、大森 望訳)「人間がその死性を免れる道は、笑いと絆を通してでしかない。それら二つの大いなる慰め。」(グレゴリー・ベンフォード『輝く永遠への航海』下・第六部・5、冬川 亘訳)「だれが光を注いでくれたのか」(ジョン・ベリマン『ブラッドストリート夫人賛歌』39、澤崎順之助訳)「精神は刺激を同化吸収しようとつとめる。精神を刺激するのは、異質なものである。」(ノヴァーリス『断章と研究 一七九八年』今泉文子訳)「交わりは光りを生む」(エズラ・パウンド『詩篇』第七十四篇、新倉俊一訳)「多くのほかの精神につながっている」(ルーシャス・シェパード『戦時生活』第四部・14、小川 隆訳)「ぼくらは多くのものに影響を受け、共鳴する。」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の子供たち』第三巻、矢野 徹訳)「どのような自我の排出が行なわれ、そしてどのような自我の再充填が行なわれているのか。」(ロバート・シルヴァーバーグ『一人の中の二人』7、中村保男訳)「砂漠に沈む太陽は、ぼくの魂に沈んでゆく太陽だ。」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の子供たち』第二巻、矢野 徹訳)「事物を離れて観念はない」(ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ『パターンソン』第一巻・巨人の輪郭・1、沢崎順之助訳)「外界の事物は、

人間の頭脳にほんとうに影響をおよぼすものである。」(ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』26、窪田般弥訳)「偽の光」(ジョン・スラテック『非12月』越智道雄訳)「偽の記憶？」(ハリイ・ハリスン『ステンレス・スチール・ラットの復讐』17、那岐 大訳)「現実の事物は刺激(しげき)が強すぎる。用心しなければならない。」(ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』富田 彬訳)「光は過剰な秩序であり、致命的なものになり得る。」(フランク・ハーバート『デューン砂丘の子供たち』第二巻、矢野 徹訳)「太陽は人をあざむくからね。」(アントニー・バージェス『アバ、アバ』4、大社淑子訳)「用心したまえよ、事物のやさしさに、」(ポール・ジャン・トゥーレ『コントリウム』入沢康夫訳)「虚偽は言葉のなかにではなく、事物のなかにある」(イタロ・カルヴィーノ『マルコ・ポーロの見えない都市』Ⅳ・都市と記号5、米川良夫訳)「実在するものはすべて、絶えず同時に現われたり消えたりしてるのよ。」(イアン・ワトスン『存在の書』第三部、細美遙子訳)「それらすべてがわれわれの周囲に渦巻いている。可能性だ」(ジョージ・R・R・マーティン『フィーヴァードリーム』10、増田まもる訳)「可能性の影は物体であり、事物であり、事象である。」(イアン・ワトスン『存在の書』第二部・細美遙子訳)「世界、——魂の投げかけるこの影、あるいはべつわたし(、、、、)」(エマソン『アメリカの学者』酒本雅之訳)「海が消えた。」(ウィリアム・ギブスン『カウント・ゼロ』23、黒丸 尚訳)「空がない。」(P・D・ジェイムズ『わが職業は死』第四部・9、青木久恵訳)「花はなかったし、」(紫 式部『源氏物語』東屋、与謝野晶子訳)「バスもなかった。」(P・D・ジェイムズ『黒い塔』7・2、小泉喜美子訳)「何もない。」(アイザック・アシモフ『ミクロの決死圏』1、高橋泰邦訳)「決してあったことのない記憶、頭の外にはなかったものだ。」(ハリイ・ハリスン『ステンレス・スチール・ラット諸君を求む』12、那岐 大訳)「文体とは、まさに作家の思考が、現実に対して加える変形のしるしです。」(プルースト『サント＝ブーヴに反論する』サント・ブーヴとバルザック、出口裕弘・吉川一義訳)「芸術家の技芸(わざ)とは、自分の道具をあらゆるものにあてがい、世界を自分流に写しとる能力にほかならない。」(ノヴァーリス『サイスの弟子たち』二、今泉文子訳)「優れた詩のように」(ジェイムズ・P・ブレイロック『ホームクルス』2、友枝康子訳)「詩人というものは、」(ジャック・ヴァンス『愛の宮殿』8、浅倉久志訳)「他の人の人生に意味を与える」(レイナルド・アレナス『夜になるまえに』レサマ＝リマ、安藤哲行訳)「ばかばかしい」(フィリップ・ホセ・ファーマー『気まぐれな仮面』5、宇佐川晶子訳)「くだらない人生だけどね、」(ガルシア＝マルケス『族長の秋』鼓 直訳)「魔法の杖で触れること。」(ノヴァーリス『断章と研究 一七九八年』今泉文子訳)「そのひと言で、」(カブレラ＝インファンテ『亡き王子のための

ハバーナ』女戦士（アマゾネス）、木村榮一訳）「太陽をこわしたり、作ったりできるのです。」（スタニスワフ・レム『泰平ヨンの航星日記』第二十一回の旅、深見 弾訳）「詩というのは」（J・L・ボルヘス『月』鼓 直訳）「現実を変えてしまうのさ。」（K・W・ジーター『グラス・ハンマー』黒丸 尚訳）「ああ、ぼくの頭はどうしたんだろう？」（シオドア・スタージョン『人間以上』第三章、矢野 徹訳）「頭のまわりで世界が回転する。」（ダグラス・アダムス『ほとんど無害』12、安原和見訳）「ぼくの頭もぐるぐるまわりはじめた。」（ジョン・クリストファー『トリポッド 2 脱出』2、中原尚哉訳）「頭がぐるぐる回っている、」（ドナルド・バーセルミ『アリス』邦高忠二訳）「私は頭の回転がよくなっているのだから。」（トマス・M・ディッシュ『キャンプ・コンセントレーション』二冊目・3、野口幸夫訳）「ああ、世界がぐるぐる廻るわ！」（レイ・ブラッドベリ『メランコリイの妙薬』吉田誠一訳）「この世界がぐるぐるまわっているからさ。」（ポブ・ショウ『メデューサの子ら』5、菊地秀行訳）「世界ははたと動きをとめた。」（アルフレッド・ベスター『祈り』稲葉明雄訳）「いったい、この世界はどうなっているんだろう。」（ガルシア＝マルケス『族長の秋』鼓 直訳）「わたしたちは、わたしたちを知らぬ多くのものによってつくられているのではないかしら。だからこそ、わたしたちはわたしたち自身を知らないのだ。」（ヴァレリー『ムッシュー・テスト』友の手紙、清水 徹訳）「どうして人生を込み入ったものにしちゃうんだろうな？」（フェンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳）「深い知恵は無知を恐れない。」（トルストイ『ことばの日めくり』十月一日、小沼文彦訳）「愚かさがなければ、さらなる理解への刺激はどこにあるというのだ？」（ジャック・ヴァンス『なみ以下のサーティン』米村秀雄訳）「なんのための芸術か？」（ホフマンスタール『一人の死者の影が……』川村二郎訳）「世界は私の傷だ、」（ディラン・トマス『黄昏の明かりに祭壇のごとく』VIII、松田幸雄訳）「音楽や性行為、文学や芸術、それは今やすべて、楽しみの源ではなくて苦痛の源にされてしまってるんだね」（アントニイ・バージェス『時計じかけのオレンジ』3・4、乾 信一郎訳）「でも」（オースン・スコット・カード『神の熱い眠り』8、大森 望訳）「きみはどんどん使い捨てて、いつも手をさし出しては新しい世界を求めた。」（リルケ『マルテの手記』高安国世訳）「世界はそのままきみのものではないのか。」（リルケ『マルテの手記』高安国世訳）「なにがほしいの？／物語だよ、フローラ。」（ロジャー・ゼラズニイ『ユニコーンの徴（しるし）』3、岡部宏之訳）「「花は？」」（フロベール『感情教育』第一部・五、生島遼一訳）「「花は」／「Flora.」／たしかに「Flower.」とは云はなかつた。」（梶井基次郎『城のある町にて』手品と花火）「汝は花となるであろう。」（バルザック『セラフィタ』五、蛭原徳夫訳）「花となり、香となるだろう。」（サバト『英雄たちと墓』第IV部・

7、安藤哲行訳「それにしても、なぜいつもきまってあのことに立ちかえってしまうのでしょうか……。」(モーリヤック『ホテルでのテレーズ』藤井史郎訳)「どこであれ、帰ってくるということはどこにも出かけなかったということだ。」(フエンテス『脱皮』第三部、内田吉彦訳)「あれは白い花だった……(それとも黄色だったか?)」(ブライス=エチエニケ『幾たびもペドロ』3、野谷文昭訳)「「青い花ではなかったですか」」(ノヴァーリス『青い花』第一部・第一章、青山隆夫訳)「見覚えましたがですが、私(わたし)はもう忘れまして。」(泉鏡花『海神別荘』)「真黄色(まつきいろ)な花の」(泉鏡花『春昼後刻』三十三)「淡い青色の花だったが、」(ノヴァーリス『青い花』第一部・第一章、青山隆夫訳)「世界は物語でいっぱい」(オースン・スコット・カード『エンダーのゲーム』15、野口幸夫訳)「じつを言えば、たいいていなにをやっているのも楽しいのだ。」(ダグラス・アダムス『ほとんど無害』13、安原和見訳)「人生とはほとんどいつもおもしろいものだ。」(タピサ・キング『スモール・ワールド』5、みき 達訳)「いつも何かが起きてしまうのだ。」(A・A・ミルン『自然科学』行方昭夫訳)「真に肝要なるは完成することであって完成ではなかった。」(岡倉覚三『茶の本』第二章、村岡 博訳)「どんな秘密も、そこへ至る道ほどの値うちはないのですよ。」(ゲルハルト・ケップフ『ふくろうの眼』第二十二章、園田みどり訳)「きみは実在しているものについて語る、セヴェリアン。こうして、きみはまだ実在しているものを保持しているんだよ。」(ジーン・ウルフ『新しい太陽のウールス』50、岡部宏之訳)「創造者がどれだけ多くのものを被造物と分かちもっているか、」(トマス・M・ディッシュ『M・D』下・第五部・67、松本剛史訳)「今、わたしの存在を維持しているのはだれか?」(ジーン・ウルフ『新しい太陽のウールス』50、岡部宏之訳)「無意味、無意味、無意味、」(リチャード・マシスン『縮みゆく人間』10、吉田誠一訳)「理由などない、理由などない、理由などない、」(ルーシヤス・シェパード『戦時生活』第三部・11、小川 隆訳)「詩に意味なんかはないよ。詩は詩なんだ!」(マイク・レズニック『一角獣をさがせ!』佐藤ひろみ訳)「無意味なものに意味をもたせてなんになる?」(オースン・スコット・カード『ゼノサイド』下・15、田中一江訳)「然り、然り、然り。」(ロバート・スルヴァーバーグ『内死』25、中村保男・大谷豪見訳)「光、光、光……」(アルフレッド・ベスター『分解された男』15、沼沢 治訳)「あるひとつの思考は、どのくらいの時間、持続するものなのだろうか?」(ガデンヌ『スヘヴェニンゲンの浜辺』12、菅野昭正訳)「人間の精神は、ほんのわずかのあいだしか、ひとつの考えに、とどまっていることをしない」(アーサー・C・クラーク『銀河帝国の崩壊』10、井上 勇訳)「瞬間的でしかない意識」(ブライアン・オールデイス『橋の上の男』井上一夫訳)「心はひとりでに動いてしまう。」(フラ

ンク・ハーバート『デューン砂丘の子供たち』第一巻、矢野 徹訳)「運動は一切の生命の源である。」(『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』「繪の本」から、杉浦明平訳)「言葉同士がぶつかり、くつつきあう。」(ルーディ・ラッカー『ホワイト・ライト』第四部・22、黒丸 尚訳)「ああ、これがあらゆることのもとなつたんだ。」(アントニイ・バージェス『ピアドのローマの女たち』7、大社淑子訳)「変化だけがわたしを満足させる。」(モンテーニュ『エッセー』第三巻・第9章、荒木昭太郎訳)「結局、精神構造とは、一個の複雑な出来事ではなからうか？」(ハリントン・J・ベイリー『王様の家来がみんな寄っても』浅倉久志訳)「世界中で価値のあるものはただひとつ、活動的な魂です。」(エマソン『アメリカの学者』酒本雅之訳)「大切なのは活発に動くことだ。」(D・G・コンプトン『人生ゲーム』2、斎藤数衛訳)「ぼくたちのバスは止まる、」(ジャック・フィニイ『失踪人名簿』福島正実訳)「観察の正確さは思考の正確さに相当する。」(ウォレス・ステイヴンズ『アデージア』片桐ユズル訳)「あらゆる表現は相対的なもののなかにおかれ、自由に結合できることが、詩人を無制約なものにする。」(ノヴァーリス『断章と研究 1799-1800』[705]、今泉文子訳)「偉大な信仰は、大寺院の塔からでなく、つねに都市の下水道から生まれるものだ。」(コードウェイナー・スミス『ノーストリリア』浅倉久志訳)「私たちは言葉や指でさし示すことによってだんだん世界をわがものとしてゆく、」(リルケ『オルフォイスに寄せるソネット』第一部・16、高安国世訳)「人は手に触れるもの、愛するもの、夢見るものばかりではなく、恐れ、拒否するものさえも祝福できるようにならなければいけないということだ。」(フエンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳)「創造性とは、関係の存在しないところに関係を見出す能力にほかならない。」(トマス・M・ディッシュ『334』ソクラテスの死・4、増田まもる訳)。

2012年06月24日(日)

きのう、金子鉄夫さんの詩篇「クソッブタ町」の感想で、書き漏らしていたことが一つあった。詩篇を読んでいるときに、頭のなかで、つぎの詩句が音声化したとき、脳がくらくらとしたのだ。「爆裂な実験の末の股グラ、グラグラ」の「股グラ、グラグラ」である。金子鉄夫さんの詩句の音楽性には、オリジナルな手法がいくつもあるが、この用法については初見だったかもしれない。いや、これまで読み込んできた詩句にもあったかもしれないが、この詩句は、特記すべきものであると思われたのである。感想を書くさいしょの方に書こうと思っていたのに、なぜか、書き漏らしていたのだった。書き忘れてはならないと思うことが多すぎて、さいしょの方に考えていたことが吹っ飛んでしまったのだろう。気をつけなければならない。きょうは、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第22番目に収録されている「ノウのみち」を読む。まず、引用しよう。

罇、中心から

ひだひだ、ひだ走って

ニク折れてしのび

やわあわああ

やわあわああ

あるくノウっ、

ノウのみちは

わずかにふるさとの悪臭

蛇腹にじりよって  
泥まみれの名詞の方へ身をよじれって  
熱すれば無頼に落ちる  
ダロウヨっ、ダロウヨっ  
つむじとして  
目から丁寧に棄てて  
千枚のペロガ  
曼荼羅しわくちゃノイズ語り  
ノウっ、  
ノウのみち  
足先から（豚）になって  
（そう、あなたの  
（みにくい（豚）になりたい  
入れた？ 入れてない？  
のあわい  
けむりたつ、くだらないねえ  
ハハの顔から剥がしてゆくドラマ  
絡む脆い管を断絶すれば  
ぱっああああと  
ぱっああああとひらくかもしれないぜ

愛されない石吐いて

焼けてくる人面

あるくノウっ、

ノウのみち

虹色の遺体は頸がまわらない

と奥歯、嚙んでじゅうるじゅる

(もう一度、ひとめに曝されるまえに

(もう一度、死んじゃえよ

やわあわああ

やわあわああ

やっぱり一本の螺子

としては生きてはゆけないみたいだ

ひからびた文字の向こう側で

手まねいているあいつは九歳のぼくで

(全身漂泊)

かゆそう、かゆそうだなあ

やわあわああ

やわあわああ

生育している骨に食らいついてあるくノウっ、

ノウのみち

だあれもだあれもないはずなのに  
いやあな体臭はただよって  
汚い水だけが後をつけてくる  
やぶりやぶいてあらわにしてしまえっ  
やわあわああ  
やわあわああ  
足先から（豚）になって（豚）  
（そう、あなたのすべての穴と穴  
（ふさいで鳴きたいほくです  
やつ、わあ  
わああ、わあ

一読して、まず、「ノウ」は「脳みその脳」か「No のNo」か、まあ、前者であろうけれど、というのは、「九歳のほく」が出てくるからであるが、「ノウのみち」の途上にいる「九歳のほく」を「ノウ」が見ているからだが、ここに感傷性はない。まったくない。「No」だ。また、「ノウっ、」「あるくノウっ、」「生育している骨に食らいついてあるくノウっ、」といった詩句があるのだが、詩行の末尾に読点のあるものは、おそらく、二度目にお目にかかるものであろう。この詩集においては、めずらしいものである。読点を少し大きくして傾きを少し変えてやると、数学記号の「≠（ノットイコール）」に使われる斜線の線分になる。「あるく」ためには、重心をつねに自分のまえに放り出して、二つの足を交互にシャキシャキ動かしてやる必要がある。読点を少し大きくしたものと、「≠」に現われる「=」に斜めに突き刺された線分は、交互に「ノウのみち」「あるく」足であろう。一読して気がついたことは、もう一つある。数か所で繰り返される「やわあわああ／やわあわああ」と、

さいごの二行、「やっ、わあ／わああ、わあ」が、萩原朔太郎の「猫」という詩のさいごの四行、「『おわあ、こんばんは』／『おわあ、こんばんは』／『おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ』／『おわああ、ここの家の主人は病気です』」を思い出させたのである。「頭のなかには現実の場所よりも／はるかに多くの回廊がある」（エミリ・ディキンソン『作品六七〇』新倉俊一訳）らしい。金子鉄夫さんの「ノウ」の「回廊」にもさまざまなものが寝っ転がっているのだろう。歩きまわり、走りまわっているのだろう。沈降し、飛行しているであろう。現出し、浮遊し、消失しているのだろう。この見事な詩篇、「ノウのみち」もまた、意味のない、美しくもない、くだらない詩篇である。そして、このくだらなさ、萩原朔太郎のものよりはるかに破壊的である。朔太郎の破壊力が小さな爆竹一個並みに思える。もちろん、金子鉄夫さんの詩篇を束にした爆竹の爆発にたとえるならば、である。それぐらいにすさまじい破壊力をもったものであろう。この金子鉄夫さんの詩篇もまた、キングオブコメディのコントが持つ、破壊的な癒しの力がある。「九歳のほく」を見る金子鉄夫さんの言葉には、感傷性が見られない。まったく見られない。「感傷性は弱さと苦痛への好みを前提としている。」（リルケ『フィレンツェ便り』森 有正訳）というが、金子鉄夫さんの詩句には、感傷性もなく、苦痛への嗜好も見られない。なんなんだろう。はつきりとは意味が汲み取れないのだが、通底するイメージは感じとれる。「水はたえず流れ去るが、イメージ自体は消えることがない。」（ウィリアム・ピーター・ブラッティ『エクソシスト』Ⅳ、宇野利泰訳）「わたしが目にしているのはなにか？」（ロバート・シルヴァーバーグ『予言者トーマス』4、佐藤高子訳）「別の道」（マイケル・マーシャル・スミス『スペアーズ』第三部・21、嶋田洋一訳）「べつの場所」（アルフレッド・ベスター『願い星、叶い星』中村 融訳）「別の物語」（リチャード・コールダー『テッドボーイズ』第5章、増田まもる訳）「無数の名前を記録する」（イタロ・カルヴィーノ『見えない都市』Ⅰ 都市と記号1、米川良夫訳）「自我、自我、自我。」（ロバート・シルヴァーバーグ『内死』17、中村保男・大谷豪見訳）「精神的引力はさまざまな出来事を自分のところへ惹きつける」（フィリップ・ホセ・ファーマー『気まぐれな仮面』20、宇佐川晶子訳）「蜜蜂は蜜の収集家である。」（ハリントン・J・ベイリー『知識の蜜蜂』岡部宏之訳）「詩人というものは、」（ジャック・ヴァンス『愛の宮殿』8、浅倉久志訳）「蜜蜂の運命をもつ者なのだ。」（『デモクリトス断片』227、廣川洋一訳）「この蜂たちは一匹ずつごくわずかにちがう蜂蜜のしずくをもって帰ってくる」（ジェラルド・カーシュ『不死身の伍長』小川 隆訳）「口のなかは、花や蜜や花粉でいっぱいだ。」（T・J・バス『神鯨』10、日夏 響訳）「せっせと蜜を集めては、／厄介な詩を作っている／貧しい詩人に過ぎないのだ。」（ホラティウス『歌集』第四巻・二、鈴木一郎訳）「ど

こかで、蜂のとんでいるようなぶんぶんいう音がしている。いつもこの音だ。」(トーマス・M・ディッシュ『虚像のエコー』4、中桐雅夫訳)「多くの響きでありながら一つに聞こえる、」(シェイクスピア『ソネット8』高松雄一訳)「蜂の巣のなかの完全共同作業。」(ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア『ヒューストン、ヒューストン、聞こえるか?』伊藤典夫訳)「蜂蜜といっても、巣によってそれぞれちがう」(ジェラルド・カーシュ『不死身の伍長』小川 隆訳)「蜜蜂が勝手にあんなものを作るのである」(稲垣足穂『放熱器』)「さ、あの音楽をお聴き。」(シェイクスピア『ヴェニスの商人』第五幕・第一場、中野好夫訳)。

## 2012年06月25日(月)

きょうは、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第23番目に収録されている「混じるなよ」という詩篇を読み込む。まず引用しよう。

「憎い、憎い」の皮フうらがえして  
それから後付けてくる  
(びしょ濡れ) 木材をヒヤーク  
まで数えたところで  
(鈍色の肢体)

混じるルブをとりあえず殴る  
「お肉になりなさい」 って言うね  
でも今年の四月はあまりに紐日和  
が続くから  
おれは一本の紐になって  
「禍」のままでいたいのさ  
しかめっ面なんていらねえよ  
さらけだす声に肝、泳がし  
恥骨に落ちるマーク  
純度の高い数秒が空転した  
もっともっと「災い」のままでいたいのさ  
何もまちがっていない  
ペンチでネジ曲げれば  
脳、芽吹く、この街道の先で  
「ばあか」が砂になって  
ながれて毛が覆うから  
ますますヒトデナシ  
右側ではチクビを舐めるひと  
左側ではカミソリを舐めるひと  
いずれも月曜日の真夜中に

埋葬する練習をしているという

「いいね、いいな」

さかさまだよ

液を滴らせて縛られて

あふれる中身は無記名

(意味なんていらなのさ)

網タイツ、東スポ、コンドーム

モザイクに海藻に貝殻

それだけ詰め込んで

やわい臓腑に反復する主題

あまりに懐かしい匂いがするからって

幸せだな、なんてね

親指だけ不恰好に大きく

剥けてしまうまで

混じるルブ、とりあえず殴る

ことからはじめてみる

一行一行の詩句は、その一行一行の詩句が読み手に想起させるヴィジョンや読み手のところに喚起させる感情が確実にあるのに、つぎつぎと詩句のある位相が変わるために、詩篇全体としては、やはり、これまでの金子鉄夫さんの詩篇と同様に、意味のない詩篇になっている。

この詩篇に、「(意味なんていらぬのさ)」といった詩句があるが、そういえば、きのう読んだ詩篇、「ノウのみち」に「くだらないねえ」という詩句があった。この詩篇もまた、これまでほくが読んできた金子鉄夫さんの詩篇と同じように、意味のない、美しくない、くだらない詩篇である。そして、もちろん、これまでの金子鉄夫さんの詩篇と同様に、意味を構築しては破壊していく、というか、置いてけぼりをくらせて、後で呼び戻し、一つの詩句さえ無駄にせず、すべての詩句がそれぞれ、この一篇の詩作品のすみずみにまで力を行き渡らせるようにつくられている。そして、その一方、言葉と言葉を結びつける金子鉄夫さんの自我が、詩篇全体に息づいており、その詩篇全体がいつせいに共同して同時に行なう息吹が、それぞれ一行一行の詩行に力を付与しているのである。以前にも書いたが、まさしく、「One For All. All For One」である。そして、キングオブコメディのコントが持つような破壊的な癒しの力を持っているのである。また、その力の源の要因の一つである、というか、そのパワーの源泉であると思われる、詩篇の音の構造もパーフェクトだ。この詩篇もまた音楽そのものであるといってもよい。今回は、このすばらしい音の構造体である詩篇を構成する要素である、一つ一つの単語について、これまで以上にディープに迫りたい。というのも、この詩篇「混じるなよ」には、これまでにはほくが読んできた、金子鉄夫さんの詩篇に何度も出てきた言葉がいくつもあったのである。それらの言葉について、ほくの推測やほくが思いついたことなど、さまざまなことを書きつけていきたいと思っているのである。ノヴァーリスが「しかし語らずにはいられないとしたら、どうであろう。そしてこの語りたいたいという言語衝動こそが、言葉に靈感がある徴(しるし)、わたしの身内で言葉が働いている徴だとしたら？」(『対話・独白』今泉文子訳)といった言葉を書いているが、金子鉄夫さんの詩篇を読んで、ノヴァーリスのこの言葉を思い起こすなんて、これはやはり、金子鉄夫さんの言葉の力だろう。金子鉄夫さんが詩句に選んで並べた言葉たちの力だ。ほくに、こんなにたくさん感想を語らせたいと思わせるのだから。

この詩篇は、「混じるなよ」である。「混ぜるなよ」ではなくて、「混じるなよ」である。だれか、あるいは、なにかが意識的に混ぜ合わせることを想定してのタイトルではない。オウィディウスの『変身物語』にあるように、「変化することは自然なこと」なのであり、その考えの流れに添うと、「混じり合うことも自然なこと」であるはずだ。命令形のタイトルは、詩集「ちちこわし」の冒頭に収められた詩篇、「うみなんていくな」があるが、この詩篇、「混じるなよ」は、ほくには、命令形というよりは、「うみなんていくな」にもそういうところがあ

るのだけれど、自分自身の耳に聞かせている眩きのように聞こえるのである。しかし、そもそも、なにに、なにが混じるというのだろう。言葉に言葉が混じっているとしか、ぼくには思えない。そうか。言葉に言葉が混じっていくことに対して、金子鉄夫さんは、「混じるなよ」と言っているのだ。けっして混じり合うことなく、互いに分離したまま、その言葉の意味を十全に発揮せよと。そうだ。そうに違いない。この意味のなさを維持するために、美を拒絶し、美の持つ拘束力をはねのけるために、「混じるなよ」と言葉に呪文をかけているのだ。くだらなさに徹し、そのことによって、ぼくたちの意味のない、美しくもない、くだらない日々の営みのいくつもの瞬間に光を投げかけ、ぼくたちの意味のない、美しくもない、くだらない人生の瞬間瞬間を生き生きとしたものを感じさせてくれているのだ。詩篇のタイトルだけでも、金子鉄夫さんの詩篇のことがこれだけわかるようになった。いや、わかるようになったという感じがするのである。もうかなり、ぼくは金子鉄夫さんに同化しているような気がする。

つぎに、詩篇に使われている言葉について思ったことを書きつづってみよう。「木材」が出てきた。まえにも、「角材」が「木材」が出てきていた。「木」ではなく、「木材」である。もしかしたら、金子鉄夫さんのご実家が材木屋さんなのか、あるいは、いま金子鉄夫さんが勤めていらっしゃるお仕事が建築関係なのかなと思わせられた。ぼくが毎週のように飲みに行く（今週は3日も行った）日知庵で顔見知りになった庭師の青年の顔が思い浮かんだ。きわめてさわやかな好青年だ。朴訥としているのに、着る服にこだわりがあるのか、いつもコンセプトを決めて服装をコーディネートしている。背も高くがっしりしていて、日に焼けた黒い顔で短髪なのに、ネッカチーフをおしゃれに首に巻いて飲みに来ていたときには、おもわず目を瞞ってしまった。まあ、そういう独特なセンスの持ち主なのだけれど、そういえば、高校時代に、材木屋のせがれの友だちがいた。音楽は、プログレを主に聴いていたぼくとは違って、その友だちはラモーンズとかのパンク寄りのものを聴いていたけれど、こんな話をぼくにしてくれたことがある。「おれの父さんな、肩にほうほうと毛えが生えててな。毛むくじゃらやねん。むかし、材木を肩にかついでたからなんやけど。」このとき、ぼくがただ黙って聞いていたのか、「そうなんや、摩擦を少なくするために、毛が生えたんやな。人間の身体って、どこまですごいねんやろな。」と言ったのか、はっきりとは覚えていない。もしかすると、その言葉は、友だちが、自分の言葉の後を継いでしゃべった言葉だったかもしれないからだ。定かではない。ただ、さいしよの言葉に応答した内容の言葉が、どち

らかの口から発せられたことだけは覚えている。いや、そういう記憶があるだけで、もしかしたら、ぼくがあとで思いついた言葉で、そういった会話が交わされたという「偽の記憶」（ハリイ・ハリスン『ステンレス・スチール・ラットの復讐』17、那岐 大訳）があるだけなのかもしれない。あるいは、「架空の記憶」（J・G・バラード『ある日の午後御、突然に』伊藤 哲訳）か。もう35年ほどむかしのことである。いずれにしても、「人類は客観的事実に縛られてはいない。」（フレデリック・ポール『マン・プラス』3、矢野 徹訳）。「材木」といった言葉で、これだけのことが瞬間的に思い出された。「vel capillus habet umbram suam. 一本の頭髮さへその影をもつ。」（『ギリシア・ラテン引用語辞典』）という成句があるが、まさしく、一つの単語がさまざまなことをぼくに思い出させる。言葉が言葉を呼ぶ。思い出が思い出を呼ぶ。いままた、異なった思い出が思い出されたのだけれど、金子鉄夫さんの詩篇に使われている他の言葉に目を移そう。と思ったのだが、もう一つだけ書き込んでおきたい。「木材をヒャーク／まで数えたところで」というところで、石川啄木の「大という字を百あまり 砂に書き 死ぬことをやめて帰り来れり」を思い出した。これを下敷きにしたのかなとも思われたのだが、「100」という数字を目にしたら、啄木のこの歌を思い出さずぼくの脳みそが硬直しているのかもしれない。ぼくの脳みそが硬直しているところか、どうかしているのではないかと思われることがあった。「木材」よりもさらにさかのぼる。タイトルの「混じるなよ」のことについて、ぼくが先に述べたところだ。「記憶というものはなんと二股の働きをするものだろう。一方では現わし、他方では隠す。」（ハリイ・ハリスン『ステンレス・スチール・ラットの復讐』4、那岐 大訳）ぼくの感想に間違いがあったのだ。いや、間違いではあったが、間違いではなかった。「混じるルブをとりあえず殴る」「混じるルブ、とりあえず殴る」と、詩篇にあるのだが、「ルブ」なるものが、いったいいかなるものか、ぼくが知らないからだ。「ルブ」が「混じる」と書いてあるのだが、「ルブ」がなにか知らないぼくには、それがなかに「混じる」のかまったくわからないからである。ここで、「ルブ」の意味を調べたりしないところがぼくの性質である。いつの日か偶然に、その言葉「ルブ」と出会い、その言葉がどういった意味のものであるのかを知ったときに、この詩篇「混じるなよ」のことを思い出し、なにごとかを思い、なにごとかを感ずることができらるうからである。「記憶というものも、その不完全さということがやはり天の恵みなのだ。」（ウィル・ワーシントン『プレニチュード』井上一夫訳）ぼくは、偶然の雷に撃たれて痺れるほうを選ぶのだ。「「お肉になりなさい」って言うね」から「おれは一本の紐になって／「災い」のままでいたいのさ」までの第7行目から第11行目までの、あるいは、「もっともっと「災い」のままでいたいのさ」までの第16行

目までの流れは、金子鉄夫さんという詩人の書法が、ディアレクティケー、つまりダイアローグ的なもので、金子鉄夫さんが、自己問答を繰り返しながら詩句を爆走させていくタイプの詩人であることをよくあらわしている。ほくもまた、しばしば自己問答型の書法・文体で書くことがあるので、金子鉄夫さんのこの書法・文体には、とても親しみを感している。

ところで、「おれは一本の紐になって／「災い」のままにいたいのだ」という詩句は、メシア願望をあらわす言葉であるようにも思えるのだが、ほくの「●詩」の「LA LA MEANS I LOVE YOU。」のさいごの方の部分「●ああ●どうか●世界中の不幸という不幸が●ほくの右の手の人差し指の先に集まりますように！」と共鳴したのだが、ほくにもメシア願望があるのかもしれない。そういえば、詩集の冒頭に置かれた詩篇、「うみなんていくな」に出てくる「ちいさいひと」って、キリストのことかなって、ちらっと思ったのだけれど、メシア願望などというものは、まあ、たいていの表現者にはあるような気もするのだが、「個人は、自分の人生経験にもとづくイメージや象徴でものを考えるのであり、二人の個人が共通の人生経験をもっていなければ、二人が分かちあうすべては混乱となるだろう。」（ウィリアム・テン『脱走兵』中村保男訳）「二すじに割れた水も手の背後ではまたひとつに結び合う。」（エマソン『償い』酒本雅之訳）「瀬をはやみ 岩にせかる 滝川の われても末に 逢わむとぞ思ふ」（崇徳院『詞花集』恋）。ほくの詩句のほうが受身で、金子鉄夫さんの詩句のほうが能動的なものであるという大きな違いはあるのだが。

「恥骨」は、金子鉄夫さんの詩篇に何度も出てきた言葉であるが、ほくの使っているパソコンでは、一発変換ができない。そのために、いつも、「恥ずかしい」と打ち込み、「ずかしい」を Backspace で削除して、そのあと、「骨」と書き込んで、ようやく、「恥骨」とするのだが、やはり、「恥ずかしい骨」なのだろうか。いったい、どこ部分の骨か知らないの、恥ずかしい場所にある骨なのかどうか分からないのだけれど。この詩篇のなかの「ペンチで捻じ曲げれば」に見られるように、「捻じる」という言葉も、金子鉄夫さんの詩集で、よく見かける言葉のような気がする。捻じると形が変わる。形が変われば、別のものになる。もとのものとは違ったものになる。この詩篇「混じるなよ」の感想の冒頭に書いた、オウィディウスの『変身物語』がふたたび思い出された。「お肉になりなさい」「おれは一本の紐になって」といった言

葉とも反響し合う。ところで、この詩篇の表現主体は、「おれは一本の紐になって」いたはずなのに、いつの間にか、「液を滴らせて縛られて」いることになっている。「紐」が「縛られて」いる、この転倒というか、倒錯。「すべて詩の中には本質的な矛盾が存在する。」（アントナン・アルトー『ヘリオガバルス』Ⅲ、多田智満子訳）「矛盾ほど確実な土台はない」（ジーン・ウルフ『拷問者の影』8、岡部宏之訳）。

この詩篇には、「やわい臓腑に反復する主題」とあるのだが、その「主題」はもちろん不明で、ということは、「主題」が「いつまでも不明であること」とでもいうのだろうか。この詩篇「混じるなよ」のさいごの二行が、「混じるルプ、とりあえず殴る／ことからはじめてみる」というのも、プルースト的な転倒、あるいは、倒錯の極みであろうか。「とりあえず殴る／ことからはじめてみる」というのだ。「魂の流出は、幸福である、ここには幸福がある、」（ホイットマン『大道の歌』8、木島 始訳）「なにも知らないことを心から楽しんでいた。自分の無知が彼を興奮させた。つまり、学ぶことがたくさんあるということだ。」（ロバート・シェクリー『トリップアウト』4、酒匂真理子訳）「まさに理解不能な世界こそ——その不合理な周縁ばかりでなく、おそらくその中心においても——意志が力を発揮すべき対象であり、成熟に至る力なのであった。」（フエンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳）「あらゆるものは、始まったところにもどるもの」（ゼナ・ヘンダースン『果しなき旅路』2、深町真理子訳）「一つの現実からもう一つの現実へと」（シオドア・スタージョン『[ウィジェット]と[Wジェット]とボブ』7、若島 正訳）「名前はさらなる名前へと、どんどん遡る、最後には名前のない者へと。」（フランク・ハーバート『デューン砂丘の大聖堂』第三巻、矢野 徹訳）「すべてがはじまる場所へ。」（コードウェイナー・スミス『クラウン・タウンの死婦人』1、伊藤典夫訳）「バスはいつもと違うコースをとった。」（リサ・タトル『きず』幹 遙子訳）「きみはまたぼくと会うことになる」（ジェイムズ・P・ブレイロック『ホームクルス』4、友枝康子訳）「あるいは、その逆か」（アヴラム・デイヴィッドソン『眠れる美女ポリー・チャームズ』古屋美登里訳）。

2012年06月28日(木)

きょうは、まず詩篇を引用する。

最後に吐かれた犬たちは  
ツルツルに成長していて  
(まるでそっくりだ)  
異なった語を腫らし  
逃げてゆく午前五時きっかり  
おれは身、ひらいて  
裡からうのようによ管のびて  
奪われていなければならない  
わめけるうたなんてない、こんなときに  
ない、なんてさすがに言わないよ、ベエちゃん  
うらがえしては曝す業に蠕動するビートの下痢  
黙ってしまったかよ  
デジタルに熟れた街道に沿って  
耳なしのままいつまでもじゅくじゅくさせて

しゃぶっていたかったな、ベエちゃん  
(どうせくるうんだしね、くるうんだしね)  
ビリビリのまなざしへ  
どうやらこの街道は続かないみたいで  
ブクブクにテブったゆめの文末に舞う  
いちまいの虹色びらびら  
(吐かないよ、もう吐けないよ)  
首筋を這い上がってくる暗喩  
一匹、一匹、丁寧に潰して  
ミドリに落ちてしまった日々の股座を  
いまさらに馳せてどうなるものでもないけど  
終わりかもしれないからって、ベエちゃん  
涎たらせば  
ドロツてこの街道から消えてしまうみたい  
合わない今日の膚が不愉快だね  
藁のようにとりあえず笑ってみよう  
としているがマンホールから出てきた  
懐かしい手首が握っている  
懐かしい狼藉  
すべてが速度をあきらめた実話

(どうせくるううんだよね? くるううんだよね?)  
ひかえめに鳴らしてついてくる暗黙のサルどもめえ  
吠えはしないだろう、もう吠えることはできないだろう  
いくつものナマなタマシいが  
眼を汚してドブドロのダンス  
を生きてゆく街道さ  
さびしくひらいたおれの身がさつきから  
くさい、くさいんだよ、ベエちゃん  
美しく折られてゆく角材たちの声が  
おやすみ、おやすみって  
どうにでもなればいいさ  
何ひとつ輝かない夜空の下  
吐けなくて、僕は吐けなくて  
黒い脈にもうじきキツク縛られ  
また塗りたくった朝にまぎれてしまうが、ベエちゃん  
ところでおまえはどこへ行っちゃったんだよ  
元気かよ

出だしから見事な詩篇「ベエちゃん元気かよ」は、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第24番目に収録されているもので、詩集収録作

さいごから2番目の作品である。人の名前がタイトルの入っているものは、この詩篇と、15番目に収録されている「注釈・M氏」の二篇のみであり、詩句のなかに人の名前が出てくるのは、18番目の「ズブズブツ、ズッ」くらいであろうか。「ズブズブツ、ズッ」に出てくるのは、J子と呼ばれる子で、金子鉄夫さんにとって、大切な子であった、あるいは、大切な子であるということが、読み手のほくに伝わる詩篇であった。おそらく、友だちなのだろう。呼びかけ方から、ほくにはそう思えるのだけれど、ほくのこころの耳にはあまく、またこちよい響きをもって聞こえてくるものであった。ほくもしじゅう、恋人や友だちに呼びかける。ところで、金子鉄夫さんの「ベエちゃん、元気がよ」というこの詩篇だが、これまで読んできたすべての詩篇と同じく、実に、意味のない、美しくもない、くだらない詩篇である。この徹底した意味のなさ、断固とした美しさのなさ、完璧なくだらなさが、詩句の随所に見受けられる哀愁ただよ見事な表現を、凡庸な詩篇とはまったく異なる高い次元にまで引き上げ、ほくたちに、そうだ、ほくに、ではなくて、ほくたちに、だ、ほくたちに、人間というものの持つ深い深い悲しみを感じさせてくれるのだ。人間というものの存在の深い深い悲しみを教えてくれるのだ。「だが、その深い悲しみが知恵というものなのだ。」(バイロン『カイン』第一幕・第一場、島田謹二訳)「『愛』が覚えている先の一瞥(いちべえつ)のごとく、」(シェリール『鎖を解かれたプロメテウス』第二幕・第五場、石川重俊訳)「いまほくはあの数瞬間をふたたび発見し、それがきみを永遠にほくに結びつけているのだ。」(ピュートル『時間割』第四部・四、清水 徹訳)。「デジタルに熟れた街道に沿って／耳なしのままいつまでもじゅくじゅくさせて／しゃぶっていたかったな、ベエちゃん／(どうせくるうんだしね、くるうんだしね)／ビリビリのまなざしへ／どうやらこの街道は続かないみたいで／ブクブクにデブったゆめの文末に舞う／いちまいの虹色びらびら」。「ブクブクにデブったゆめの文末に舞う／いちまいの虹色びらびら」か。虹色に輝く夢の花びらを、このように表現した者が、これまでにいたらうか。虹色の夢の花びら。虹色に輝く花びらの夢。「夢には意味があるって思わない？」(サバト『英雄たちと墓』第1部・17、安藤哲行訳)「映像また映像がたわむところ」(チャールズ・トムリンソン『水の上に』土岐恒二訳)「夢はうごいている。」(サンドバーグ『赤い銃のあいだで』安藤一郎訳)「眠っているあいだも、頭ははたらいている。」(ロバート・ブロック『死の収穫者』白石 朗訳)「寝ている間も脳は動いているんだわ。」(サルトル『嘔吐』白井浩司訳)「眠ることのない潜在意識」(アーサー・C・クラーク『犬の星』南山 宏訳)「一人の人間の夢は、万人の記憶の一部なのだ。」(J・L・ボルヘス『マルティン・フィエロ』鼓 直訳)「われわれ人間は夢と同じもので作られている。」(シェイクスピア『テンペスト』第四幕・

第一場、伊東杏里訳)「『夢』が知となる。」(ポール・ヴァレリー『海辺の墓地』安藤元雄訳)「夢がまちがってることだってあるのよ」(チャールズ・ブコウスキー『狂った生きもの』青野 聡訳)「間違っているかどうかなんて、そんなことが問題じゃないんだ、」(トンマーゾ・ランドルフィ『幽霊』米川良夫訳)「絶対に間違いのないようにするなんてことは、何の役にも立ちたくない、」(トンマーゾ・ランドルフィ『幽霊』米川良夫訳)「人生にはなにか見落としているものや自分の知らないものがあるのだろうか？」(アンナ・カヴァン『愛の渇き』5、大谷真理子訳)「われわれのかかわりを持つものが、すべてわれわれに向かって道を説く。」(エマソン『自然』五、酒本雅之訳)「詩人というものは、他者の性質を変化させるほどの内なる力の結合の産物であり、これらの力を刺激し、支える、外なる影響の産物なのだ。詩人は、その一方ではなく、両方なのだ。」(シェリー『鎖を解かれたプロメテウス』序文、石川重俊訳)「作品と同時に自分を生みだす。というか、自分を生みだすために作品を書くんだ」(オースン・スコット・カード『エンダーの子どもたち』上・4、田中一江訳)「その構造を知ること。」(クリフォード・D・シマック『宇宙からの訪問者』32、峰岸 久訳)「構造？」(ステイーヴン・バクスター『虚空のリング』上・第二部・9、小木曾絢子訳)「啓示の瞬間が長く続くことはない。たちまちのうちにまたいつもの見方にとらわれてしまう。」(ロバート・シェクリー『隣は何をする人ぞ』米村秀雄訳)「別の雲。」(コードウェイナー・スミス『アルファ・ラルファ大通り』浅倉久志訳)「別の曲」(ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ『砂漠の音楽』原 成吉・江田孝臣訳)「心のなかに起っているものをめつたに知ることはできない」(ノーマン・メイラー『鹿の園』第三部・10、山西英一訳)「人間の通性が不意に稀有なものとなる。」(ジェフリー・ヒル『小黙示録』富士川義之訳)「万物に輝きと昂揚を与えるこの魂」(エマソン『霊の法則』酒本雅之訳)「われわれの内部にあつては情感であるあの魂が、外部にあれば法則となる。」(エマソン『償い』酒本雅之訳)「昼がなければ夜もあるまい」(ロバート・シルヴァーバーグ『大地への下降』12、中村保男訳)「考えれば気づいたはずのこと」(アン・マキャフレイ『クリスタル・シンガー』5、浅羽英子訳)「夜には昼に教えることがたくさんある」(レイ・ブラッドベリ『趣味の問題』中村 融訳)「太陽は昼をつくる、諸惑星がめいめいの夜をつくるのだ。」(ブライアン・W・オールディス『銀河は砂粒のように』4、中桐雅夫訳)「決断を下して人生を作り上げていくのは目覚めているときのことだと人は思いがちだが、実はそうではない。眠り込んでいるときにこそ、それは起きるのだ。」(マイケル・マーシャル・スミス『スペアーズ』第一部・3、嶋田洋一訳)。それもまた、悲しみの知恵、知恵の悲しみというものなのだろうか。「首筋を這い上がってくる暗喩／一匹、一匹、丁寧に潰して／ミドリに落ちてしまっ

た日々の股座を／いまさらに馳せてどうなるものでもないけど／終わりかもしれないからって、ベエちゃん／涎たらせば／ドロツてこの街道から消えてしまうみたい／合わない今日の膚が不愉快だね／藁のようにとりあえず笑ってみよう／としているがマンホールから出てきた／懐かしい手首が握っている／懐かしい狼藉／すべてが速度をあきらめた実話。「生きるって、感情よ。愛するって、感情なのよ。」(P・D・ジェイムズ『策謀と欲望』第一章・8、青木久恵訳)「もともとの本質からして愛が永続するはずがない」(リサ・タトル『きず』幹 遙子訳)「愛はたえずとびまわらなければならぬ。」(ノヴァーリス『青い花』遺稿、青山隆夫訳)「すべては同じようにはかなく移ろいやすいものだ。少なくともそのために、束の間のもを普遍化するために書く。たぶん、それは愛。」(サバト『英雄たちと墓』第Ⅱ部・Ⅳ、安藤哲行訳)「愛の驚き、」(ハート・クレイン『橋』四、ハテラス岬、東 雄一郎訳)「驚きあってこそその人生ではないか。」(デイヴィッド・ブリン『スタータイド・ライジング』上・第三部・32、酒井昭伸訳)「*varietas delectat*. 変化は人を悦ばす。」(『ギリシア・ラテン引用語辞典』)「変化は嬉しいものなのだ。」(ホラティウス『歌集』第三巻・二九、鈴木一郎訳)「人生を意義あるものにしてくれるのは、危うさだ。人生という地雷源を躍りぬけること。」(ジャック・ウォマック『ヒーザーン』1、黒丸 尚訳)「言葉が不可解だというのは、言葉自身がみずからを理解せず、また理解しようとも思っていないからだ。」(ノヴァーリス『サイスの弟子たち』一、今泉文子訳)「よく見るのだ。」(フエンテス『脱皮』第二部、内田吉彦訳)「人生を楽しむ秘訣は、細部に注意を払うこと。」(シオドア・スタージョン『君微笑めば』大森 望訳)「知覚されないかぎり何一つ存在できない。もし一瞬でも知覚をしくじると、それは永遠に消え去ってしまう」(R・A・ラファティ『宇宙舟歌』第四章、柳下毅一郎訳)「人生のあらゆる瞬間はかならずなにかを物語っている、」(ジェイムズ・エルロイ『キラー・オン・ザ・ロード』四・16、小林宏明訳)「表現者は、あらゆることが表現でき、また表現しようと思わなければならない。」(ノヴァーリス『花粉』25、今泉文子訳)「思考はあらゆるものを、利用可能なものに変える。」(エマソン『詩人』酒本雅之訳)「自分の作り出すものであって初めて見えます。」(エマソン『霊の法則』酒本雅之訳)「なぜ人は、互いに話がしたいのかしら？ つまり人は、相手のどんなことを、いつも知りたいと思うものなの？」(シャーリー・ジャクスン『たたり』第六章・1、渡辺庸子訳)「愛するとは受け取ることの極致である。」(シオドア・スタージョン『一角獣の泉』小笠原豊樹訳)「*in omnibus caritas*. 萬事において愛。」(『ギリシア・ラテン引用語辞典』)「すべてのものが」(ハリントン・J・ベイリー『ロボットの魂』6、大森 望訳)「わたしという」(ジーン・ウルフ『拷問者の影』11、岡部宏之訳)「存在になる」

(ブライアン・W・オールティス『銀河は砂粒のごとく』5、中桐雅夫訳)「作りうる組合せは無数にあり、その大部分はぜんぜんの外(まとはず)れのものである。無用な組合せを避け、ほんの少数の有用な組合せを作ること、これこそが創造することなのである。発見とは、識別であり選択である。」(E・T・ベル『数学をつくった人びとⅢ』28、田中 勇・銀林 浩訳)「とらえがたい選択こそが、成功の秘訣であることを知らない芸術家が一人でもいるだろうか。」(E・T・ベル『数学をつくった人びとⅢ』28、田中 勇・銀林 浩訳)「創造性とは、関係の存在しないところに関係を見出す能力にほかならない。」(トマス・M・ディッシュ『334』ソクラテスの死・4、増田まもる訳)「読書の楽しさは不確定性にある——まだ読んでいない部分でなにが起きるかわからないということだ。」(ジェイムズ・P・ホーガン『マイクロ・パーク』26、内田昌之訳)「世界は、必ずしもわれわれに意味を与えてくれているわけではない。」(サミュエル・R・ディレイニー『ノヴァ』5、伊藤典夫訳)「あるものにとっての知恵は、他のものの知恵ではありません。」(リチャード・カウパー『クローン』34、鈴木 晶訳)「詩はつねに新しい関係をもとめる。」(ウォレス・スティヴンズ『アデーシア』片桐ユズル訳)「新しいものはいい」(ジェローム・ビクスビー『日々是好日』矢野浩三郎訳)「目に映るすべてのものが新しいとでもいうように、」(ハリントン・J・ベイリー『ロボットの魂』6、大森 望訳)「意味が新しくなる。」(ポール・ヴァレリー『ムッシュー・テストと劇場で』清水 徹訳)「見ようとしているものが何だかわかったとたんに、見えなかったものがはっきり見えてくるといった、視覚の不思議な現象がある。」(シオドア・スタージョン『神々の相克』村上実子訳)「驚かされる(、、、)こと、新しいものを生じさせること、それこそ(、、、)、わたしが最も欲していることなのだ」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第一巻、矢野 徹訳)「そう、私は真実を要求した。しかし心の奥底で私が本当に欲望していたのは、脅威だったのだ。」(ミシェル・ジュリ『熱い太陽、深海魚』松浦寿輝訳)「法則に支配される創造性というようなものはないのだ」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第一巻、矢野 徹訳)「どんなものも、くりかえされれば月並みになる、」(R・A・ラファティ『スナッフズ』1、浅倉久志訳)「自分の気持ちを憶えているかね？」(ジョン・クリストファー『トリポッド 3 潜入』1、中原尚哉訳)「むかしというのはいろんな出来事がよく迷子になるところでね」(ロバート・ホールドストック『アースウィンド』4、島岡潤平訳)「ぼくらは人生に迷子となるが、人生はぼくらの居所を知っている。」(ジョン・アッシュベリー『更に快い冒険』佐藤紘彰訳)「どれもが千の顔のひとつであり、二度と見ることはない。」(サミュエル・R・ディレイニー『アインシュタイン交点』伊藤典夫訳)「論理的には全世界が自分の名前になるというこ

とが理解できるか？」(イアン・ワトスン『乳のごとききみの血潮』野村芳夫訳)「この世界が、自分自身なのだ」(ウィリアム・バロウズ『ノヴァ急報』諏訪 優訳)「失われるものは何もなく、役に立たないものもない。おれのしてきたすべてのことが、視線も、息も、ことごとく輝き、巨大に、無限におれ自身になる。」(マイケル・マーシャル・スミス『スペアーズ』第三部・21、嶋田洋一訳)「やがて世界中すべてが、わたしの声と顔、そして手触りに満ちる。」(シオドア・スタージョン『闇の間近で』樋口真理訳)「あらゆるものが芸術になりうるのだ。」(ノヴァーリス『信仰と愛』39、今泉文子訳)「人間が自らを理解すること、人生のあらゆる瞬間を静かな喜びでもって豊かにすること——これこそ、われわれの真の目標だ。」(エドモンド・ハミルトン『虚空の遺産』20、安田 均訳)「そして人生は生きるためにある。」(P・D・ジェイムズ『わが職業は死』第三部・2、青木久恵訳)「詩はもっぱらペンによる所産、一連のイマージュと音との集まりではなく、ひとつの生き方(,,,,,)である。」(トリスタン・ツアラ『詩の堰』シュルレアリスムと戦後、宮原庸太郎訳)「それは矛盾しているためにかえって真実そのものに違いなかった。」(コルターサル『石蹴り遊び』向う側から・9、土岐恒二訳)。「いくつものナマなタマシいが／眼を汚してドブド口のダンス／を生きてゆく街道さ／さびしくひらいたおれの身がさつきから／くさい、くさいだよ、ベエちゃん／美しく折られてゆく角材たちの声が／おやすみ、おやすみって／どうにでもなればいいさ／何ひとつ輝かない夜空の下／吐けなくて、僕は吐けなくて／黒い脈にもうじきキツク縛られ／また塗りたくった朝にまぎれてしまうが、ベエちゃん／ところでおまえはどこへ行っちゃったんだよ／元気かよ」。「美しく折られてゆく角材たちの声が」「黒い脈にもうじきキツク縛られ」てっか。「人間はみんな同一じゃない。」(ポール・アンダースン『タウ・ゼロ』12、浅倉久志訳)「それぞれ異なることばを聞いたのね、わたしたち」(グレッグ・ベア『ナイトランド——く冠毛>の一神話』4、酒井昭伸訳)「それがあなたの魂の夢なのね、」(ブライアン・オールティス『子供の消えた惑星』5、深町真理子訳)「これがほくの魂なんだよ」(イアン・ワトスン『我が魂は金魚鉢の中を泳ぎ』美濃 透訳)「また増えてるのかい？」(ボブ・ショウ『メデューサの子ら』2、菊地秀行訳)「詩人たちにとって書くということはむしろ一種の増殖行為のためにこそある。」(ブルースト『詩または神秘的な法則』保刈瑞穂訳)「夢はいつまでもつきまとう。」(シオドア・スタージョン『火星人と脳なし』霜島義明訳)「それは夢ではなかったのだよ」(ストルガツキー兄弟『神様はつらい』4、太田多耕訳)「それは夢ではなかったのだよ」(ストルガツキー兄弟『神様はつらい』4、太田多耕訳)「おれは身、ひらいて／裡からうにようによ管のびて」「吐けなくて、僕は吐けなくて」。「おれ」と「僕」のディアレクティケー。「黒

い脈にもうじきキツク縛られ／また塗りたくった朝にまぎれてしまうが、ベエちゃん／ところでおまえはどこへ行っちゃったんだよ／元気かよ」「元気かよ」。

きょうは、もう一篇、金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」の第25番目に収録されている、さいごの詩篇「されど偽りの日々」の感想を書く。まず、引用しよう。

謝罪するべき相手など

もういないのだから殴り合っている動物園の

見える位置まで上がってぶらさがっている

やべえ、やべえとおまえは

早々と壊れたスピーカーを放り込んだ胃袋をひきずって

赤身のないルールへ帰っていったが

こうやってぶらさがっているとおまえが懐かしい

なんてことは全くないのだけれど

隣でうす塩味のオッサンの

間接のない話ばかり聞かされて

チクピから痒くなってしまうさ

うんざり

うんざりだが口だけは大きくあけて

(いけぶくろみたいでかつこいだろう)  
一匹の鱗剥がされたタマシいがとんでいる  
そんな書法で  
あの肛門にトガツてゆくなんてゆめうつつ  
きらびやかな筋肉国道賛歌が  
クチビルを削ぎ動かないゆうぐれ  
そのゆうぐれの非常口から  
ダセえ卒塔婆を抱えた娘が顔出すが  
あいにく僕の体を見てごらんなさい  
ひらききってひらききって  
ラリリリラリリリ  
おっぱい揺らしてぴんくな用語だらけの絶対的テレビへ  
帰れよと睨みあう  
おかしなおかしな晩夏  
をムダにしてうつくしいなんて言わないが  
そんなもんだろうママ  
誰だって嫌いな生物を隠していじめているのです  
僕はそう考えるんだが  
そんなことはどうだって、どうだっていい  
そうだろうママ

ただ今はここにぶらさがって  
やわらかなやわらかなケムリを吸いまくって  
毛むくじゃらの質問の意図にグリグリ  
偽りの日々なのさ

見事な終わり方だ。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわしい」のラストに置かれたこの詩篇「されど偽りの日々」の出来のすごさ、そのすばらしさに、ことし51才になる、ジジイ詩人のほくは、ただただこうべを垂れるしかない。「裏切りに基づく生は生とはいえない。」(ノサック『ルキウス・エウリヌスの遺書』圓子修平訳)「裏切りは人間の本性ではなかったかな？」(ソムトウ・スチャリトクル『スターシップと俳句』第一部・7、冬川 亘訳)「私たちの魂は裏切りによって生きている。」(リルケ『東洋風のきぬぎぬの歌』高安国世訳)「だれもが自分を裏切るんだ」(コニー・ウィリス『リメイク』大森 望訳)「以前知らなかった一つの存在を認識したために思考が豊かになっているので、」(ノサック『滅亡』神品芳夫訳)「心が新しい感覚で鋭くなっていった。」(イアン・ワトスン『アイダホがダイヴしたとき』黒丸 尚訳)「あらゆるものがわれわれに向かって流れ込んでくるように見える」(ノヴァーリス『断章と研究 一七九八年』今泉文字子訳)「今まで忘れていたことが思い出され、頭の中で次から次へと鎖の和のようにつながっていく。」(ポール・アンダースン『脳波』2、林 克己訳)「きみの中で眠っていたもの、潜んでいたもののすべてが現われるのだよ。」(フィリップ・K・ディック『銀河の壺直し』5、汀 一弘訳)「何もかも以前とは違って新しくなっているのよ。」(ロバート・シルヴァーバーグ『大地への下降』11、中村保男訳)「すべてのディテールが相互に結びついたヴィジョン。」(R・A・ラファティ『他人の目』2、浅倉久志訳)「あらゆる細部が生き生きしていた。」(R・A・ラファティ『他人の目』2、浅倉久志訳)。

なんというすさまじい詩句を殴りつける詩人が現われたのだろう。いや、そのすさまじい詩句が、金子鉄夫さんという詩人をガツンと殴りつけたのであろう。「作家は文学を破壊するためでなかったらいったい何のために奉仕するんだい？」(コルターサル『石蹴り遊び』その他

もろもろの側から・99、土岐恒二訳)「この世でひとたび掴み得た一つのは、多くのものに匹敵しよう。」(リルケ『ドゥイノの悲歌』第七の悲歌、高安国世訳)「統一の感覚をもつ者は、事物の多様性の感覚、つまり、事物を還元し破壊するために通らなければならぬ微細な無数の相の感覚をそなえている。」(アントナン・アルトー『ヘリオガバルス』Ⅰ、多田智満子訳)「芸術において当然栄誉に値するものは、何はさておき勇気である。」(バルザック『従妹ベット』二一、水野 亮訳)「芸術家にとっての限界はたった一つだけで、それはあらゆるもののなかで最も大きなもの、つまり形式です。」(ディラン・トマスの手紙、パメラ・ハンスフォード・ジョンソン宛、一九三三年一〇月一五日、徳永暢三・太田直也訳)「内容は形式として生まれてくるほかない」(オスカー・レルケ『詩の冒険』神品芳夫訳)「重要なのは形式なのである。」(P・D・ジェイムズ『ナイチンゲールの屍衣』第四章・8、隅田たけ子訳)「このような芸術作品に変えられてしまった自分自身の姿をわが目で眺めるというのは、いったいどんな経験なのか。」(ロバート・シルヴァーバーグ『一人の中の二人』7、中村保男訳)。  
ほくのように凡庸なジジイ詩人が、このすざすまじい詩集「ちちこわし」を書き上げた、若き天才詩人に、このあと、いったいどのような言葉を書きつけることができるだろうか。老婆心じみたことしか書きつけられないであろう。きょう、さきほど書いた、ひとつ手前の感想にも書いておいたのだけれど、フランク・ハーバートとR・A・ラファティの二人の言葉、「法則に支配される創造性というようなものはないのだ」「どんなものも、くりかえされれば月並みになる、」くらいであろうか。こんなことは、金子鉄夫さんなら、とっくにご存じのことだと思われるのだが、あと、二、三の事柄について書き述べておきたい。これもまた、フランク・ハーバートの言葉からはじまる。「持続する唯一の過去は、そなたの中に言葉によることなく存在する。」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第一巻、矢野 徹訳)「魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉、」(プラトン『パイドロス』藤沢令夫訳)「意識からは失われるが、つねに存在する記憶として。」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第二巻、矢野 徹訳)「記憶とはいったい何なのか、」「記憶はあらゆるものを含むということだ。」(ジョン・アッシュベリー『波ひとつ』佐藤紘彰訳)「すべての真の詩、すべての真の芸術の起源は無意識にある。」(コリン・ウィルソン『ユング』4、安田一郎訳)「感受性の強い者や想像力のたくましい者は、通常の意識よりも潜在意識を働かせている」(ウィリアム・F・テンブル『恐怖の三角形』若林玲子訳)「芸術は意識と無意識の結婚なのだ。」(ジャン・コクトー『ライターズ・アット・ワーク』より、村岡和子訳)「専門用語に気をつけることよ。それはたいてい無知を隠し、知識を運ばないものだから」(フランク・ハーバート『デューン

砂丘の大聖堂』第三巻、矢野 徹訳)「真の知識にとってなによりも有害なのはあまり明瞭でない知識や言葉を使用することである。」(トルストイ『ことばの日めくり』四月十八日、小沼文彦訳)「何かを知っていると考えるときは、それが学習に対して最も完璧な障壁になるのだ」(フランク・ハーバート『デューン砂漠の神皇帝』第二巻、矢野 徹訳)「<知性>の第一の義務は自己に対する懐疑である。これは自己軽蔑とは別物だ。」(スタニスワフ・レム『祛数』GOLEM XIV、長谷見一雄訳)。

金子鉄夫さんに、もっとも言いたいことは、これかな。ほくを含めて、だれの言うことも聞き入れてはいけないんじゃないかなってこと。とくに名前の知られた詩人や批評家の言葉には耳を傾けてはいけないんじゃないかなってこと。詩を書かない、言葉に敏感な友だちに読ませて、その友だちの言葉を検討すること。それが、ほくには、いちばん大事な気がする。ほくの詩を評してくれたたくさんの詩人や批評家の言葉で、ほくのためになったものは、たった一つしかない。この20年以上書いているほくにでもね。詩を書かない、言葉に敏感な友だちの言葉には、ずいぶんたくさん助けられた気がする。自分が気がつかないところに気づかされるのがよくあった。そういう友だちを持ってない詩人がほとんどじゃないかなって思う。その詩人たちの表現のまずさを目にすると。生きている詩人には嫉妬がつきまとう。つまらない感情だが、すぐれた詩人が生きているあいだに名前を知られない理由の一つだ。無視できるほど小さくはない要因の一つである。詩を書かない、すぐれた言語感覚をもつ友人をもつこと、ほくにはそれがいちばん大事なことのように思える。そういった友だちをかつて持ち、いまは失くしたほくが言うのだけれど。さきほど、金子鉄夫さんのツイットに、詩集「ちちこわし」の詩篇を書き直していくとあった。完璧な文体を書き直そうというのか。ほくのような凡庸な詩の書き手には考えられないことである。どういったものになるのかたいへん興味深いのだが、見たくない気持ちもある。完璧だと思った詩篇が崩れるのを見たくないという気持ちからだ。多くの詩人が若いときにすばらしいものを書いた後、自己再生産というか、よりひどいものを書くという悲惨な事実を何度も目にしてきたからでもある。これもまた老婆心と嫉妬心によって、ほくの口から出た言葉であろうか。しばしの別れ、すさずさまじき破壊的な癒しの力を持った詩集「ちちこわし」よ。徹底して意味のない、徹頭徹尾、美しさもない、完璧にくだらない詩篇たちよ。その詩句は、ほくの意味のない、美しくもない、くだらない人生のさまざまな瞬間に光をあて、ほくの意味のない、美しくもない、くだらない人生を、生き生きとしたものにしてくれた、まるで、

キングオブコメディのすぐれたコントのように。じっさい数日まえから嗅覚が少し戻っているのだ。何人かの友だちにも、さいきん元気そうだと言われている。詩集「ちちこわし」のおかげだと、ほくは思っている。ほくが詩集を読んで、もりもり元気になったのは、何年かまえに、ジェイムズ・メリルの詩集を読んで以来のことである。ジェイムズ・メリルも天才だった。金子鉄夫さんも天才だと思う。そう電子データに書いたのが、ほくがさいしょであればいいと以前に書いた。いまでも思っている。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」に収録されているほとんどの詩句をキーボードで打ち込んだほくの両手の指先も確信している。ほくの手の指先は、ほくの神さまなのだ。だから、ほくのこのころのことをいちばんよく知っているのであった。

これは、ほくのはじめての詩集評だけど、自分のなかではメルクマールになるようなものだと思う。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」出現以前と以後に、日本現代詩史は別れると思う。その現場に行き合わせて、ほくはひじょうに幸運であった。そうして、ほくもまた、はじめ直さなければならなくなったのだ。

そうだ。金子鉄夫さんの詩集「ちちこわし」には、あとがきも、初出一覧もなかった。ほくの『The Wasteless Land』シリーズの詩集にも、あとがきや初出一覧がない。(一冊、「詩論詩・集」だけ初出一覧がある。) こんなところもまた、ほくが共感するところである。潔いと思う。あとがきって、なんか潔くない感じがするんだよね。初出一覧も、なんか潔くない感じがして、ほくも書かない。金子鉄夫さんの詩集がスタンダードになって、潔い詩集が増えればいいなって思う。ずらーっと書かれてる初出一覧を見て、バカみたいだなって思ってるのは、ほくだけだろうか？

そして、さいごのさいごに、自殺したSF作家、トマス・M・ディッシュの言葉を、もう一度、引用しておこう。これは、何度、引用されてもよい言葉だと思う。何度でも引用しておきたい言葉である。「創造性とは、関係の存在しないところに関係を見出す能力にほかならない。」(トマス・M・ディッシュ『334』ソクラテスの死・4、増田まもる訳)。たしかに。たしかに。

# 編集後記

へんしゅうき

今号では回線を止められてしまったり、記憶を失うなど、いろいろな困難がありました。それからさらにいろいろあつて実家に帰り、今は山形の某所に軟禁されています。そんな中で、骨おわりダンス」に携わってくれた皆さんと、また読んでくださった皆さんに感謝します。本当にありがとうございます。

S

編集後記兼「ちちこわし」のあとがき

吐かなければ。今、すぐにゲロというゲロを吐かなければと焦っていたし、そうしないとヒトノカタチが崩れるのではないかと、でも、ずつと不穏な吐き気でくるしみながら何をしても吐けないですつとこの年までもだえにもだえてきた。が最近、予感することは吐けないであろうということ。

吐けない。  
でも、そこに絶望なんてくだらないものはもう、ない。結局、吐けないけれども、もしかしら、存在の胃袋にしこたまゲロを蓄積しながら最後は爆発するかもしれないけれど（それもそれでポップな感じでもいい）、その吐こうとする意志さえあれば何も問題ないような気がする。それを切実さ、なんて微臭い言い方でスカすのではなく、ただ吐くために前へ、もつれながら至つてへらへらしながら一歩、一歩、千鳥足でもすすみだし、増殖する「眼前のゾーン」を前提としながら、愛するということであつたりもする。だが、決して、愛するということも完全になることなどない。グタグタと理屈をこねながら、どうにか吐き気が、愛するということが、完済されることを目指して、解体しては構築するのではあるが、完済されることがあつたためしはない。そして、ゾーンは、その襲いすべてを絡ませながら、やつぱり在るがままに眼前に曝け出されているだけ。だからこそ、その「眼前のゾーン」に対して、吐けないけれど吐こうとする、愛するということ報われることなどないが愛し続けようとするプロセスだけが重要だつたりもする。結果など最初からないし、過ぎてみれば結果さえも小さな点と化してすごいスピードで次への「眼前のゾーン」へと接続されている。今できる最善の対策は吐き気を催しながらも吐けないくるしみを楽しむようにポップにひるがえし泣きながら笑いながら泣きながらラブ&ピースな明るいビートを夢見ること。そして、これからも流すであろう血がどうにか七色に変色するように努力して、どんな努力でもいい、それがまやかしてであろうと、ラリるように愛すること。それだけ、それだけでいい。在るがままはくだらなくて、いつだって「眼前のゾーン」は最悪だ。だからこそ、サイケデリックに攪乱するために、飛躍し過ぎて浮き足立った不埒な想像力だけが真実。その不埒な想像力を駆使しながらときには不道徳にときには厳格な倫理をもって救済はないが悪意をもってケツを振り続けシェイクしよう。吐けない純びだらけの破綻し切ったカラダではあるが、いつだって虹への変身を志向しよう。大丈夫、この先、変わらずに終始、ノーフューチャーではあるが、未来はあかるい。

そして改めて言おう。伝えるためにうたうことを。あなたに。

K

## 詩誌 骨おりダンス Vol.09

編集長：鈴木 一平

編集委員：金子 鉄夫 + 橘 上 + 吉田 恭大

デザイン：三澤 水希

連絡先：sippei703@yahoo.ne.jp (鈴木)

発行日：2012年8月20日

撮影場所：高田馬場

次号：10月中旬 発行予定

### 9「舞台写真について」

夏は眠りが浅いから、  
何回も寝たり起きたりしているうちに、それが劇場だったのだと気づく。  
廃屋に近い軒家の一階で、二人の役者が寝たり起きたりしている。  
たとえばあなたと私が夫婦であっても、  
一緒の時間に寝て、一緒の時間に起きて  
というのはそもそも体に良くないのかもしれない。  
「ふね」のある田原町は浅草の隣で  
どこを歩いてもスカイツリーがよく見えた。

### sons wo:

「めいしや」東京公演

会場／ふね シェア客間

期間／2012年7月19～22日

作・演出／カゲヤマ气象台

出演／椎谷万里江（拘束ピエロ）・新上達也（劇団森）

撮影／吉田恭大